
真・恋姫十無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！(改悪？版)」

日時々雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！（改悪？版）」

【Nコード】

N2814Z

【作者名】

日時々雲

【あらすじ】

ちよつと、どころではない環境で育ってきた、口の悪い主人公が頑張りのお話。彼の存在は、外史にどのような影響を与えるのだろうか。

（とあるサイトにて、投稿してたのに手を加えたものです）

はじめに

この作品は、とあるサイト（名前出しは、一応止めておきます）で投稿していたものに手を加えたものです。

改良もあれば、改悪の部分もあつたりします。

初見ではわからないですから、問題はないのですが。

極力コメディにしたいですが、シリアスを含んじやいます。

まだまだ経験が足りないので、拙いです。

そして、原作キャラのキャラ崩壊が結構激しいです。

さらに、オリキャラも多数（10ぐらい？）存在します。

さらにさらに、主人公は（自重はしてますが）チートです。

最後に、アンチっばいのを含みます。

そんな要素が苦手、もしくは嫌いな方は、backでお願いします。

かなり長くなりそうですが、どうかお付き合い下さい。

第一話（前書き）

プロローグというやつ？？です。

第一話

昔、むかしはるか後漢末期。

ある所にある少年がいた。

容姿は悪くなく、むしろ世間一般から見れば良い方だと言えるだろう。

そのくせ着ている服はみずぼらしく、貧しさだけで服が擦りきれてぼろぼろになっているとは言い難い格好である。
そんな少年がいま、暗い暗い穴の中にいた。

「……ううん、冷たいし、かてえなあ。下が土だから当然といえば当然かあ？」

(土？あん？)

「なんでこんなところにいるんだっけか？」

さかのぼること数刻前……

「うう……、腹が、げ、限界だ！」

少年は森のなかをさまよい歩いていた。
言わずともわかるであろう。
食糧調達の為である。

最後の食糧が尽きて数日が経っており、足元はふらつき、体力はもう限界だった。

「こんなことになるなら、最後の食糧をあつちやにやらなけりやよかつたぜ……。でも、ああも嬉しそうに食つてたし、しょうがねえか」

(やっぱり動物には優しくしないと、なあ。

動物愛護家たるもの、そうする義務があるぜ)

などと、独り言を呟きつつ、歩を進める。

「……って、楽観的になつてる場合じゃねえ！ 僕……俺の生死に関わる問題だ！」

(まあ、別に俺がここでのたれ死のうが悲しむ人なんていないからいいんだけどな)

ヒステリックになつては、皮肉げに笑みを浮かべ、コロコロと表情を変えながら、さらに奥へと進んだ。

「おっと、あれは……」

すると、何故か地面から30〜40cmほど宙に浮いている(正確にいえば、吊るされている)林檎があつた

「……やった！ す、数日ぶりの食糧だツ！ この際、なんで浮い

てるかなんて気にしねえ！」

いつもの少年ならば、当然畏だと警戒したであろう。しかし疑ってかかる暇も惜しむほど、腹を空かせていた彼は何かにとりつかれたかのように飛びついた。

この少年、馬鹿なのだろうか。

「いっしょよっしゃあ！ うむ、では早速、頂きm……」

（あれ？

なんだこの浮遊感は。

……嬉しすぎて、天に召されてるとかか？
洒落にならねえぞ！）

絶賛落下中であるのにそんなことを考えていられる辺り、結構余裕があるのかもしれない。

「まだ、まだ死にたくなああー！ いたっ！ ぐおおお……」

深くはないが、浅くもない穴底に尻から着地した少年は、急いで尻をさする。

「ケツがああああ！ ふう、結構痛いじゃないか……」

辺りに誰もいないのに 穴の中なのだから当然だ 平静を装う少年。

本当に馬鹿なのかもしれない。

「つか、痛いだあ？ はっ！ また、死に損なっただか」

少年は、小さく憎々しげに呟いた。

「しかし、まぬけだなあ、おい。しかも、若干深めで出れねえし。……ま、林檎食べて、寝ますかね」

見れば誰もが、猪を捕らえる為の罠である、と気付く罠に引っ掛かった状況でなお、楽観的だった。もう、馬鹿で良いのでは。

「う、……思い出ただけで、なかなか恥ずかしい」

(うん、これから気をつけよ。
だがな作者、貶しすぎだろーが)

思い返した少年は、深く反省することにしたようだ。
とりあえず、メタ発言は止めましょう。

「しかし、いい加減出ないと不味いな。……近くに助けってくれる人はいねえかなあ？」

期待はしねえが、な。

都合良くいるはずがないことをしりながら、そつ声をもらした。

同じころ、ある少女もまた森の中にいた。

「初めて仕掛けた罫だったんだけど、うまくいったかな？」

初めてにしては上手すぎだわって伯母上様に言われたけど……大丈夫だよな？

そう小さく呟きながら、森深くに進んでいった。

「たしか、ここら辺に仕掛けたはず、なんだけどなあ……。」「森に入って早、半刻（一時間）。

少女は、未だに見つけられないでいた。

「うーん、間違えたかなあ……。ん？」

「……思い……。……。けで、なか……。……。しい」

（声？が聞こえる……。捕まって騒いでるのかな？）

そう疑問に思い、そっちに足を運んだ。
すると……

「近くに助けってくれる人はいねえかなあ？」

……そんな声が聞こえてきた

（うん、ここは十八番しかないよね

あ、どこで十八番なんて言葉を知ったかは、ひ・み・つゝ

メタ発言は止めて欲しい。

「ここにいるぞー」

はっきりと、自身の代名詞である言葉を、声高々に言い放った。

「って、何処にだよ！」

とツッコミつつも、内心は安堵と驚きで一杯だった

たしか朝方、森に入ったとき晴天だったはずなのに、ほとんど光が入ってこない。

すなわち、木が生い茂っていて、かつ、かなり長く歩いていたはずだから森深くにきている……。確実に誰もいなくね？

と、判断していたので、当然と言えば当然である。

思考に耽っている少年を尻目に、少女はひょっこりと顔を穴へと出し、口を開く。

「ここだけど」

至極当然、単純明快なことであったのに、何故ツッコんでしまったんだろう、と少年かは少し後悔した。

「どづかしたのー？」

「いや、少し考え事をね。えと、この穴から出たいんだけど、若干深くて出れないから手伝ってくれないか？」

「うん、いいよ　ちょっと待っててね」

待つこと、ほんの一時

植物のツル？が、少年の元に落ちてきた。

「それに掴まってね。案外丈夫で切れないから安心してね」

「ありがとう」

少年はツルを何度か引つ張り、強度を確認すれば、本当に一人を吊るしても切れないだろう、と思うほど丈夫だった。

若干の警戒をしつつ、それをつたってよじ登ると、穴から出たところにさっきの少女がいた。

（さっきは光が少なかったから見えなかったけど、かなり可愛いなあ、おい）

と、少年が内心想うほどの頭に美のつく少女だった。

「ホント助かったよ、ありがとう。ええっと」

「たんぽぽはねえ、馬岱ってゆづの」！

これが少年と馬岱との出会いであった。

そして、後に、彼の少年は親友にこう語った。

「この頃かな、俺の掘った深い穴に光が射し込み始めたのは」と

第二話

日も少しだけ傾き始めたころ、中庭に五人の人物がいた。うち二人はそれぞれ獲物を携えていた。

（いきなりだが、どうしてこうなった！！）

相対する二人のうち、片方は頭を抱えなくなっていた。

（冗談じゃねえぞ！

だってよ、目の前で女が十文字槍を振ってるんだが、風を切る音が尋常じゃないんだぜ？）

勿論、槍の刃は潰してあるのだが、そこは最重要問題ではない。

というより、当人にはそんな些細なことはどうでも良いことであつた。

一番に気にしているのは、何故闘わないといけないか、それも女とということだ。

（まあ、何度考えても行き着く答えは一つだがな……）

そう考えながら、闘うはめになった原因の女性を睨みつける。

睨まれている張本人は、それを笑顔で受け流している。

どうやら実に楽しみにしているようだ。

10メートルほど間をあけ対峙し、戦わんと相対しているのは。

穴に落ちていた少年　真名を陽という　と、そこから這い上が

る手伝いをし、ここまで案内してくれた馬岱の従姉妹である馬超であつた。

「うっし、準備できたぞ！ さあ、始めようぜ！」

準備運動したほうがいいのでは？

本当に闘いたくない陽はそう問いかけ、無駄と言える時間稼ぎをしていた。

結果、実力を目の当たりにしてしまいさらに頭を悩ませたのは余談である。

「ホントに止めにしませんか？ 僕みたいな弱くて、剣を使ったこともない初心者と戦っても楽しくないでしょうに」

「いや、駄目だ！ 母上が強いつて言ってたんだ。やるったら、やるぞ！」

（あの女の言うことを信じているのかよ。

まあ、母親だったらしいの言だから当然とも言えるが、本当にやめてもらいたいんだが）

陽はよりいっそう落胆して肩を落とし、深いため息をついた。
すると

「じゃあ、いくぜ！ ハアアアア！……！」

「ちよっ、待つ、いやあああ……！」

馬超は真っ直ぐ陽の方へ駆け出した。

何の構えもしてなかった陽は、逃げるより他なかった。

「あつ、コラ、逃げるなっ！」

「いいいやああだああ！」

真剣勝負になるはずが、鬼の変わらない鬼ごっこになりかわってしまっていた。

一刻前……

二人は森を抜けるべく歩いていた。

一人は軽快だったが、もう一人はおぼつかない足取りだった。

やはり、林檎一つなど気休めにすらならなかったようだ。

「ねえ、ホントに肩を貸さなくても大丈夫？」

「うん、大丈夫。その気持ちだけ貰っておくよ」

フラフラと歩く様子に、馬岱はちよくちよく気にしてくれているようだった。

だが、森の外まで案内してくれてさえいるのに、これ以上借りを作るのは不味い、と陽は判断し、感謝の言葉を述べるのみに止めた。

「そういえばさあ、何であんなところにいたの？」

「いや、まあ、その……」

(非常に答えにくい質問を……)

そう、陽は心の中で呟く

少し前に思い返していたことなので鮮明に覚えていたが、話すのを遠慮したいほどの失態だったため正確に答えるか否か迷っていた。しかし、助けられた身分であつたので簡潔に事の成りを話すことにした。

「あははっ、バカだねえ」

満面の笑みでいいのける馬岱。

そこには侮りも呆れの感情もなく、心底愉快そうだった。

馬岱の一言が陽の心に突き刺さる一方で、その笑顔に釘付けになっていた。

「どうしたの？ たんぼぼの顔に何かついてる？」

「いや、ただ笑顔が可愛いな、と」

「……っ！ や、やだなあ、もう！」

(頬が赤くなってる。

……熱でもあんのか?)

如何にも鈍感らしいことを思考する陽。

馬岱が顔を赤くしたのは、不意討ちの称賛の言葉に免疫がなかった

為だ。

それは、彼女の血筋特有のものである。

「ええ」と、とにかくお腹まだ減ってるんでしょ？」

「いや、問題ない…『ぐう』…こともないです」

慣れないことをはぐらかすように、あからさまに話題を変える馬鹿。それを気に止めず、否定の意をこめたやせ我慢で返事をするつもりが、陽自らの腹の音に敢えなく失敗する。不様である。

「じゃあさ、家にこない？ 伯母上様も歓迎してくれるよ！ 伯母上様の作る料理本当に美味しいんだから！」

(伯母……ねえ)

親はいないのだろうか、この子は伯母の何を知っているのだろうか、何をもって歓迎してくれるといいきれなのか、実際に歓迎してくれるだろうか。

と、黒い思いを一瞬頭に廻らす、すぐに尻ぎ払われる。

陽の頭の中を占めるはご飯のことばかり。

「お言葉に甘えて行かせて頂きます！」

何故か張り切る陽。

幾分か足取りが軽くなったようだ。

こんな腹ペコキャラにするつもりはなかったのだが。

意外と近かつたらしい馬岱の家のある畠。
何度もいるいるな人に声をかけられながら
だが、奥へとぐんぐん進んでゆく。 実際は馬岱のみに、

「ここがたんぽぽの家だよ」

なんだ、ただの県城か。
少しだけ現実逃避をしたくなった。

（城住みで、かつ見知らぬ奴を勝手に入れられる自由さ。……伯母
はかなりの権力者か。

……馬岱もあつち側の人間らしいな）

陽は燦ぶる思いを胸に、馬岱に連れられ、庭を迂回して厨房の裏口
にまわる。

其処には一人の女性が立っていた。

「只今戻りました伯母上様！」

「お帰りなさい。畠の方は……失敗したようね」

女性は馬岱の手に何も無いことを見て、そう言った。
猪が本当に取れていようがいまいがどちらでも良かったので、そん
なに気にすることはなかったようだ。

「猪捕まえるのには失敗したけど、代わりに人間捕まえちゃったよ」

「……捕まえたのってそつちの子?」

「うん」

(あん? こつち見んなよ)

女性と陽は、視線を交わす。

睨むように見る陽に、女性は笑みを浮かべた。

「……蒲公英が初めて捕まえたのは食べないとね」

「ええっ!」「……は?」

女性のとんでも発言に、心底驚く馬岱と、何言ってるのこイツ、みたいな視線を送る陽。

「冗談よ、冗談 大方お腹を空かせてるからって連れてきたのでしょう?」

「……う、うん」

「だったらご馳走してあげないと」

そういつて女性は厨房に入っていた。

女性を観察する為、口を開かないことにした陽だったが、きつい冗談には嫌でも反応させられことに、少しだけ感心した。

(成る程、厄介だ)

そう、深く思いながら。

「……じゃ、じゃあ中に入ろっか」

あの冗談は馬鹿にも効いたらしく、少しだけ気まずそうだった。陽は気にすることなく黙ってついていった。

「さあ、た〜んとお食べ」

陽の前の机に、結構な量の料理が並べられる。

(どんな時間配分したらこんなに早く出来るんだよ)

自分自身で作ったとしても、これほどは早くはできないので、心からそう思う。

……涎をだしながら。

だからこんな腹ペコキャラにするつもりは(r y

「本当にいいんですか?」

「ええ、早く食べないとさめちゃうわ」

「……では、頂きます」

一度合掌する陽。

陽自身、自分がなぜ食べる前に合掌するのかわからないでいるのだ

が。

幾度となく思考してきたことを頭にしまい、料理を口に運んでいく。

(美味しい)

そう思いながら、ものすごい速さで消費してゆく。

その速さは隣で食べている女の子に匹敵した。

「かなりあつたのに綺麗に平らげたわねえ」

「ご馳走様でした」

もう一度合掌する。

量に加え、質も良かったので、陽は心底満足していた。
そこに突然……

「坊主よ、剣をとったことはあるか？」

……違う女性が声をかけてきた。

「ないですけど」

「そうか」

「何か問題でも？」

「いや、問題はないんじゃないが、少し思いつとくるがあつての」

うづむ、といいながら思考する女性。

陽自身も、何がなんだかわからなかった。
脈絡もなければ、剣に触れたこともないのに、先のように声を掛けられたのだから、当然だろう。

「わからないなら闘って貰えばいいんじゃない？」

片付けを終え、戻ってきたさっきの女性が言う。

「ふむ、それもそうじゃのう」

「翠、この後暇だったでしょう？」

「ん？ そういやそうだな」

陽の隣で食していた女の子が反応する。

「だったらこの子と闘ってみなさい」

「はあ？」「えっ！」

女の子と若干空気になっていた馬岱が驚きの声をあげる。

「この子多分強いわよ」

「よっしゃ！ならやるぞ！」

迷わず返事をする女の子。

そうして勝手に話は進み、そして冒頭へと戻る。

実はこの会話、陽は殆ど聞いていなかった。

ずっと、剣についてを考えていたのである。

しかし、強引に連れて行かれ、成り行きを話され、対峙させられたのだった。

逃げる陽、追う馬超。

この後日が暮れるまで続いた。

この時の事を陽は語る。

「あのときの翠姉の目はマジだった」と

第三話

辺りはすっかり暗くなったころ。
城内の廊下を歩く五人がいた。

「明日だ！ 明日は絶対やるからな！」

「丁重にお断り申し上げたいです」

「やるつたら、やるからな！」

「嫌です、ホント勘弁して下さい」

「明日の朝またあの中庭だからな！ 必ず来いよ！」

「人の話を聞きましょうよ……。絶対行きませんから」

先の一騎討ちで闘えず、不満気な顔を露にしながらも再戦の約束を
こぎつけようとすり馬超。

命からがら逃げ延び、疲れきった顔をしながら丁寧に全て断ってい
く陽。

諦め切れない馬超。

闘いたくない陽。

そこに、不意に助け船が現れた。

「はいはい、そこまでよ！ とりあえず部屋に入りなさい」

「むう〜」

無理矢理切り上げられたと思った馬超は少々むくれるが……

「明日のことはご飯のあとでゆっくりとね」

……船が出されたのは馬超の方であった。

嬉々としている一方で、もう一方は激しく項垂れていた。

「「「「「馳走様でした」「」」」」」

「お粗末様でした」

「やはり牡丹の作る飯は旨いのう」

「ふふっ、料理だけは薊あひまに絶対負けない自信があるわ」

「他でもわしに勝ってみせる癖に料理だけとはよく言つもの。嫌味か？」

「そんなんじゃないわ。他はうかうかしているとすぐ追い抜かれてしまつほど不安定なものじゃない。内心冷や冷やしてるんだから」

熟女どう、オホン……お姉様方で話が弾んでいるようだ。

牡丹と呼ばれた女性は、娘の馬超と同じように、（むしろ娘が真似してゐるのであるつか）濃い赤色の長い髪を頭の頂点より少し後ろで一つにまとめている。

そして、薊と呼ばれた女性は、薄めの紫の長い髪を後ろで2つに分けている。

二人とも、歳よりも若い雰囲気を持っている。

（それにしても、旨かったなあ）

そんな二人を気にも留めず、陽は料理の評価をする。

だから、腹ペコキャラ（ry

（……って何でまた馳走になつてんだよ！

逃げにくくなつちまつたじゃねーか！

ちっ！ あのととき逃げる好機だったのによお……。

あの猪娘、足速すぎなんだよ）

元々の陽のプランでは、昼飯を食べたら目を盗んでとんずらしようと試みていた。

しかし、突然闘わされる羽目に 実際逃げていただけだが なり、その所為による空腹に身を任せて流されるがままにしていたらいつの間にか……であった。

どうやら流されるのが得意なようである。

馬鹿、ともいえるが。

「そういえばこの子、名をなんといいのかしら、蒲公英？」

「あはは、……聞いてなかった」

不意に、牡丹と呼ばれる女性が、蒲公英に問い掛ける。

しかし、今の今まで聞いていなかったと気付いた馬岱からは、渴いた笑い声が響く。

「あはは、じゃないだろ！全く！」

「それで、なんというの？」

「姓名はありません、訳あって捨てました。ですが、命を助けて頂きましたのでどうか真名の陽、とお呼び下さい」

正直、名前を教えていなかったことを、陽は知っていた。

しかし、これで会うこともないだろう、と考えていた為、敢えて教えようとは思わなかったのだ。

やはり悔れない、と陽は思った。

「そう……わかったわ。私たちも名乗りましょう」

名前を聞いて満足だ、と言わんばかりに笑みを浮かべ、牡丹と呼ばれる口を開く。

「私は馬騰、字は寿成、真名は牡丹よ」

「儂は韓遂、字は文約、真名は薊じゃ」

「あたしは馬超、真名は翠ってんだ」

「蒲公英の真名は蒲公英だよ」

各々で自己紹介する四人。

陽には名前はどつだつていいのだが、いきなり真名は不味くないか、とは思った。

「此方は真名ぐらいしかお礼に渡せるものがないのでお預けしたのですが……よろしいのですか？」

「よろしいのよ」

（軽いなおい！）

馬騰による即答にツッコミたくなつたが、陽は自制した。

「……わかりました。大切にお預かりさせて頂きます」

（ま、別に構いやしねえさ。

どうせ会つのは今日かぎりなんだからな）

夜中にも出て行こうと思つていた陽には、四人の真名など、本当に些細なものだった。

「そう思つていたときもありました」

ある部屋で、独り言を呟いて頭を抱える者がいた。

先ずは、前言撤回からしなければなるまい。

夜逃げは夜するもので、朝にするものではないからである。

今までになかった結構な待遇を受けた陽は、戸惑っていた。
何時も通り逃げるか、否か。

（夜逃げ、ダメ、絶対！）

という温情に対する背徳心や罪悪感。

（夜逃げ？

はっ、違う違う。

俺は帰るだけさ、家と言う名の広大な大地に！）

という無茶苦茶な合理化による夜逃げの正統性。

この2つによる余りくだらない葛藤の末、結局夜逃げを選択した
陽。

早速、扉の取っ手に手をかけ、押すが開かない。

何度も試みるが失敗する。

蹴破つてやろうか、などと一瞬思つが、流石に夜逃げをするに音は
立てられまい、と諦め。

さらに、此処までの旅路の疲労、頭をフル回転させた副作用による
突然の睡魔。

少しだけ、と寝台に就き睡眠。

起きたらまさかの朝。

という、なんとも馬鹿馬鹿しい展開である。

「お〜い、起きてるか〜 飯だぞ〜！」

突然扉を押し入ってくる馬超に、思考が遮られる。

(ちょっと待て、今馬超は押し入ってきたよな)

陽は、凄く死にたくなつた。

そんなこんなで数刻後……

今日もまた、陽は中庭に剣をもたされ、立たされていた。

「お腹が減りました」

「嘘つけ！ さっき食つたろ！」

「ちょっと厠に……」「さっき行ってただろうが！」「……むっ」

「準備運動は……」「もう終えた！」「……ぬっ」

「ああ、もう！ さっさとやるぞー！」

しびれを切らしている馬超。

どうしてもやらないと気が済まないらしい。

「は、初めてなんです！ 優しくしてください」

「どごその生娘の言葉か！」

まさかの韓遂から突っ込みが入ったことに、陽は少し驚く。そしてそのまま、なかなかやる人だ、などと意味のわからない評価をした。

陽がまだまだふざけていると、馬超が怒りで震えだした。

（そろそろやめようか）

少し、腹を括った。

「はあく。じゃ始めましょうか」

そう溜め息をつきながら、適当に構える陽。

剣を握ったことすらなかったはずが、自然と寸分の隙もない中段の構えをしていた。

「へえ」「ほう」

牡丹と薊は揃って感嘆の声をあげる。

やはり見立て通りだ、と二人は思った。

「あれが初めて剣を持ったやつに見えるか？」

「見えないわね。どう見たって熟練の剣士の構えじゃない」

「そんなに凄いの？」

馬岱が二人の会話に割り込む。

少しばかり槍術をかじっている為、剣とはいえ興味を惹いたらしい。

「そうじゃのう……翠はもしかすると負けるかもしれん」

「えっ！ お姉様が！？」

韓遂の言葉に、馬岱は驚く。

同じ槍術を習つ、自分より遥かに強い馬超が負ける、と聞かされたのだから当然であろう。

「ええ、そうよ。蒲公英もこの闘いをしっかり見ておきなさい」

「はい！ 伯母上様！」

その元気の良い返事のすぐ後に、均衡は破られる。

「ハアアアアア！！」

雄叫びと共に槍を携え真っ直ぐ突っ込んでくる馬超。

馬超の流れるような降り下ろし、薙ぎ、切り上げなどの怒涛の攻撃が、容赦なく襲ってくるのが陽の目に映る。

本来ならば、見えるはずのない左目にも、である。

陽は普段、右目でしか世界は見えない。

何故なら、左目は包帯で封じているからだ。

そこに、無いわけではない。

見えすぎるから、封じているのである。

にもかかわらず。

ちょうど馬超の一撃一撃と重なる太刀筋が、陽の左目には見えていた。正確には、瞼の裏に浮かびあがってくるような感覚だった。

それに伴って、ズキズキと左目に痛みが走る。

それに耐えながら、陽は馬超のあらゆる攻撃を全て、避け、反らし、受け流す。

身体が覚えていると言っべきか、頭の記憶が身体を動かして言っべきか。

とにかく、全ての攻撃に対して身体が勝手に動いていた。

それは陽自身もよくわからない不思議な感覚だった。

「あたしを舐めてるのか！」

「……………」

一度攻撃の手を休め、下がりながら馬超は言い放つ。

なかなか攻撃しようとしないう陽に怒っていた。

しかし、陽は答えない。

「チツ！」

舌打ちをしながら、馬超は一気に距離を詰め、急所である喉元を狙い突く。

その瞬間、今までにない激痛が陽の左目に走った。

中庭に二人立っている。

一方は刃を相手の喉元に突き付けており、もう一方は腕が弾かれ無防備な状態であった。

しばしの静寂のあと、一人が地面に崩れ落ちていった。

剣を落とし、左目を押さえながら。

「知らな……知っている天井だ」

何せ昨日の夜、今日の朝に見たのだから、当然である。

「あつ、起きた？ 伯母上様たち呼んでくるね！」

「あつ、ちよっ！」

馬岱の閉めた扉の音が無情に部屋に鳴り響く。

（ちよっとぐらい待ってなくても良くね？）

半ば無理矢理相手をさせられたのだから、もうちよっと労って欲しかったようだ。

闘いといえは、さっきの痛みは何なのだろうか、と陽は包帯の上から左目を撫でる。

（しかし、だ。

ちよっぴり頬が赤かったのは気のせいだろうか？）

一通り考えたが、分からぬことは分からぬ、ということと陽は思考を投げ捨てた。

そして、先程の馬岱に対する思考を始める。

暇つぶしにもなるので、考えることは好きなのだ。

その後、すぐにいつもの四人でやってくる。
そんなに暇なのか、と思わせる出現率だ。

「陽、アナタの武、凄かったわ。その後すぐに倒れたけど大丈夫かしらっ。」

「……まあ、異常はありませんね」

「本当にお主、剣を振るったことも、持ったこともないのか？」

「……ありません。嘘を言っても仕方ありませんし」

「本当に初心者に負けたのか……」

質問に簡単に答えていく。

若干項垂れている馬超を、陽は気にしないことにした。

「それで、提案なんだけど。……うちにこない？」

「はあ？」

「うちで働いてみないかってこやつは聞いているのじゃ」

「はあ……」

(コイツ、馬鹿だろ)

若干驚き、そして呆れる陽。

予想外の勧誘に、つつい余計なことを考えてしまう。

「なんだったら、家族にならない？」

満面の笑みを浮かべる馬騰。

「「「「はあ!？」「「「「

そんな話を聞いていない四人は、満場一致の驚愕だった。

この時のことを、陽は親友に語る。

「あれは俺の人生の中で二番目に驚いたことだった。一番は、お前に会ったことだがな」と

第三話（後書き）

自己紹介が二話目で、とかw

第四話

「……朝、か」

隙間から僅かばかり入ってくる光に、陽は目を覚ます。

その光が疎ましいと思わなかった日はない。

陽は物心つく前から朝が苦手、否嫌いだった。

また明るる日が来たという合図であり、自らの持つ真名と同じ字を持つ、太陽が何よりも嫌いだからであった。

まだ醜態を晒して生きているのか、と問われている気がして。

自らの真名と比較され、見下されているような気がして。

「戯言だな」

毎朝やってくる嫌悪感を振り払い扉に手をかけて引く。

さすがに1週間前と同じ過ちは犯さないさ、と心で呟きながら部屋から出る。

日課となった剣の鍛練をするために中庭にやってきた陽。

朝の運動にはもってこいであった。

いつも通り 剣の重さと長さに違和感を覚えながらも ゆっく
りと振るってゆく。

自らの記憶を掘り起こすかのように、
剣を振るった記憶などないはずなのに。

（にしても、馬超強えよなあ。

どこからあんな力が女の身体から湧くんですか、っと）

思わず思考してしまっ。

馬超との闘いはほぼ全て反射のように身体が動いており、初闘時に勝利を納められたのもカウンターが反射的に繰り出されただけだった。

初闘時……

首への突きが左目に見えた突きと重なった瞬間、それをどう対処してきたのが、陽の封じている左目に映る。

その対処の仕方を脳で勝手に処理されたのか、身体が勝手に動く。槍の切っ先を剣の腹の側面で軌道を反らし、左足を退いて半身になり、槍に沿わせたままの剣で槍を突き、素早く右手のみで剣を相手の首元に突き付ける、という具合だ。

実際には槍ではなく細剣？の情景が映ったのだが、応用が可能だった。

勝敗がつき緊張がぬけると、流れてきた情報の量に脳が耐えきれず、左目の痛みを伴い気を失ってしまったのであった。

(結局、あれは何だったんだ?)

そんなことを考えながら半刻ほど剣を振るっていると、後ろから声がかけられる。

「お兄様、ご飯だよ！」

馬岱が呼んでいた。

これもこの1週間で習慣になったことだった。

馬騰の家族にならないか発言の翌日に、

「お兄様って呼んでいい？」
と聞かれた陽。

早いだろ、と思いながらも悪い気はしなかったのでそう呼ばせていた。

(まあ、とりあえず飯だな)

そう思い、馬岱の方に向かった。

朝食後、陽は城の一番高いところに来ていた。

馬鹿は高いところが好き、と言っがそうだった所以ではない。

生憎、陽は馬鹿ではない。

多分、そう、めいびー。

というより、抜けていると言った方が適切であろう。

「今日で1週間だな」

馬騰の問題発言についてを思う。

完全に思考がストップし戸惑っていると。

「とりあえず今は保留ってことでいいわね？ 2週間……いや、1週間ね。1週間あげるから考えて置いてね」

と、勝手に決められていくが、有無を言わせない笑顔にコックリと頷いてしまったのだった。

(あれはなかなか怖かったなあ)

縁に足を外に投げ出して座り、そう小さく呟く。
そして、頭に両肩、腿など計五羽の鳥を留まらせながら思考に耽る。
はたから見れば、なんともコミカルな絵図である。

ここ1週間を振り替えると、ろくなことがない 此処に来るまで
とは天と地の差がある 毎日だった、と陽は思う。
馬騰の作る飯を食って、马超の鍛練に無理矢理駆り出され、韓遂に
は読み書き、ひいては兵法の勉強をさせられ、馬岱に街に連れ出さ
れ。

(……使役じゃないの馬騰だけなんだが)

でも、不思議と嫌ではない、と考える自分に困ったのも記憶に新しい。

正直に言えば、比較的に自由なのでいつでも逃げる事ができたが、逃げなかった。

否、本当は逃げられなかった。

- 1、2日目は、ただ飯食らいが出来る、という損得勘定から。
- 3、4日目は、ここまで世話になったのに、という罪悪感と此処の居心地の良さから。
- 5、6日目は、どうしてここまで待遇が良いのか、という懐疑心から。

何故、俺を家族にしたいのか。

分別ぶんべつ出来ない。

何故、俺を家族にする必要があるのか。

理解出来ない。

本当に俺が家族になっても良いのか。

判断出来ない。

わからない、分からない、解らない、判らない、ワカラナイ。

いくら考えても答えが弾き出されない。

(陽、たしか15歳！

六日過ぎたころかな、イライラする！)

ボケたところで、このイライラはなくならなかった。

突然に、理由もわからず優しくされたことと1週間待つと言われてはいたが、普通ではあり得ない待遇に、陽の中で戸惑いと疑問が生まれる。

疑問はいつしか疑念に変わっていく。
心に巢食う闇がそうさせた。

しかし、先の四人と過ごすときは払拭される。
だが、また独りになると、そういう黒い感情が湧き出てくる。
そんなコロコロと変わる自分に、苛立ちを覚えていた。

気付けば、いつの間にか鳥たちはいなくなっていた。
飛び立っていったことに気付かぬほど深く思考していたのか。
はたまた、暗い思考していることを感じとり、恐れ逃げてしまったのか。

「どっちでもいいか」

八つ当たりの対象にしなくて済むなら。

それ程、動物たちは傷つけたくなかったのだ。

それ以降の思考を打ち切り、陽は寝入ることにした。
呼ばれているような気がしたが無視することにした

「お兄様あ〜」

かなりの声量をあげ、自らの義兄になるやもしれぬ人を探す。
太陽も天高く昇り、いわゆるお昼時であった。

「いつもは、たんぽぽやお姉様、伯母上様、薊様の誰かと一緒にいるはずなんだけどなあ」

そう呟きながら城内を歩く。

辺りを見回してはまた次へ、と結構必死な彼女の名を、馬岱という。
どうして探しているか、と問われたら、陽を昼食に誘う為である。
が、なかなか見つからない。

……この時点で既に城の上にいる陽に、気付けるはずもなかった。

「仕方ないのかなあ？」

(今日、だもんね)

小さく溜め息を吐く馬岱。

義兄になってくれるのか、もしくは友達、悪ければ赤の他人になっ
てしまうのか。

それを決めるのが、今日だ。

馬岱としては、本当はいて欲しいと思っている。

強さに対する尊敬と、何故だかわからない絶対の安心感。

それが、離れたくない理由だ。

しかし、それは兄と呼ぶ陽が決めること。

自身が口出ししていいことじゃないと分かっている。

それが、すこしだけ歯痒い。

「ここにいたい！って思ってくれるように手は尽くしてきたつもりだけどなあ……………」

正直、馬岱ら四人の行動に対し、陽はうつとおしいと思っていた。

しかし、呆れか諦めか、はたまた違う感情か。

こんなのも悪くないと思いついている。

馬岱の強引な行動は、かなり良い方に傾いていた。

「蒲公英」

自分と呼ぶ声が聞こえ、後ろを振り向く馬岱。

声の主は伯母の馬騰だった。

「今日はそつとしいてあげなさい」

「でも……………」

「蒲公英は、やれるべきことはやったんでしょ？」

「それは勿論だけど……………」

馬騰の言葉に目を伏せる馬岱。

そこにどれほどの気持ちがあるのかを押し量れた馬騰は、安心させるように笑む。

「だったら待つだけしかないわ。それに多分大丈夫よ」

「ホントに？」

「ええ、私に任せなさい！ だから、昼飯食べなさい、冷めてしま
うわ」

「うん」

どこからその自信が来るのかは分からないが、伯母の言に従う馬岱
だった。

馬超は中庭にやってきていた。

無論、鍛練の為である。

自らの愛槍 銀閃 を振るってゆく。

目前には、最近鍛練に付き合わせた男の姿はない。

また誘おうと思ったが、母様と薊さんに止められたのでやめていた。

「母上や薊さんとは違った強さなんだよなあ」

思わず呟く馬超。

ここ一週間何度も闘い、勝ってはいるが、体力的なことではしかな
く、まだ一本も取れていなかった。

負ける気はしないのだが勝てない、という不思議な感覚を覚える馬
超だった。

「まだまだあたしは強くないと。アイツから完璧な勝利を得る
為にな！」

それを為すにも居て貰いたいんだけど、と結構私欲の傾向は強いものの、残って貰いたいという気持ちはあったようだった。

政務をそこそこに、窓縁に右膝を立てて横向きに座り、外を眺めながらちびちびと酒を飲む妙齡の女性がいた。
韓遂である。

昨日まで、毎日一刻ほど座らせ、勉強させていた机を見やる。
そこに、だらけながらも指示したところまできちんとやる男はいない。

「一体、何を考えているのかのお？」

それは馬騰に問うたのか、はたまた陽になのか。
あるいはどちらにもか。

どちらにせよ、此処にいない存在から答えが返ってくるはずなどなかった。

「才を無駄にしないためにも、此方にいて欲しいが、……何とも言えん危うさも持ち合わせておるからう。……困ったもんじゃ」

思わず溜め息め息が漏れる。

字が読め、かつ勉強させた時、驚くほど速く吸収していく陽の才を潰すには惜しいと思っていた。

しかし、人生経験豊富である韓遂は、陽の心の闇に気付いていた。
その為、どっち付かずの状態であった。

「それに、よく似ておる……。それが所為か、義姉上よ」

思いを馳せるは今は遠き人。

空を見上げれば、厚い雲に覆われていた。

「嵐の予感じゃな」

もう一度溜め息を吐いた

「あーあ、昼食い損ねた」

此処にも溜め息を吐く者がいた。

三刻ほど寝ていたであろう陽である。

「さてさて、時間かな」

そう呟いて城を降りていった。

待ち受けるは波乱と知らずに。

この時のことを陽は語る。

「これはあんまり思い出したくない記憶だなあ」

と

第五話

Side 韓遂

「いつまで続くのじゃ、この下らん言い争いは……」

かれこれ半刻ほど経っておるのに……よく続くのう。

「労働力だといって、強引に連れてかれ、働かされ！」

「強引に手をひかれ、連れてかれるなんて何時ものことだったわ…

…（嫌じゃなかったわね）」

「そのとき、俺は何度鞭でうちつけられたか！」

「私だってあるわ、そんなことぐらい……（主に閨でね）」

「抵抗したら縄で縛られ、何日も放り出され！」

「抵抗したら、縄で縛られ……ああ……」

この1週間でほとんど出すことのなかった感情を、これでもかと言
うぐらい前に出しておる。

聞いておると、こやつのだ絶な過去がわかる。

それを似ていると言われ、相当腹が立っているようじゃな。
それはまだわからなくもないのだが。

……問題は牡丹じゃ！

さつきから聞いておれば、何の話をしておるのだ。
牡丹の漏らす話の内容が怪しすぎるではないか。
明らかに邪なことを考えておるじゃろう。

しかしながら、いくら似ていると言えども、それを重ねて考えてしまつほど、あやつは愚かではないはずじゃ。

なんといつても、儂の義姉やつてるのじゃからの。

義姉上よ……本当に一体何を考えておられるのじゃ？

ある一室で舌戦……舌戦？が半刻ほど繰り広げられていた。
対峙しているのは、言わずもがな陽と馬騰である。

陽は顔を赤らめ激昂中。

馬騰は恍惚とした表情で、両手を違う意味で赤くなつた頬に手を添え、いやいやといった様子で首を振り、ほぼ自分の世界にトリップ中。

馬岱はそんな二人の間で、仲裁に入るかどうか決めあぐね 正確
には隙が見当たらないため おろおろしている。

馬超は自分の母の言っていることが違うことを意味しているように感じるが、知識として無いものがわかるはずもなく、ぼけーとして
いる。

韓遂は据えた目で馬騰を見ている。

というカオス的狀況であつた。

元々、事の発端は馬騰の一言にあつた。

曰く、「自分と似ている」と。
陽は昏間の苛立ちも相まって、冷静にはいらねず、熱くなっていたのであった。

「てか、アンタ、話聞いてんのか！　っ！！」

思わず発してしまった言葉で陽は気付く。

先ほどからほぼ自分の過去の独白になっていたことに。

この台詞を言わせる為に、わざと反感を買うように立ち回り、ここまで誘導されてしまったことに。

嵌められたことに、沸々と込み上がる怒りを残っていた理性を総動員させて無理矢理押さえつけ、馬騰を睨み付けていた。

「せっかく綺麗な顔してるんだから、そんな形相しないの」

「……………」

しかめっ面で、無言を決め込む陽。

「ふむ、やっぱり似ているわ……………同じとっていいくらい」

「　っ！！」

眉間の皺はさらに深くなり、眉も一気につり上がる

「……………なよ……………」

「えっ？」

「アンタと同じだと……ふざけるな！ アンタみたいな幸せ者と俺が、何が似ているだ！何が同じだ！一緒にすんじゃねえよ！」

二度も似ている、更には同じと言われ本気で腹を立てていた。

「そんなこと言っても、……本当はわかっているでしょう。アナタと私は同じ存在……だから、アナタがそれに気付いていることくらいお見通しなのよ」

もともと、陽がこの一週間逃げなかったのは、誘いを受けたときに家族となるそれぞれの人物たちを観察し、見定める為でもあった。そして、馬騰の言う通り陽は気付いていた、いや、感じていた。馬騰のことを「自分と似たような奴」と。

しかし、それを頑なに認めることを拒んだ。認めてしまうと、自分と似た奴が自分の近くにいて、という事態に嫌悪感を感じ、そしてその事実にも劣等感も感じるからであった。

「……認めねえ。絶対認めねえ！」

そう言いながら、左目を隠す為に巻いてある包帯を取り除いていく。決定的な違いを見せつける為に。

「これがアンタとは違う理由だ！」

隠していた包帯をすべて取り去って左目を開く。
そこにあったのは……

「「……………」」「「！？」」「

……………瞳の黒い目だった。

瞳の色自体は別段変わった物ではなかった。ただ、右目とは圧倒的に違っていた。光を入れて、反射させて輝く銀色の右目。光さえ吸い込み、輝きをみせない漆黒の左目。片方ずつなら、何ら問題ない目。右目と左目が相まって、初めてわかる異常。今で言うところ、オッドアイだった。

「綺麗、だね」

馬岱が頬を朱に染めて声を洩らす。馬騰と陽の間に居たので、一番近く、見やすい位置にいた。

「……………は？」

途端、ズキツ、と。

陽の左目に、この前以上の激痛が走った。

「綺麗な目だね」

「……………え？」

「だから、綺麗だつて」

「綺麗？ ……ちょっと待ってよ。どうして？ ……こんなの、おかしー！ この色違いの目が恐ろしくくないの？ ……怖くないの？ おお

ぞましくないの？ 気持ち悪くないの？」

「そんなこと全く思わないね！ むしろ格好いいな、って思ってる」

「あはははっ。綺麗に続いて、格好いいだなんて……可笑しな人だね、君は。でも、ありがとう」

「へ？何が？」

「初めてなんだ……この目をそんな風に言ってくれる人」

「なんで？ こんなに綺麗なのに？」

「君は本当に可笑しくて、不思議で、変な人だね」

「変じゃないよ」

（なんだ、今は。

いつもより……鮮明すぎる。

だというのに相手の顔だけ見えない。

誰なんだろうか？）

記憶から溢れるように見えた映像のようなものに、陽は疑問を持つ。稀にこの手の夢を見るのだが、鮮明に声などを聞いた覚えはなかった。

「ちょっと、お兄様……大丈夫？」

左目を押さえて、痛みから耐えるように歯をくいしばっている陽に心配の色を見せる馬岱。

「大丈夫……だけど、なんでだ？ この色違いの目が恐ろしくねえの？ 怖くねえの？ おぞましくねえの？ 気持ち悪くねえのかよ！？」

とりあえず、さっき小さな自分が小さな少年？に言っていたことを問うた。

それに対して、馬岱は満面の笑みを浮かべ、答えた。

「ううん、全然！ むしろお兄様によく似合っつて格好いいよ！」

「そうね」

「うむ、そうじゃの」

「そうだな」

いつの間にか陽の目の前に周りこんでいた三人も、馬岱の言に同意する。

「はっ……はははっ。可笑しな人たちだ、アンタらもアイツも……格好いいだなんて。おかしい……本当に可笑的だよ」

はははっ、と愉快そうに笑い続ける陽。

両目からとめどなく流れるものを気にもとめずに。

「むう〜！ たんぽぽたちはおかしくないよお〜」

当然のことを言っただけなのにおかしい、と言われたことにむくれる馬代。

「はっ、はは。はっ、はぶっ、ふぐうっ！」

「笑うなら笑う、泣くなら泣く。どっちかにしなさい」

泣き笑いをし続ける陽は、馬騰にかなり強引に抱き寄せられ、優しい手つきで頭を撫でられる。

ほぼ初めてである母のぬくもりに身を委ね、四対の優しい眼差しに見守られながら馬騰の胸の中でひとしきり泣いた。

この目のお蔭で虐げられ続けてきた苦しみが、全て涙で溢れ出した。心の中で、この人が母なら、ここにいる人たちが家族なら、悪くないと思った。

ここで終われば良い話だが、それは問屋が卸さない。

「寝ちゃったわね……さて、どうしようかしら」

「牡丹よ、お主は止めて置けよ……何をするかわからんからの、ナニをするか」

「し……ないわよ、息子になつたばつかなのに」

「うん？ なんじゃ、今の間は？」

「うっ……かといって薊には渡さないわよ！」

「べ、別に欲しいとは言っておらんわ！」

「ふん」

「ぐっ！」

実は別に寝ていなかったりする陽。

息を整えていただけである。

それを勘違いされ、しかもなかなかタイミングを見出だせず、さらにかんりの力で抱かれている。

遺伝というのは不思議で、馬騰と馬超の髪の色は全然違うのに、胸の発育は似ている。

母親の馬騰の母性は素晴らしいものだ。

よって、ぶつちやけ陽は窒息しそうなのである。

しかし、馬騰と韓遂の二人はにらみ合いで気付くはずもなく。

そんな二人の様子に馬超はあたふたとしている。

（志なんてないが、半ばで死ぬのか俺は！

頼む！誰か助けてくれる奴はいないのか！）

必死にもがき、偶然、合い言葉？を強く思う。

「ここにいるぞー！」

すると、馬岱が名乗りをあげて二人のにらみ合いに参加。
陽が死にそうだ、ということ伝えていく。
小悪魔的な笑みを携えて。

結果、助かりはした。

だが、陽に助かった気はしなかった。
何故なら、隣で妹分が寝ているのだから。

(H A H A H A ! なんてこった !)

意味分らないテンションで頭を抱える陽。

救った代わりに隣で寝かせろ、と要約するとこんな感じの要求をされ、こっぴどくなった。

(こっぴどなったら自棄だ !)

結局、馬岱を抱き枕にして寝てしまった。

正直、今の陽に家族 なったばかりだが と呼べる者のぬくもりが有り難かった。

翌日、馬岱と顔を会わせる度真っ赤にして逃げられたのは余談であるが。

陽はこの時を振り返る。

「今、俺が俺で居られるのは二人、いや家族皆のおかげだ……。本当に感謝してる」と

第六話

正式に馬家の一員になって 真名も改めて交換し合って 早一週間を過ぎたころ。

陽はまた城の上に登っていた。
前回もなのだが、どう登ったのかは触れないでおこう。

陽がわざわざここにきた理由があった。
それは、新たな悩みが浮上したからである。
陽は悩み、疑問など頭脳労働をするときは一人熟考するタイプなのだ。

故に、一人になりたいのだがこれがなかなかにして難しい。
睡眠以外、ほとんど一人でいる時間がないのである。

半分は納得できた。
何故なら自ら望んだことだったから。
しかし、もう半分はそうではない。

「母さんとの鍛練がキツイ」

陽の義母、牡丹との鍛練こそが陽の新たな悩みであり、一人でいる自由時間が出来ない理由だった。

（何故だろうか？）

俺、別に頼んでないのに強制的にやらされているんだよ？（

そう考えてみたが、理由は正直わかっていた。

しかし、今一度原点に戻らないとやるせない気分になってきた陽は、振り返ることにした。

(あれは、薊さんに相談した時からだったかなあ……)

S i d e 薊

「母さんの、いえ、家族の皆に恩返し出来るぐらい役に立ちたいです」

「……は？」

「だから、兵法とか、教えてくれませんか？」

儂は耳を疑った。

あれだけやる気のなかった奴がこうまで変わり、あまつさえ教えを乞いに来るとは……。

まあ、前は無理矢理だったからの、当然とは言えるのだが。

「ちょ、あのー」

「お、おお、すまんの。うむ、心得た。……じゃが、条件が一つある」

「なんです？」

「堅つくるしい言葉使いはやめぬか。家族内での約束でもあったであろうが」

「あ、ああ、そついやそつでし……だったな。うっかりうっかり額を軽く叩く陽。

なんじやろう、凄く腹立たしい。

「全く……」

「でもさ、人に頼むときは誠心誠意でするもんじゃないすか？」

「ま、まあ、それはじゃな……」

むう、言いくるめられてしもうた。

この辺りは本当に牡丹と似ているところじゃな。

まあ、この際じゃ、それは置いておこう。

「よし、では早速やろうではないか！」

「あ、無理矢理話題変えたね」

「う、うるさいわ！」

クスクスと笑っておる。

まあ、ここは年の功で抑えて……だれじゃ、儂を歳だといったのは！

「……？ まあ、頼んだ俺もあれなんだけど、積み上がった書簡の山々はどうすんの？」

「……あ」

「あっはっはっはっ。これ借りてきますね。時間が出来たらまた
お願いしますわ」

何冊か持ってでていったしまった。

笑われたのは癩に触ったが、まあ良しとしようではないか。
今はとても気分が良いからな。

何故って、牡丹に自慢出来るのじゃぞ？

フフフ……牡丹の狼狽える様子が容易に想像出来るのう

しかし、笑顔を見せてくれるとは……。

一昨日までの奴と同じ人間だとは到底思えんわ。

この日、薊と顔を合わせた者たちは一様に、

「韓遂様の笑みが黒い……」

と言った。

そしてその夜、案の定牡丹の、

「ななな……なんですってええええ!!」

と、某未来の特盛金髪ロールばりに狼狽した声が城内にこだました
という。

そしてその翌日、笑顔だが決して目は笑っていない母さんと出会った。

「役に立ちたいからって、薊を頼ったのね？」

「……まあ、そうだね」

なぜか薊、の部分を妙に強調させてくる。
嫌な予感はそののだが、事実だから同意で返答した。

「何故私のところに来なかったのかしら？」

微かに額に青筋がたっているのだが、……全くもって意味がわからん。

「それはわかりきってるでしょ。母さんが太守だから遠慮しておいただけじゃん」

母さんこと馬騰は、ここ隴西の太守なのである。

蒲公英の行動から身分というか、立場的にお偉いさんだとは思っていたのだが、まさか太守とは思ってなかった。

毎日飯作って顔見せて、としてたから、どんだけ暇な役職なんだ、と思っていたんだけだな。

それを知ったのも、ここ隴西が涼州のかなり西のほうであることを聞いたのも昨日のこと。

自分自身、こんなに西に来ているとは思ってもみなかった。

「それでもよ！ まあ、それはもういいわ。……役に立ちたいのよね？」

「……まあそれは、うん」

「じゃあ、そうね槍を扱えるようになってもらおう」

母さんは満面の笑みだったが、俺は盛大に顔がひきつっていることだろう。

「ここは西涼。漢の領土の北西端に近い位置よ。故に、主に北の匈奴と西の羌からの侵攻を防がないといけないところなの。……たとえ漢に服していても、いなくてもね」

真剣味を帯びた母さんの言葉にうん、ととりあえず首肯する。

「そして、主な戦力というと向こうも同じだけれど、騎兵なの。……ここまで言えばわかるわよね？」

「俺が戦にでるのはすでに決定事項なのね……」

「当然じゃない」

わかっていたことだが、一応、肩を竦めておく。

「もちろん、陽の剣の実力には一目置いているわ。……けれどね」

「馬上じゃ使えない、って訳ね。……ハア」

「そ　理解が速くて助かるわ」

すごく頭を抱えたい事態になってしまった。

「さて、早速始めるわよ！ 私の息子になった以上、手加減はしないわよ！」

「……政務はどうすんのさ？」

「あんなもの、薊に任せたわ！」

おいおい、本当にそれでいいのかよ。
結構やべーだろ。

つか、勉強の時間が無くなるじゃんか。

「いいのよ、二人で交代してやるから。勉強の時間は無くならないわ」

出来れば、心は読まないで欲しいんだが？

「無理　　そうね、蒲公英と翠を呼んで、調練場に来なさい」

コイツ、うぜえw

な感じは本気で腹が立ったぞ、このやろつ。

三人で向かった後は、俺と蒲公英は基礎固め、翠姉　歳はさして
変わらないだろうが、母さんの長女ということでごうよんにいる

は鍛え直しの猛特訓という地獄のような二刻を過ごした。

昼を挟んで、俺と蒲公英（翠姉は逃げた）は薊さんとお勉強会……
というより講義？を受けた。

……それから昨日まで一週間、二人からまるで腹いせか、八つ当た
りを受けているかのような怒涛の日々だった。

(つか、なんとなくすんなり頭に浮かんだが、地獄ってなんだっけ？)

そう一瞬考えたが、今浮上した疑問も、牡丹の若干正統性を持った、理不尽とも言うべき鍛練と称した暴力さえも、今の陽にはどうでも良かった。

何もかも忘れて、今はこの僅かばかりの休息を享受したいのだ。現実逃避だ！といわんばかりに、陽はふて寝した。

一刻ほど経ち、城下の騒がしさに陽は目を醒ます。人々からは、称賛の声があがっていた。

(ま、多分母さんの軍かなんかだろうさ)

心底どうでも良さそうに見下ろしていると、蒲公英が庭を駆けずり回っているのが見えた。

十中八九、自分をを探しているのだろう、と陽は思う。

そういう役回りをいつも蒲公英が担っていたので、そう予想する。

(まあ、困らない程度に降りてあげますかね。困った蒲公英を見るのは楽しいんだけどさ)

若干酷いことを考えながら、陽は降りることにした。

その後、蒲公英と合流して玉座の隣の部屋に向かった。
合流時に、

「もう！ お兄様！ あんまりわかりにくいところにいかないでよね
！」

と、陽は怒られた。

高い所に隠れず居るのだから、ある意味滅茶苦茶わかりやすいのだが、城の近くからでは流石に見えないのである。
ということ、とりあえず陽は謝罪することにした。

部屋には既に翠もいた。

そのまま牡丹達が来るまで、陽、翠、蒲公英は待機するしかない。
三人が玉座に入らない……入れない理由はたった一つ。
正式な臣下ではまだないからである。

いくら君主の親類であろうが、一応は兵として段階を踏む。
家族だから、高い身分の血があるから、という理由では、この地で
昇進することは不可能である。
外敵からの防衛ラインの前線である地で、そんな甘えは通用する八
ズがないだろう。

因みに、翠はもう軍に所属しているが、まだ玉座に入れるほどの地
位ではないらしい。

それについて、聞いてみた陽。

「あんだだけ強いのに、まだ将じゃねえの？」

「お前に負けたから、下げられたんだよ！」

あともう少しだったんだからな！

と、続いて叫びながら陽を軽く殴る翠。

それは自業自得じゃね？

と思った陽だったが、言葉には出さず、理不尽な暴力を甘んじて受けることにした。

かなり痛そうだったが、こういったスキンシップが陽には嬉しかったようだ。

陽は決してMではない。

そのようなことは断じてない。

(これは大事な事である)

さらに半刻ほど経ち、牡丹、薊、そして陽の知らない二人が入ってきた。

「あつ、山百合さん、瑪瑙、おかえりなさい！」

「山百合、……お疲れ」

「……只今戻りました」

「なーんか、年下から呼び捨てってやっぱしっくりこないわ。それで、翠はボクに対しての労いはないのかしら？」

「うっせ！」

片膝をつき、右の手で握った左手の拳を覆っている、紫紅色の髪を後ろで一つに束ねた者。

据わった目で翠を見て腕を組んで立つ、褐色の髪をツインテールにしている者。

前者は真名を山百合、後者は瑪瑙といった。

勿論、陽は二人を知らず、二人も新たな家族が増えているなど知るよしもなく。

「こいつ誰？」

「この方はどちら様でしょうか？」

「お二方は一体誰なのですか？」

と、三者三様に質問するはめになった。

最初は瑪瑙、自然体に……いや適当に。

次は山百合、少々含みを持った笑みを浮かべて。

最後に陽、丁寧語で笑顔と言う名の仮面で覆って。

端からだど、穏やかな様子に見えるだろうが、居合わせた四人には一触即発なムードにしか見えなかった。

陽は語る。

「二人との出会いは互いに最悪な印象を持ってたなあ」と

第六話（後書き）

蒲公英　だというのに、未だ蒲公英成分が少ない、だど……！

第七話（前書き）

遅々として進まねえ……。

第七話

Side 陽

何とも言えない険悪なムードに、とりあえず母さんが仲立ちとして入った。

「陽。この二人は鳳徳、そして閻行。そして、山百合、瑪瑙。この子は馬白よ」

……あ、そついや俺、馬白ってんだっけ。

母さんから貰ったのは良いが、使う機会が皆無だったから忘れてた。髪が白いからって理由で名付けた。冗談らしかったが。と言ったときは流石に殺意を覚えた。

本当はきちんと問い詰めて、理由を聞いてやりたい。

けど、どうせはぐらかさるだけだろうと思ったので止めた。

まあ、こんな話、今はどうでもいいんだが。

「馬、ですか？」

「そつよ」

「……ならば。……私は鳳徳、字は令明、真名は山百合と申します。宜しくお願いいたします」

拳と掌を合わせて一礼する鳳徳さん。

律儀だねえ。

「ボクは閻行、字は彦明、閻艶なんて呼ばれたりもするわ。どれでもお好きにどうぞ」

心底どうでもよさそうな閻行さん。

難儀だねえ。

「姓名は母さん……いえ、馬騰より頂きました、馬白と申します。どうか宜しく」

相手も名乗ったことだし、とりあえず自己紹介しておく。差し障りのない笑顔でも振り撒いておこうじゃないか。

……と、なんとなく昨日のことについて回想に入ってみた。

誰の為にとは聞かないでくれ。

そんで、だ。

俺が鳳徳さんに持った印象は、いけ好かない人、というもの。

まあ俺の場合、含みのある奴と勘繰ろうとする奴には大抵もつ感情だが。

閻行さんに関しては、嫌な奴だ、と言うか嫌いな部類に入る奴だ、と思った。

俺などどうでもよさそうで、明らかに差別的、侮蔑的な目で見ていた。

散々そういつ目で見られていたので、別に表に露にするほどの怒りは感じねえし、俺はそんなに愚かでもねえ。

どんな感情も笑顔で全て包み隠す。

それが、この腐った世を生き抜く為に必要なモノなのさ。

なにに対して持論を語ってんだか、俺は。

そんなことはさておいて。

多分、俺が持つて印象と同じように思っている二人だろうが、なるべく仲良くしなくちゃならない。

「だって、家族だかな」

これは母さんの受け売り。

家族は大切な存在よ、と再三言われているもんで染み着いた。

それに救われた俺自身、余程の事がない限り染み抜きはしないだろうし、出来もしないだろう。主に母さんの所為で。

まあ、黒に垂れ、じわりと広がる白を、染みと言っかは定かではないけど。

そんなことを考えながら、朝日の光も射し込まない中庭で拳を振るう陽。

誰かに教わった訳ではなく、見よう見まねで覚えたので我流の拳法であるが。

これも二日に一回の日課だったりする。

何故早朝、それも日の昇っていないときにやるかという時間が無いのもあるが、何より見せ物ではないからであった。

その後日が昇る頃には、剣の鍛練、朝食を挟んで槍の鍛練へと続く。

(そついや、今日から槍の基礎から基本に移るって言ってたっけ)
と、陽は呟く。

なんにせよ、面倒な母との鍛練があるという事実には、陽は嘆息したかった。

(っと、違うことを考えている場合じゃなかったなあ)

自らに言い聞かせ、強制的に思考を修正する陽。

鍛練のことも大変悩ましいが、二人との距離の詰め方の方が今は大切だ、と考えた為だ。

(さてはて、何日かかるんだろつかねえ?)

これからを考え、小さく息を吐いた。

延々と考えているうちに日は昇り。

さらに剣を振るって半刻たち、蒲公英がやってくる。

「なあ蒲公英……どうしやいいと思う？」

「なにが？」

中庭から部屋に戻るとき、陽は蒲公英に相談してみることにした。そついや主語が抜けてたなあ、と思いつつ、二人の事を聞いてみた。

「山百合さんは、寡黙な人だから積極的に話してみた方がいいと思うよ！ 蒲公英たちがお兄様にしたようにね」

（あそこまでやられると多分きついと思うんだが）

四人で、弓兵が間断なく放つ矢のように自分のところに来られたのは本気で鬱陶しかった。しかしながら、途中からは若干嬉しくなっていたが、ので、そこまではやるうとは思わないが、参考にすることにした。

「んで、閻行さんは？」

「んー……、わかんない」

思わずずっとこけそうになる陽。

最初は何でも聞いて、みたいな自信のある態度だったのに、分からないとあっけらかんと言われたら、そうなるのも無理はないだろう。

（しかし、思案するときの行動がいちいち可愛いなあ）

今も口元を人差し指で押さえ、首を傾げる姿になんともいえなくなる陽。

「お兄様？」

「……っ!？」

惚けてていた陽を心配になったか、蒲公英は顔を覗きこむ。

いきなりのごとに、ドキッとする陽。

(まったく、不意打ちなんだってばさ！)

「どうかしたの？」

「……何でもない」

「ふん。あつ、瑪瑙のことは薊さんに聞くといいよ」

「何故に？」

「瑪瑙は薊さんの娘だからだよ。……義理の、だけれど」

確かに仲がいいな、と思う節もあったがそういうことだったのね、と陽は思った。

そうこうしているうちに、部屋につく。

どうやら陽と蒲公英が最後であった。

陽は静かに謝罪の意で一礼してから席につき、蒲公英は陽のそんな様子に首を傾げながらも席についた。

「皆揃ったわね　では、頂きます！」

「」「」「」「」「」「」「」「」

朝と夕は可能であるなら、なるべく家族皆で食事をする事。
食事初めと終わりは声を揃えて挨拶をすること。
この二つは、牡丹がつくった家族間のルール……鉄則、掟と言っ
ても過言ではないものだった。

Side
陽

「「「「「「馳走様でした」「」「」「」

「はい、お粗末様でした」

食事は滞りなく終わった。

昨日の夜と合わせて、二度目の家族全員での会食。

昨日は全く口を開かなかつたけど、今日も、とは流石にいかないの
か振ってきたので、不躰にならない程度に答えておいた。

「そうそう、今日は時間ができないから、三人は山百合から指南を
受けること。いいわね？」

「うげっ！ 山百合のかよ〜」

「……翠様、それは挑発と受け取らせて頂いても宜しいでしょうか
？」

「うっ！ ううう〜、陽！」

翠姉が最初に目についたのが俺のようであるが、我、関せずを決め

込むぜ。

俺には関係ねえし。

まあ、とりあえず、目を明後日の方へ向けておこつ。
鍛練に向かうときに殴られたのは余談である。

「さあ翠様、始めましょうか」

「なあ、山百合、朝のはだな。その、……言葉のあやって奴でな」

「……朝の発言は関係ありません。……半分は、ですが」

中庭の真ん中には、翠姉と鳳徳さんが対峙していた。

翠姉はいつもの十文字槍を携え、鳳徳さんは双戟とでも言うのかね？
とにかく、片腕ごとに一本ずつ戟を持って自然体に構えている。
鳳徳さんを見れば見るほど感じるものは一つ。

(強い)

今まで観察していて、立ち振舞いといい、纏う雰囲気といい、そして今の構える姿といい、半端じゃないと思った。

翠姉……御愁傷様です。

陽が翠に対して合掌した直後に戦局は動いた。翠から、先ずは一突きと言わんばかりに、鳳徳の心の臓を神速とは言えないものの、それなりに速い速度で突く。そんな一撃を、両腕の戟を胸の前でクロスし、いとも簡単に防ぐ。母さんとの1週間の鍛練でここまで変わるのか、と陽が思うほどの重さと速さの一撃を、である

「……翠様、お強くなりましたね。ですが　「うわっ！」
まだ踏み込みが甘いですよ」

たった一撃で、鳳徳も翠の目まぐるしい成長に気付いたようだ。しかし、簡単には褒めることはせず、更なる力で叩く。変な自信をつけさせない、傲らせないためである。ムチが圧倒的に多い、アメとムチの鍛練が鳳徳独特のスタイルである。

その為、白馬の女王様とか氷帝などといった二つ名があったりするとかしないとか。

S i d e
陽

半刻後、翠姉の番は終わった。相当叩かれたようで、真っ白に燃え尽きていた。おてての皺と皺をあわせて、南〜無〜。

「死んでない！」

俺ですら元ネタが正直わかってないのにさ、よくツッコめるよねえ。こつこつ場面で使うということだけはなんとなく覚えてたけどな。ん、間違ってるって？

……………しらんがな。

俺の変な記憶にいえや。

「誰と話してるの？」

蒲公英さんや……………ヤバい奴見るような目はマジで勘弁してください、俺の心はガラスでできています。

あれ、ガラスって何？

またか、俺の変な記憶！！

このままじゃ無限ループになり……………ループってなんだあああ！

自爆して、突然頭をぐしゃぐしゃに掻き回す俺を、蒲公英と鳳徳さんはひいていたが。

他人なんざ構うものか！

冷静さを取り戻した俺は、楽しい楽しい独り言（泣）を終わらせ、鳳徳さんの向かいに立った、否、立たされた。いやいやいや、まだ基礎習ったばっかですよ。なんでいきなり実践形式！？

と、いろいろ考えながらも表情には出さないが。ひとえに、人間の学習能力の賜物と言えよう。

「……………では、きてください」

「……ハア」

あんまり乗り気にならないんだけどね……正直面倒だしな。

俺は基礎に習った通りに槍を振っていく。

突き、払い、降り下ろし、このみっちり教わった三つで、相手の急所、鳳徳さんがわざと作っているであろう隙を的確についていく。

「……これならば問題ないですね」

小さく呟く鳳徳さん。

何故だろう、凄く嫌な予感がする……。

鍛練は終わり、昼は適当に食事をすませる。

今はお勉強の時間になるまでのちよつとした休憩。

そういえば蒲公英は、槍の扱いはまだまだだが筋はいい、と鳳徳さんに言われていた。

そのことが良かったか悪かったかは、これからの時代と自分自身の受け取り方次第だけだな。

なんとなく、隣にいる蒲公英の頭を撫でてやる。

ちよつとだけ困った顔をして俺を見上げた後、すぐに笑顔になってくれる。

やっぱり、可愛いな。

乱世の最中でも、この笑顔は無くしたくねえよなあ、と漠然と思っ
た。

陽は語る。

「蒲公英に特別な感情を抱いたのは、突き詰めればこの頃からかも
知れないなあ」
と

第八話（前書き）

まだまだ進まない。
ほのぼのが続くぜ！

第八話

「陽、軍に入りなさい」

「俺、まだ槍術基本。おk？ 軍？ は、問題外」

「却下。師たる私が良いというのだから良いのよ」

「却下は却下だぜ。足引つ張るだけだかな」

「却下の却下は却下。想定内よ、それは。元から協調性がないことぐらい分かってるから」

「却下の却下の 「ええい、喧しい！ 却下却下五月蠅いわ！」

ぬう」

陽の勘は当たってしまった。

いつも通り家族全員で食事を済ませたときに陽は牡丹から通達された。

反論は勿論したが、それも悉く返されてしまい。

陽が折れることで、話は収束した。

陽は盛大に頂垂れていたが。

S i d e 牡丹

元々、山百合たちが帰ってきたら、陽を山百合の率いる部隊に入れることは決めていたんだけどね。

もう少し羌の討伐には時間がかかると思っていたし、陽を鍛えるのにもまだかかるだろうと思っていたのに。

それを山百合が認める程に成長してるなんてね。

……ホント、良い意味で裏切ってくれるわ。

全く、流石私の自慢の息子、としか言いようがないわね

「あ、そだ、あれも陽に任せようかしら……」

この私でも出来なかったんだもの、一筋縄ではいかないと思うけれど。

ま、山百合を認めさせるなんてもっと至難の業なだけけどね

「陽、ちょっとおいで！」

顔がひきつっているわ。

全く、失礼しちゃうじゃない

S i d e ????

俺は元々、三流とも言えないほどのクズに飼われていた。

そいつは気が短く、気に入らないことがあるら直ぐに他に当たり散

らし、気に入らない奴がいれば殴り、なぶり、そして棄てた。そんな奴が、俺にだけは決して何もしようとしなかった。むしろ、可愛かった。

俺がどんなに拒もうとも、へりくだり、貢ぎ、俺に必死で気に入られようとしていた。

俺は世間から賢いと言われている。

他の奴らに劣る気も、引けをとる気もさらさらない。だからこそ気に入られた。

……願ってもいけないクズに。

気持ち悪い！

クズが俺に触れてくれるな！

幾度も、幾日も、幾月もそう思っていた。

そしてそれと同じ回数だけ嘆いた。

何故俺だけ違う！

頼むから解放してくれよ！

と、何度も何度も。

さらに、現実には甘くなかった。

……何故お前だけ。

……お前だけが幸せで。

……お前だけ愛されて。

そんな敵意の籠った目で見られるようになった。

違う！

俺は奴なんかには愛されたくない！

俺はこんなところで生きていたくななどない！

と、何度も叫んだ。

しかし、そんな声が届くはずもなかった。

だから、俺は逃げた。

数日数週間かけて、繋がれた縄を食いちぎって。

幸いにも俺は脚が速い。

振り切ることなど容易かった。

だが、外を知らなかった俺は懸けて、賭けて、駆けるしかなかった。

それが一番身を守ることに繋がることぐらいは知っていた。

だがそれも、長くは続かなかった。

疲労の蓄積と満足でない食事は、徐々に身体を蝕んだ。

そして俺は、崩れ落ちるような感覚に陥った。

……その朦朧とした最中で人影を見たのは、何故かはっきりと覚えていた。

どれ程の時間が流れたのだろうか。

俺は人の膝に頭を預けていた。

何故だか不思議と心地がよかった。

「ほれ、やるよ」

今日は朝から何も食べていなかったの、一心不乱に食べてしまった。

あ、あゝ、俺のがあゝ、という嘆きの声には少し罪悪感を感じた。

まあ、仕方ねえなあ、と呟いた後で。

「ちょっとここを深く入ったところに水場があるから、後でいけよな」と、優しく撫でながらそう言ってくれた。

新天地で、あのクズでない人に優しく、慈しむように見てくれるその銀の隻眼が無性に嬉しかった。

「さてと、そろそろいくわ。ま、ちゃんと休むこつたな。……そんなじゃ、達者でなあ〜」

と言って、行ってしまわれた。

この恩は決して忘れない、と心に刻みこんでおいた。

ふと思えば。

こんなに短時間しか一緒にいなかったのに、もう寂しいと感じてしまっていた。

………ついでに行きたい。

そう思った。

だが、それを俺自身が許さなかった。

動けないのがこんなにももどかしいと感じたのは、初めてかもしれない。

しかし、”主”からの初の命令、ちゃんと休め………こう考えると自然と嬉しくなった。

(未来の我が主よ………再び相見えんことを)

俺は天を仰ぎ見た。

それから、目的をもって走るようになった。
我が主を求め、ひたすらに走った。
そうしたら、ある軍に遭遇してしまった。

「なんだ、こいつ？」

「……さあ」

「十分な体調じゃないようね。……母様たちに任せます？」

「……それが最善でしょう」

抵抗はしてみたものの、弱りきっていた身体には酷なことだった。

そして、今、俺は保護という形でここにいる。

最初、俺には捕らわれている、という風にしか感じられなかった。

一刻も早く主に会いたいのになんかところで立ち止まっている暇などない！

ここから早くだせ！

我が魂の叫びを聞け！

そう、ずっと思っていた。

だから暴れたりもした。

「誰かが、誰かが私を呼んでいる！」

そこに、まさか反応する奴がいるとは思っていなかった。

「安心なさい　捕らえる気なんてないわ。……あなたみたいない子には是非ともいて欲しいのだけれどね」

そう言っつて、撫でてくれた。

主並の心地良さがあつた。

主に似ている、と感じた所為なのかは分からないが。

「心に想い人がいるようね。……まあ、簡単には諦めないわよ」
主を見つけていなかったら、この人を主だとしていたかもしれぬ。
不覚にもそう思ってしまった。
だから、少しの間だけ留まってみようと思った。
その判断は間違っていないかつたと証明される日がこんなに早くやっ
て来るとは思ってもみなかった。

S i d e
陽

「だから、痛いつての!」

耳引つ張られるとか、尋常じゃないです、はい。
心底嫌そうな顔をしたのが気に入らなかつたらしい。
そんなこと言つたつてしょうがないじゃないか！
だってどうせ面倒事なもの。

「ほら、ついた。ちょっと待つてなさい」

俺と母さんと蒲公英と鳳徳さんは、ある小屋のそばにある広場に来ていた。

正確には、俺だけ耳を引つ張られ、連れて来させられたんだがな。
鳳徳さんは保護した責任者として、蒲公英は暇潰しと興味本意でついてきていた。

そして母さんがその小屋へ向かい、俺たち三人は待つことにした。

……因みに、俺と鳳徳さんの間の険悪なムード(?)は、鳳徳さんがある程度認めてくれたことで払拭されたさ。

しかしながら、まだぎこちない感じだから、どちらから口を開く、
というのではないけどな。

そうこうしてる内に、母さんがとある馬を引き連れてくる。

あれ、あいつは……。

「……あの馬鹿馬か？」

「ほえ？ 馬は馬鹿じゃないよ！」

「それは知ってる。……知ってるけどさ、俺を生命の危機に追いやった奴を馬鹿と呼ばずしてなんと呼ぶ！」

「生命の危機？ …… ああ〜！ じゃあ、あの子がお兄様の食料を？」

「まつ、そゆこつたな」

でも食料がなくなってなかったら、森に入る必要もなかったからなあ。

……だったら全ての始まりはあいつとの出会いからなのかもしれない。
感謝すべきかねえ？

「あつ、ちよつと待ちなさい！」

母さんの声が聞こえたと思ったら、すげえ速さで走ってくる奴がいる。

まあ、あの馬鹿馬だけど。

いや、待て。

……その速度でこつち来んの？
止まるどころか、さらに速度あがってますよ？
流石にあせるぞ？

待て待て待て、ぶつかるときのエネルギーって半端ねえんだぞ！
速度は2乗するんだぞ！
とっさに思い出したやつは知らんが……俺、確実に死ぬぞ！

「ちよつ、とま ひでぶっ！！！」

ちよ、視界が、グルグル、回ってるな。

ああ、これが、フィギュアスケートのジャンプしてる人の気持ちな

んだろうか。

そろそろ現実逃避はやめ
ぐべっはあっ!!!!

地面に叩きつけられる俺。

「いつでええええ!!」

無茶苦茶痛え。

あれ、ちよつと待てよ。

……(身体を確認中)。

馬鹿な！なんともないだと！

骨折ぐらいあつて然るべきな衝撃だったぞ！

こっ、これがギャグ補正と言っちゃつなのか！

……何も言つな、俺が一番わかっているから。

そんなことよりさあ……。

「つか、何で頭突き!? お前は恩を仇で返すのか!」

ブルツ、と鳴いた。

(そんな気はなかった)

とのことらしい。

え、何でわかるかって?

俺は動物たちの気持ちはなんとなくだがくみ取れるんだよ。

ずっと動物だけが友達のボツチだったからな。

「ふうん、想い人って陽のことだったの」

「想い人ってなんだよ、気持ち悪い。……こいつオスだぞ？」

何時の間にか近くにいた母さんが、変なことを呟く。

生物としての壁を超えさせるだけでなく、男色に靡けというか、この母親は。

「何を馬鹿なことを考えてるかは知らないけど。背を預ける主という意味よ」

「……主い？ ちょっとさ、話の飛躍度が半端じゃないんだけど」

「その子に聞いた方が早いと思うのだけど？」

「確かに」

……いや、馬と会話できるのが当然、みたいなこのやりとり、頭おかしいだろ。

まあいいけど。

とりあえず、聞いてみた。

「それで。どうして俺が主？」

（貴方は命の恩人だ。それに、俺は貴方に惚れた。だから、俺の背を貴方に預けたい。駄目だろうか？）

「惚れた、て……。まあ、いいか。これから戦場に出ることになる

だろうが、宜しく頼むぞ」

ブルッ！（おうさー！）

俺が応えてやれば、ここ一番の大きな返事をする。
つか、そんなに嬉しいのかよ。

「……………この子の名前はどつするのですか？」

……………ここに来て、初めて口開いたな、鳳徳さん。
まあ、問題ないけどさ。

「うっ〜ん？」

どうしようか。

漆黒の毛……………なんつーか、記憶の片隅にある黒 号ってやつより細
いしなあ。

脚はかなり速く、立派なたてがみ。

……………カスケ ド？

うん、何故だかわからんが凄くしっくりくる。

しかし、そのまま使ったらいかん気がしてならない。

うむむ、どうしよう。

ま、ここは無難にいくか。

「毛が黒で、兎のように脚が速いから、今日からお前は黒兎だ！」

赤兎馬って、こんな感じで名前つけられた、って聞いたことがある。
我ながらかなり適当だが、喜んでるようだし、まあいっか。

「一筋縄でいってしまったわね。……つまんな〜い」

母さんがふざけたことぬかしてやがったが、ここは抑えてやるつ。

戦場の苦楽を共にする、人馬の主従はこんな出会いだった。

陽は語る。

「黒兎は俺の最高のパートナーだな。……しかし、カスコードって
呼びたいな」
と

第九話（前書き）

今更ですが。

鳳徳の鳳は本来、广に籠です。

でも、ひなりんもこの鳳だし、いいか、みたいな考えです。

第九話

「えーと、私は武官として山百合さんの部隊に入る予定だったと思うんですけど?」

「そうよ」

困惑した様子で質問する者に、淡々と答える。
質問者を見る素振りもない。

「じゃあ、何故太守お側仕え兼侍女みたいなことをさせられているのでしょうか?」

「侍らせておきたいから?」

「何故に疑問形ですか……。で、最も聞きたいのは、この名札の置かれた机と、そびえたつ書簡の山はなんなのですか!?!」

「貴方専用の机と、仕事だけど」

「見りゃわかるわ! じゃなくて、どうして文官みたいなことをさせられそうになっているのかを問うているんです!」

困惑から怒りに一瞬変えるが、それを無理矢理抑えて、あくまで丁寧語で書簡の山を指差して問い詰める。

それに答える者は、満面の笑みを浮かべ、親指をグッと上げてみせた。

「貴方が文官候補だからよ」

「その幻想をぶち壊す！」

書簡の山にパンチする。

勿論の如く、大きな音をたてて崩れさった。

「あ、自分で倒したたのは自分で責任持って片付けてね」

「ち、ちくしょおおお！！」

今にも泣き出しそうな声色で、しぶしぶ山を積み直し始めた。

今までの一連の流れを演じたのは、言わずもがな陽と牡丹である。

いつも、暇な時間は侍女紛いなことをやらされていた陽であったが、今日初めて牡丹の政務室に来ると、昨日までなかった自分の名入りの机に気付いた。

かねてからの疑問であったこと　何故侍女紛いをやらされていたのか　を共に聞いてみれば。

なんとということでしょう、自分の知らないところで役職が増えていくではありませんか。

陽はそんな状況を打開する一手を打とうとしたのだが、あっさり返された為、惨めに片付けをしているのであった。

S i d e
陽

どうしてこうなった！！

何時の間に文官候補になったんだよ。

何時もの一連の流れは。

母さんのお茶を淹れて、母さんからの質問に適当に答えて、ただそれだけの……あつ。

……思い返してみれば、母さんは政治的な質問しかしていなかったっけ。

さらに、たまに書簡まで見せて聞いてきたこともあったような……。

……。
うん、俺か。

そつ、それでも一言あるってもんでしょ、普通！

「どうせひと悶着あるのだから早いとこ終わらせたかったのよ」

だから心を

「それに、解るでしょ？　うちは文官が少ないのよ。……一人でも多く良い人材を集めるのが、太守の務めではなくて？」

ぐうの音もでません。

流石と言つべきなのか、何と言つべきか。

……真面目な母さんに感服したぜ。

「ほらっ、ぼーっと突っ立ってる暇なんてないわよ！」

「うい、了解」

丁寧語は、まあいいか。

Side 三人称

(面倒くさがりだけど、根は素直なのよね)

黙って席に付いて、仕事を始めだす陽を見て、牡丹は思う。だからこそ、有無を言わせないように言いくるめたのだが。その行為が、陽を騙しているようで牡丹は心が痛かった。

しかし、自分は太守。

私情をはさんだ事を言っではいられない。

文官の数が少ないことは、死活問題だからだ。

(陽はいろいろな面で頭が回るから、きっと解ってくれる……。解って、くれるっ)

だがやはり、内心ではとても歯噛みしたい気持ちだった。

無理矢理に自分に納得させようと言い聞かせても、やはり葛藤は避けられないのだ。

牡丹という女は、どうしようもなく母親だった。

(それにしても、さっきの陽の呆け様はなんだったのかしら?)

嫌なことをこれ以上考えることを止め、ふと思ったことを心で呟く。

(ふふっ、もしかして、母さんに惚れてたり……?)

まあ、冗談か冗談じゃないかは別にして、もっと母さんのかっこいいところ見せちゃおうかな)

牡丹はそれ以上の思考を切り上げ、政務モードの頭に切り替える。そんな母親の空気の変化を横目で見た陽は、一層真剣に取り組むことにした。

二人が没頭すると、そこには、さらさら、と筆を走らせる音と、時折書簡を積む音だけがするという、異常な空間が形成されていた。後々聞けば、二人のとんでもない集中力に、侍女たちだけでなく、他の文官たちも入るのをためらったという。

S i d e 陽

二刻後、そんなはりつめた空気が霧散する。

「「おつ、終わったあー!!」「」

いや、やっと終わった。

俺は一山、母さんは三山……とんでもねえです。

いや、初めてだよ!?

かなりの健闘はしたと自分でも思っただけ!

すげえ集中力だったと自分で褒めてあげたい勢いなんです。

にしても、大分時間経った気がする。

その証拠にほら、日が傾いてきて……あ、っ。

「あ、ああああー!!」

そつえば、本日、山百合さんの部隊の召集がかかってたっけか……!

せつかく、最近改めて真名の交換をしたというのに、速攻で信用が落ちた。

……オワタ(、、、)

駄目だ鬱だ死の

……いや、こんな弱気でどうする！

正当な理由があったのだ！

これを使わない手はない！

俺は、断固として戦うぜ！

さて、と。

……死地に赴くか。

横目で見えた母さんが、どこか笑っているように見えたのは気のせいだろう。

修練場に来ると、たくさん**の**兵隊さんがいました。

こんなかにはいるのか。

……やだなあ、出来なくはないけど、集団行動とか苦手なんだよなあ、俺。

そんなことを思いながら歩いていると、真打ちが登場した（汗）
いやまあ、ずっと正面にいたんだけどさ。

「……これはこれは一刻ほど前の召集に応じずそのくせそのまた一刻後に急ぐ素振りもなく平然とやって来られる胆力の持ち主の馬白様ではありませんか」

「すみませんしたー！！！」

普段の寡黙さに背反して、息継ぎなしで皮肉る山百合さんに恐れをなした俺は、その場で土下座をし、頭を垂れる。
普段はお淑やかな人がキレると怖いってよくあるよね。

(因みに。

陽が起立状態から土下座までの時間は、約0.5秒。

土下座に入るスピードにタイムレコードをつけるとしたならば、今のところ、1〜10位まで全て陽の名で埋まることとなる。
そう今のところは、だ。

この後に、自分より素早い土下座をこなす君主が現れることなど、陽は思ってもみなかった。

……思っていたら逆に凄いが)

閑話休題

言い訳もなく、誇りもなく、さりとして臆面もなく。

それが俺が土下座する時の三大信条さっ！

いや、表に出さないだけで、バリバリにびびってます、はい。

そんな俺に何を思ったか、一つ爆弾を落とした。

「……………いいですよ、牡丹様から通達はでていましたから」

……………。

……………えっ？

……………ふう。

オーケー、もちつけ、俺。

よし、深呼吸だ。

吸って、吸って、吸って……………。

「な、ななな、なんですとおー！！ 土下座の意味ねーじゃん！
なんで怒ってます雰囲気醸し出してたかな！？ チクシヨオオオオ
！！ だから母さん笑ってやいがったのかああ！！！」

はい、一気に吐き出す！

この、やり場のない感情に、頭を抱えて、かぶり振ってしまった。
周りから見ればとても痛い人に見えるだろうが、気にしねえ。

……完ッ全に騙された……！

怒りよりも脱力感が半端ねえ。

騙された自分に溜め息が自然にでるぜ。

これを考えたのは山百合さんじゃなくて、あんのどアホ母親だろう。
野郎じゃねえが、ざけんな、コノヤロウ！

「……………ぷっ……………くっく……………」

っていうか、山百合さんの肩が忙しく動いている。

……………笑ってる？

あの山百合さんが、か？

表情筋が本当に機能してるかわからない人が？

いや、俺の前だけ無表情なのかもしれないけどさ。

見上げつつ覗き込むと、必死に堪えようとしていながらも、笑みが
こぼしている山百合さん。

……………うん。

「可愛いな」

あ、声に出してしまった。

だけど、それくらい可愛いかったんだよ。
まあ、日頃の面持ちとの差、所謂ギャップ（だったか？）というものがあつたりはするが。

「……ふざけたことを言わないでください」

そう言つて、いつもの顔に戻つてしまふ。

別にふざけてる訳じゃなく、至極真面目なだけだなあ。

元々の顔立ちは、可愛いというより綺麗つて感じ。

だけど、今のちょっと幼さも残つた笑顔には可愛さがあつた、いや、ホントに。

「……本日あなたのやることはありませんですがしっかり見ておくように」

まるで逃げるように、兵たちに号令をかけにいつてしまった。

あらら、残念。

まあしかし、貴重なものが見れたな。

今日は慣れないこととしてとても疲れたんだ……役得として貰つぐらいいいだろ？

ま、答えは聞いてないけどね。

Side 山百合

牡丹様や薊様には何度も言われたことはあつた。

私の考える男、の中では、あるたった一人の男性だけ、言つて頂い

た人がいた。

自覚がありますが、元から愛想が無かつたらしく、可愛いと言ってくれたのはその三人と、変態さん達だけでした。

……綺麗だけど、可愛げないよな。

……そうだな、厳しいっつーか、怖いっつーか。

……冷たいんだろ。

……でも、その冷たさがまた。

他の男からは同じようなことを何度もいわれました。

流石に最後の人みたいな人たちは殴っておきました。

毎度恍惚とした表情で倒れていくので、根深く記憶に残っています。その総評により、氷帝、白馬の女王様という別名がついてしまいました（乗っている馬は白なのでわかりますが、女王というのはよくわかりません）。

ついた当初は別段気にも止めませんでした。牡丹様が「かっこいいじゃない」と言うので、今は好きだったりします。

とにかく、私の中でのたった一人の男性が亡くなって十余年、私を可愛いと言った者がいました。

新しく家族になった子です。

最初に会ったときは、少々戸惑いました。

あの方に容姿が似すぎていましたから　髪は白く、目付きは悪かったです。

だから、本能で男を嫌う瑠璃ちゃんと違って、敢えて距離をおきました。

そうして、人となりを見ようと思ったからです。

結果は、合格です。

真名のように、輝いていて、イキイキとしていました。

しかし、無邪気さの中に冷徹さも垣間見えたのも確かです。

あの子の武は特殊で、冷徹さの集積とっていいほどに、目が、剣筋が、冷たかった。

そこに惹かれ、認め、そして真名の交換さえしました。

そんな子が、牡丹様の手のひらの上で面白いように踊るものだから笑ってしまいました。

そんな最中に不意に言われました　可愛い、と。

あの頃はまだ十代で、慣れない扱いに戸惑いと恥ずかしさがあったのだと思っていました。ですが、違いました。慣れなどありませんでした。柄にもなく焦りました。とても恥ずかしかった。でも、どこか嬉しかった。だから、取り繕いました。赤面していないか、それだけが心配でした。そして、逃げました。

あれは、様々な感情からの逃避でした。

兵の指揮を名目に逃げる最中、忙しく辺りを確認しました。

逃げる私を自身で滑稽だと思えますから、見られたくありませんでしたから。

しかし、それ故に他に見ていた方の存在に気付いてしまいました。

「……………あう……………／／／／」

恥ずかしい。

顔が凄まじいほどの熱をもっているのがわかります。
結果を見るべく、策を考えた人が近くにいることなど、考えればわかることでした。

.....。

くっ！ 陽君、許すまじ！

S i d e 三人称

なかなかの逆恨みもいいところなことを考えていたが、その後すぐに山百合は修練場全体に聞こえるように指示を飛ばした。
どうやら将モード切り替えることで、無事に熱を冷ませたようだ。

陽を陥れ、かつ二人の様子を伺いにきていた者、すなわち牡丹は咳いた。

「あとは、瑪瑙ね」

これがまた大変なのよねえ.....、と嘆息した。

陽は語る。

「このときから、長い間ずっと悪寒が止まらなかった」と

第十話（前書き）

基本的に地の文とかの呼称は、オリ主が真名を預けられたかどうかで変わります。

第十話

「で、なんでボクがアンタなんか指南しないといけないのよっ！」

「知りません。母さんや薊さんに言いましょう」

「アンタ、母様達を侮辱する気！」

「誰もしてませんよ……」

(凄く面倒くさいです、ありがとございました)

陽は閻行と共に、先日来た馬小屋近くの広場に向かっていた。

何故なら、閻行の言う通り、陽は馬術の指南を受ける為である。

さらに、閻行が不機嫌なのは理由があった。

それは、

「ボク、アンタのこと嫌いだから」

この一辺倒なのである。

陽と山百合、閻行が会って、そろそろ1週間が経とうとしているが、話をするまでには関係は進んではいるものの、まだまだ閻行との確執はなくなっではいなかった。

話といっても先の程度。

如何に距離が縮まっていらないのかが容易にわかることだろう。

その為、なんとか二人の関係の修復を試みようとする牡丹、薊の計画が、今回の馬術訓練に繋がるのであった。

「黒兔〜！」

陽は、先日愛馬になったばかりの馬である黒兔を呼ぶ。呼び掛けに応じ、すぐさま猛然と駆けてくる黒兔。

牡丹が言うに、繋いでおくれ無駄、とのことで黒兔はほぼ自由なのである。

しかし、陽の命令によって馬小屋で大人しくしているのであった。

S i d e
陽

相変わらず速いな。

そんなことより、顔面すれすれで止まるのは止めようぜ。

マジで怖いから。

そんなことを訴えながら、首を二回ポンポン、と叩いてやる。するとブルツ、と黒兔が鳴く。

(では、遠慮なくぶつかれと?)

と聞いてきた。

……何故にそう解釈だよ。

まあ、多分冗談だろう。

そう、思いたい。

「へえ〜、仲がよろしいのね。……本当にアンタには見合わない良馬ですこと」

「ですよね〜」

閻行さんは男を下にみる節があるっぽい。

自分より弱い癖に威張ってる奴らがいるというのが癪に障るのだから。

まあ、その点に関して俺には関係ないけどな。
弱くはねえし、威張ってねえ。

むしろ、下手下手に立ち回ってやってる。
でも、その姿勢が嫌いっぽいから、本当にどうしようもないんだが
な。

……ま、黒兎が俺に見合っていないってのも事実なんだが。

「何笑ってるの、気持ち悪い」

おもつくそひいていやがる閻行さん。

知らず知らずのうちに笑みがこぼれていたらしい。

……自分でも気持ち悪いと思ったんだから世話ねえぜ。

「とりあえず、乗りなさい」

なんて無茶ぶりだよ、おい。

ど初っぱなからなんのコツとかもなしですか!?
指南者として、それはどうさ。

「百聞は一見に如かず、よ。さっさと乗りなさい!」

なーんて高圧的なんだろうか。

残念ながら、俺は被虐趣味なんてないぞ。

むしろ、こう、なんというか。

閻行さんみたいな高圧的な奴とかだと特に

「さっさと乗れって言うてるでしょうが!」

屈させてやりたい。

どうやら、俺は嗜虐志向、らしい。

なんて、アホな思考をしている暇なんざなかった。
つたく、乗ればいいんだろ、乗れば。
馬銜と呼ばれる馬具を黒兎の口につけて乗ってみせる。

「（ふん……格好だけは一丁前ね）　しっかり内腿を使って、しめ
あげる気持ちで力をいれなさい！　腰掛けるようではダメよ！」

「こっ、ですか？」

何故だろう、凄えしつくりくるんだが。

懐かしい、訳じゃないんだか、そんな感じ。

どうやったたら上手く乗れるのか、そういうのが身体から湧き出る感
じだった。

Side　三人称

「黒兎、ちょっとおもいつきり暴れてくれる？」

「ちょっと、何言ってる！　……っそ……」

閻行は、暴れる黒兎の上に平然と乗り続けている陽に絶句した。

通常数カ月、下手をすると一年以上かかることを、たった1日で平
気でやってのけたのだ。

驚いても無理はないだろう。

（……っ、そうよ、黒兎って子が手加減してるだけよ！）

だが、閻行はそのような事態を認めるのを潔しとしなかった。
いくら家族の面々が認めた奴といえど、閻行の前にいるのは、ずっ

と蔑んできた男。

簡単には認めるわけにはいかったのだ。

「いやっ、ちよっ、まっ、こくっ、止まってええええ!!」

(限度つてもんがあるだろ!)

そう心で思えば、黒兎はゆっくりと身体を動かすのを止める。
意志疎通って、素晴らしい。

(つかやっべえな、明日内腿絶対筋肉痛だな、こりゃ)

数分動いてもらっただけだが、既に脚は悲鳴を上げている。
かなりの力を使ったのだろうと思ひ、明日の自分の体調を心配した。
その中で、ふと思つた。

(そういえば、ちょっとした助言以外、何も教えもらってないんだ
が)

しかしながら、これについては陽が悪い。

馬術に限らず、何に対しても教わる上で過程と段階がある訳だが。

陽は知らずうちにそれら全てを通り越して、最終段階までクリアし
てしまったのだから。

それを知らぬ陽は、さらに閻行の神経を逆撫でする。

「閻行さ〜ん、教育放棄しないでくださ〜い」

「~~~~~! ……ないわ」

「はい?」

「アンタに教えることなんて何も無いわ！」

(え、帰っちまうの!?)

心底憤慨した様子で帰っていく閻行に、何か怒らすようなことしたか、などと陽は考える。

(今更存在自体に、って言われても困るけどな)

そう思いつつ、陽は黒兎をゆっくりと走るよう指示する。
人の感情の起伏にはたまに疎い陽なのであった。

場所は移ってある回廊。

Side 閻行

「なんなのよ、アイツ！」

なんだか無性にイライラする。

下手に出てきて、へりくだった胸くそ悪い女々しい奴かと思ったら、
たまに男の癖に意外な一面を見せてくる。

今回もそうだ。

馬をたつた1日にも満たない、あの短時間で乗りこなす？

……あり得ない。

そんなことあつてたまるか！

「どうかしたのか？」

「あつ、母様……」

うわ、ヤバ……！

よりもよって母様と会うなんて……。匙投げたってバレたら怒られる！

「またあやつと何かあつたか？」

「……え？」

母様は、優しい言葉で問いかけきた。

……怒つて、ない？

「悩みがあるのじゃろ？ それも陽絡みの。……全部顔に書いてあるわ」

「うっ……」

母様は凄い。

分かり易いのもあつたかもしれないけど、表情でどんなことを考えているのか、大抵わかってしまう。

「一体、儂が何年お主の親しておると思つておるのやら」

「はいっ！ 今年で十年目となりますっ！」

ハッキリとボクは答える。

この十年は、ボクの誇りだから。

「もうそんなになるか……時が流れるのは早いのがう」

「十年なんて、あっという間でした」

「ほとんど代わり映えのない日々だったからの……と、そうではない！」

話を拗らせるでない！

と言われた。

今の、ボクのせい？

「まあ兎に角、話してみよ」

ボクはとりあえず、相談にのってもらうことにした。

気概なく話せる唯一に近い母様に、出来事も、思ったことも全て話した。

「ふむ。……羨ましかったのじゃな」

「なっ！ 違っ「わないぞ」……」

「その才に嫉妬してしまった。……だから認めたくない。そうじゃある？」

「……………」

凶星だった。

そして迂闊だった。

母様は聡明だから、ボクが心のどこかで考えていたことなどわかってしまう。

母様に話したのは間違いだったかもしれない。
ある意味間違ってたかもしれないけど。

「まあ、非凡の身である癖に、あやつは堂々としめないから。さらに、自分が非凡であることをわかってないことがなお性質が悪い」

母様もそう評価するの……。

なんだかムカつく！

「これこれ、嫉妬心剥き出しにするでないわ。……お主はお主、奴は奴じゃ」

少しむくれていると、頭を撫でてくれた。

「お主は僕の大切な娘。そうじゃろ？」

「はっ、はい！」

（因みに。

薊は、そんな愛らしい一面を自分だけに見せる娘のことが、堪らなく可愛いと思ったりしている。
結構な親バカぶりである）

「うむ、よい返事じゃ！　そうしたら瑪瑙、お主は陽のところへ戻れ」

「えー」

「えー、ではない 儂と牡丹の頼み、聞けぬか？」

「ううゝ、わかりましたよおゝ」

母様と……牡丹様、の頼みだから、不承不承ながらやることにする。せつかく親子水入らずだったのに、水をさされた気分だわ。

陽は、自分の知らぬところで閻行の 些か理不尽である 怒り
をかっていた。

変わって広場。

S i d e 陽

相も変わらず、黒兔を走らせてる。

まだまだゆっくりとした速度だが、大分慣れてきたな。

「暇だなあゝ」

何やりやあいいのわからんから、ぶつちやけ暇。

「誰か暇潰し相手になってくれる奴はいない……」

あ、ヤバ

「ここにいるぞーっ！」

お約束通り蒲公英が表れた。

こういった問いかけをすると、どこから聞きつけたかわからんが、
ほぼ確実にやってくるんだよ。

……凄くね？

「……………」

うん、現実逃避は止めよう。

……ヤバいって言ったのは違うんだ！

ほら、あれだ、一応訓練中だから遊んではいけないと思ったただけであって。

そっ、そっだ、言葉のあやって奴で……！

決して悪意があつた訳じゃ

「どうかしたのお兄様？」

「ごめんなさい」

すかさずの謝罪だ。

蒲公英は何が何だかわかっていない様子。

俺の罪悪感からの行動だから、わかったら凄いんだけどさ。
ふう、危なかつたぜ……。

「……………って、えええ！ お兄様、もう馬に乗れる様になったの!？」

今頃気付く？
っていうか。

「そんなに驚くことなのか？」

「う、うん」

マジか。

馬術、つてのは案外難しいもんなんだな。
でも、半日でここまでできちまったぞ？

俺が凄いのか？

うん、やるな、俺。

「さて、続きをやるわよ！」

自分褒めてたら、さっきより不機嫌二割増の閻行さんが帰ってきた。
一度放棄したのに、平然と戻ってるって、どうよ。

ま、反論は認めない空気だから、黙って従うことにするけど。

「ごめんな蒲公英、呼んでおいて。埋め合わせは今度するからな」

「うん！」

さてと、やりますかねー！。

陽は語る。

「このとき、自分で言ったのを後悔するとは思わなかった」と

第十一話（前書き）

ちょっと遅れた。

第十一話

Side 陽

「ちょ、蒲公英、引つ張らないで！ 痛い！ マジ死ぬ！」

「お兄様が埋め合わせはする、つて言っただよお〜」

「うんっ！ 覚えてる！ だから、頼む、手放してくれ！」

「ええ〜！ そんなこと言うの？ たんぽぽ傷ついちゃったな〜」

「だったら、俺に合わせて歩いてくれよおおお〜！」

案の定の筋肉痛です、はい。

その所為で、ただでさえ歩くのもままならないのに、蒲公英さんは手を繋いだ左手を容赦なく引つ張ります。

拷問ですね、わかります。

「ぐおおおお……痛え……」

時折止まり、左手は蒲公英さんが放してくれないので、余っている右手で内腿をさする。

マジで黒兔に乗るのキツイ。

内腿で挟みつつ、踏ん張るとか尋常じゃない力がある。だから、内腿と腹筋あたりが凄く痛い。

本当に、足腰をもっと鍛えようと思つたりした。

「大丈夫？」

「まあ、なんとか、な」

蒲公英が顔を覗き込んでくる。

他の部位は別に問題ないしな。

「なら良かった！　じゃ、お兄様、早く早く！」

「そんなに焦ることなんてないだろ？」

「いいから、いいから」

何がいいのかさっぱりだ。

まあいいか。

蒲公英がいいならそれで。

……これで兄貴分らしくなれてるか？

えー、ここで現状の説明だ。

只今俺と蒲公英は街へと繰り出す途中。

前に約束した通り、埋め合わせをする為だ。

本当は、昨日に酷使し続けた筋肉が悲鳴をあげてたから、寝台の上から動きたくなかったんだがな。

しかしながら、蒲公英さんによって手を引かれ強制連行され、今に至ってるのだ。

きゃー、視姦されてるみたい、萎えるう〜。

（信じたくないことに）有名で名声が高く、人気者である母さん、すなわち馬騰の姪であり、性格的なものも相まってか、蒲公英は人気がある。

そんな蒲公英の隣に男　しかも手を繋いでる　、つまり俺のことが気にならないはずがない。

俺は、そ、そんなに見られたら、感じちゃう、な性癖の持ち主じゃないんで、発情なんてしないが、むず痒くなってくる。

無論、居心地が悪いという意味で、だ。

大体、こういった奇異の目で見られるのが一番嫌いなんだよ。

だから、あんまり往来を歩くのは好きじゃなかったりする。

かといって、　自分で約束した訳だし　蒲公英を無下には出来ない。

べつ、別に蒲公英の為なんかじゃないんだからねっ！

勘違いしないで、自分の言葉に責任を持つてるだけなんだから！

……………うん。

瑪瑙さんと真名交換したときの言い回しの真似、なんだが。

……男が言ったら、ただキモいだけだな。

もし金輪際、男でこんなようなことを言うような奴がいたら、問答無用で殴ってやるぜ。

おっと、話がずれた。

まあ、視線を受けながらも、人間臭いところを半ば強制的に歩かされてる。

もう両の指では数えられないほど連れ出されていたから、慣れてる

つもりなただけぞ。

「お兄様、こっちこっち！」

「うん？」

俺は、それはもう凄まじく振り回されまくっていた。服屋に入っては物色し、甘味処に入っては冷やかし、また違う服屋に入っては……と、蒲公英がはしごしまくった為だ。知り合いの人、特にご老体には、時たま声をかけたりもしていたのもある。

蒲公英は、お洒落したいお年頃でありつつも、基本いい子なのだ。蒲公英可愛いよ蒲公英。

そんなこんなで、俺は黙ってついていっていた。

「ねえねえお兄様、似合う？」

「……………」

黄緑色の髪留めで横髪をまとめている。（原作でつけてたやつ）おろした髪のままでも良かったんだが……うん。なかなかどうして。

「これ買った」

似合ってるとは思ったけど、……そんな即決されるほどあっけからんに表情変えた覚えはないんだがなあ。
つか、意外と高い。

「蒲公英さんや。……ちょっとここでまっけてくださいな」

「ええ〜！なんでえ〜！」

「さっきのゴマ団子のおかげで足りません」

まあまあ味のだったよ、うん。

「もう、しょうがないなあ〜」

「そんな露骨な反応すんなよな。……多分、すぐに帰ってくるはず？」

「たんぽぽに聞かないでよ〜」

母さんに前借りを要求してくる予定だ。

でも、あの阿呆な母親の気分次第で交渉時間が激しく変わってくるからなあ。

あの阿呆、マジで性格、つか性質が悪い。

聞けば、面白さ第一主義だということらしい。

俺を文官候補にしたの、7割が面白そうだから、だったそうだし。

あの真面目は3割だけだったと聞いた時は、俺の拳は無意識に振り上げられてた。

それに気付いた薊さんに羽交い締めされ、

「無駄じゃ、……諦めい」と諭されたけど。

ハア、……母さんに借り作るとか、気が遠くなるなあ。土下座のみで事足りればいいけどなあ……。

Side 三人称

「遅い遅い遅ーい!!」

蒲公英はほんの少し、ちょーっただけ怒っていた。かれこれ半刻は経っているにも関わらず、陽が一向に帰ってくる気配がないからだ。

自分の伯母、すなわち牡丹が面白いこと好きなことを蒲公英は知っているが、それを考慮し差し引いていたとしても遅いと感じていた。そこに……、

「よう、爺さんよ……ただでさえクソ不味いラーメンに髪が入ってるなあ、どういっつもりだ!」

「アニキの言う通りだ!」

「そ、そうなんだな。美味しかったけど、お金は払えないんだな」

「そ、そんな!」

……それはもう典型的なごろつきが表れた。

蒲公英がいる呉服店の向かい側の、老夫婦が営むラーメン屋でからその声は聞こえた。

蒲公英は、その老夫婦と気の知れた仲であるので、ごろつきの自作自演であろうことを確信していた。

だからこそ、この街の長の姪としても、一個人としても、見逃す訳にはいかなかった。

「おじさんたち、言い掛かりは良くないと思うな」

「おじさつ!?!? ……何が言い掛かりだつて? これを見る!」

そこには、しつかりスープまで飲み干された空のどんぶりの底に、黒髪があった。

「(……うわ、わかりやすっ) でも、これにすぐに気付かないほうがおかしいんじゃない?」

「これでも退かないとは……言葉ではわからないみてえだな。体に教えこんでやるうか?」

「すぐに暴力で解決しようとする。……これだから脳筋は」

蒲公英は、やれやれと言わんばかりに肩を竦め、リーダー格の男をアニキ煽る

「お嬢ちゃん、いい度胸じゃねえか。……表に出やがれッ!」

四人は大通りと呼べる、呉服屋とラーメン屋に挟まれた路地に出た。

(三人組を誘いだすことは出来た。後は、倒すだけ)

蒲公英はそれだけ考えていた。

その頃陽は猛然と駆けていた。

普段は眼帯で封じてある、黒目を開いて、だ。

実はその目、アフリカ人ばりの視力(5・0)を持っている。

右目だけでは見るに心許ない距離にあるものでも、左目では鮮明に見ることができる。

左目が封じてあるのは、そんな両目の圧倒的な視力の違いに、焦点を合わせるのに目の疲れが激しい等、いろいろ不便だという理由も含んでいた。

その曰く付きの左目によって、かなり遠くから、今の蒲公英の置かれていた状況を把握していた。

蒲公英なら多分、そんじょそこの奴には負けないだろうと、陽は思っている。

だが、陽にとって、家族の誰かに手をあげること事態が許せないのだ。

戦ならそうも言ってもらえない、と割り切ってはいるが。

「っ！ チエストオオオ！！」

チビが蒲公英に特攻をかけていたのが見えた陽は、スピードを落とさず、蒲公英との距離にして約五歩の地点で踏み切る。ジャンプ一番で蒲公英を飛び越し、そのままチビの顔面にドロップキックをお見舞いした。

「チビーーーー!!!」

陽は無事に着地し、チビは吹っ飛んでいってしまった。

「蒲公英！」

陽はそれを一瞥し、すかさず振り返り左手を出す。蒲公英は疑問に抱きながらもその手をとった。

「いくぞ！」

「わっ、わわっ」

「てめっ、逃がすか！」

蒲公英の手を引き、駆け出す陽。

いきなりのことに少し慌てるが、なんとか足を運ぶ蒲公英。それを阻止せんとするアニキ。

「誰も逃げるとは、言ってねえが」「ひぎゃっ!」「あゝ」

突如陽は足を止め、背後から駆けてくるアニキに、右脚の後ろ回し蹴りを放つ。

それはアニキの虚を付けた……そこまでは良かった。

しかし、いかんせん突然だったので蒲公英は止まれず。繋いでいた左手が前に引かれたことによって、腰のひねりと左脚を軸とした遠心力が十二分ついた踵がアニキの右側頭部に入ってしまった。

陽はちよつとだけ罪悪感を覚えた。

S i d e
陽

「大丈夫ですかー？」

正直マジで痛そうだな……。

ハッキリ言って、相当な威力だったから、死んでもおかしくはない。いや、生きてますけどね。しぶとい。

あ、なんかむさいのきた。

「あ、アニキの仇、なんだな」

「正当防衛だ。……つか勝手に殺してやるなよ」

「え？死んでない？」

「ああ。だから金置いて、そいつらもってさっさとどっかいけ」

「わ、わかつたんだな」

「次はねえぞ」

金を置いてそそくさ（といっても、デブ体型かつ、のびてる二人引き摺ってるからかなり鈍重だが）逃げていった。

『うおおおおー！』

『やるな、兄ちゃん！』

途端、賞賛の声があがる。

正直うるさい。

こっぴうの嫌いだし。

「ありがとね、お兄様」

「「ありがとっござえます」」

「うーん、蒲公英でも出来ることに横槍いれただけなので、感謝される筋合いないんですけどね」

むしろ、邪魔したかもしれんな。

終わりよけりゃ全て良しだが。

陽の、賊二人をいとも簡単にのした実力と謙虚ともとれる態度に、民衆からの評価もうなぎ登りに上がっていくのであった。

その後。

「お兄様」

って、うおっ。

腕を引かれたことよって、中腰みたいになる。

忘れていた筋肉痛がッ！

おおっ、パネエっ！！

そこに、頬に柔らかい感触とともに、聞き慣れない快音が耳に届く。
蒲公英の頬が若干紅く染まった顔が異様に近いんだがな。
何だったの？

「ホントにありがとね」

陽は語る。

「なんだかんだ、町に出るのが楽しみになっていった瞬間だったよ」と

第十二話（前書き）

シリアス？です。

てか、そろそろ主人公設定とかうpした方が良いのだろうか。

第十二話

ある執務室から出てくる二人。
一方は呆れ、項垂れていた。

S i d e
陽

「ねえ、山百合さん あの人馬鹿ですか？ 馬鹿ですよ？ 馬鹿
だと言ってくださいっ！」

「……本当に馬鹿でしたら、漢から見ればこのような辺境の地、直
ぐにでも落とされているでしょう」

「いや、そういうことじゃなくてですね。……百騎で五百人相手に
しろとか、おかしいでしょ！」

「……一人五人斬れば良い話です」

「だから、そういうことじゃねえって！」

「……ならばなんだというんです！」

「なんかキレられた！？ 敵より多く兵を揃えるという常識、完全
無視つてのがおかしいでしょうが！」

「……たかだか賊五百人ごとき、百騎で十分と判断したのでしょ」

「いや、でも、もっと多く兵を用意して、一気に殲滅で良くないですか？」

「……必要ありません。機動力が落ちますし、それに、百騎中には私と貴方、陽君がいるのです……十分過ぎるでしょう」

「どんな働きを期待してるか知りませんが、俺、一般兵かつ初陣ですから！」

「……関係ありません」

「関係ねえの!？」

もう僕ちゃんびつくりですよ。

君主が無茶苦茶だったら、家臣も無茶苦茶とか、なくね？

いや、まあ山百合さんは忠実に従ってるだけだと思うが（むしろそう願いたい）。

それでも、振り回されるこっちの身にもなれってんだ、コノヤロウ。いや、野郎じゃないんだけど。

今から初陣ですよ？

二人とももつと勞れや。

完全な被害者たる俺が、ちゃんと政務に励んでいたと思えば、これだ。

「山百合、百騎連れて賊五百人の殲滅、宜しくう」

「……はっ！ かしこまりました」

「あ、陽もついでにいつてきなさい」

「……ええ」

「山百合、連行！」

「……はっ！」

「ちよっ　ぐえ、ぐび、じっ、じまっでまっずっで」

ついでつてなんだよ。

そんなノリで死地に踏み込ませる馬鹿がどこにいる。

そこにいるぞー！だつて？

ははっ……殴つたるかボケエ！

Side 三人称

元々、牡丹は早いところ陽を戦場に立たせようと画策していた。

戦場に立ち、どれ程の実力を発揮し、どのような戦功を立て。

そしてどうやって自分の隣まで登り詰めてくるのか。
楽しみで楽しみで仕方がなかった。

そこへ、偶然にも転がりこんできた、願ってもみなかった賊退治の
依頼。

それも、五百人という、測るにはもってこいな人数。
だから、万が一の為に山百合をつけつつも、あえて兵を減らしたの
である。

「ふふっ、楽しみね …… って、今日の陽の分どうするのかしら
？」

自分の右前には、高々と積み上げられた山が三つ。

そして左前方の陽の机には、これまた高く積み上げられた山が一つ。
いくら考えても、自分がやる、という結果しか見えてこなかった。

「…………… たーすーけーてーあーざーみー（泣）」

執務室にこだます、悲鳴にも聞こえる声。

まるで、の○太が猫型ロボットを呼ぶような声だ。
されど、援軍が来ることはなかった。

S i d e
陽

意外と近かったな、おい。

「……鋒矢の陣を敷き、騎馬の勢いを持って一気に蹂躪します」

応、と力強く、きびきびとした声で返事をする皆さん。

ま、俺初陣だし、どうせ比較的安全なところだろう。

皆さん頑張れw

そんなことを考えてると。

「……先頭は馬白で」

馬白……馬白……あ、俺か。

……。

(……って、はいいい！?)

危ねえ、声出そうやった。

……あの、こんな状況の経験者はいますか？

その方に質問です。

実際にこういう状況に置かれたときって、爆笑か、渴いた笑いか、泣くか。

どれがいいんです？

ちよつwwおまつww

みたいにすればいいの？

まあ、聞いたところでどれもせず、ただ今の様に無表情を作り続けるけどな。

「質問です！ 何故僕が先頭なんですかー？ この部隊の隊長で

あり、強者である鳳徳様が先頭であるべきではないでしょうか？」

わざわざ手を挙げて質問した。

流石に、ここでは真名では呼ばねえさ。

ただでさえ、今はいきなり先頭に抜擢されるということに不信感を抱かれているのだ。

そこに、上官である人の真名で呼ぶなんて無礼な真似、出来るかつ！
っー話だよ。

そして、ここにいる皆が頷いた。

そらそつでしょーね、ふっー。

「……愚問ですね。答えなどわかっているでしょう？」

いや、答えてやれよ……。

皆さんはわかんねえだろ。

黒鬼のせいだつてことをさ。

何故つて、黒鬼さん速すぎるんだもん。

「しかしー」

「……これは決定事項です。異論は認めません」

やりたくない俺は、反論を試みるが、山百合さんは有無を言わせてくれなかった。

ひどい。

これに対して一瞬どよめく皆さんだったが、すぐに治まった。

隊長の それも将軍中で一番の信のおける（らしい） 山百合
さんの命令にこれ以上とやかく言うつもりはないらしい。

……つかさあ、再三言ってるけども俺、初陣なんだって。
先頭とか死なせる気？

まあ、死ぬのも一興だけど。
でも、生憎と死ねないんだ。

”死ぬな”

……もう五年ほどにもなる、昔に契った古い古い約束。
俺からの約束は破られたのに、俺は何故か破りたくなかった。
ま、今は関係ねえわな

人を殺すコト。

それは意外にも簡単だった。

一人目は袈裟斬りで、二人目は喉への突き、三人目は首を跳ね、四人目は、……と二桁殺したところからわざわざ殺し方や殺した数を数えるの止めた。

死んだ奴のことなど、気にしていられなかったからな。

……いや、いちいち気にする必要なんてないんだが。

俺は黒兎の背の上で、ただただ槍を振るえば良いんだからな。

俺の思念を読み、黒兎は動き。

俺が思考しておらずとも、黒兎は動く。

人馬一体と言うべきなのか、黒兎に動かされている、と言うべきなのか。

とにかく今の俺は、俺たちは、負ける気など起きるはずがなかった。

取り残しは、まあ、後ろに任せますよ。

Side 三人称

先頭を走って 勿論すれ違う奴らは全て斬り伏せて いると、
陽は見たような奴らを見つけた。
確認すれば、この前逃がした三人組であった。

なんとなく観察してみると、その中のアニキが、この賊どもの頭らしいことがわかった。

気が向いた陽は、逃げようとしていたところを捕まえることにした。
陽が、……再登場早すぎだろーが、と思ったのは余談である。

「って訳で、そろそろ死ぬ？」

「いやいや、どういふ訳でだ！」

「そこにいるデブに聞いたらわかるだろ」

「どういふことだ、デク！」

アニキが振り返り、デクに問う。

間違えることなかれ。
デブではなく、デクである。

その間に陽は黒兔から降りた。

「なあ、兄ちゃん。……また、見逃してくんねえかな？」

デクから聞き、再び陽の方に身体を向ける。

陽が剣呑な目を向けて、腰に刺さっている　今の状況だと槍より
使い勝手が良い　剣を抜いて切っ先を向ければ、アニキは慌てて
取り繕う。

「勿論タダでは言わねえ！　……何が欲しい？　金か？」

陽は無意識の内に、剣の握る手に力を籠めていた。

アニキは如何に自分の身を守るかで精一杯なのか気付かない。

さらにアニキは言葉を紡ぐ。

……それが自らの首を絞める結果になっているとは気付かずに。

「そつだ！　ご要望とあらば女でもいいぜ？　今いる上玉の奴は皆
アンタに回してやるよ！」

「その金と女は、何処で仕入れた？」

「勿論、そこいらの邑からさ」

「ふん」

陽は右手に持った剣を挙げる　ゆつくりと、されど確実に。その行為は、剣を肩に担ぐ過程であるように見えなくもない。だが、後ろで見ていたチビとデクは気付いていた。……明らかに殺める為の動作であると。しかし、陽の一挙一動にあわせて、凍えるてしまうのではないか、と思えるほどに温度が下がっていくことに。凍てつき、冷たい陽の右目に、恐れ、声すらもだせなかったのである。

「あつ、アニ……」

ピタリと陽の挙げる剣が止まる。

これ以上は流石に不味いと思ったチビは、懸命に声を上げようとした。しかし、その瞬間、冷たい殺気が向けられ、口を閉ざしてしまった。そして、窺うように陽を見た途端、チビは固まってしまわずにはいられなかった。

射殺さんばかりの、酷く鋭く冷たい陽の右目と目があってしまつては。

「あ……い……」

「なあ、だから、なあ頼むよ兄ちゃん！」

チビは身震いが止まらず、押し黙ってしまった。よってチビの声は届かず、まだアニキは気付かない。そればかりか、アニキはさすがのように陽の裾をひき、頭を下げたに懇願する。

「頭、上げな」

(へへっ、ちよろいもんだぜ)

そう思いながら、素早く頭を上げるアニキ。
しかし、現実には甘くなかった。

陽の右目が、それを雄弁に語っていた。

すぐにアニキも動かなくなってしまった。
いや、本当は動けなかった、が正しい。
まるで、本当に凍らさせられたかのように、逃げなければ死ぬ、と
頭でわかっているのに、身体が固まってしまっていたのである。

「俺、正直どつちにも興味ねえから。それに、アンタ前科たっぷり
みてえだし、……死ねよ」

(嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！)

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない
死にたくない！！

だずげで、があぢゃーん！！)

口を開くことさえ出来ないアニキは、心の中で叫ぶ。

しかしその叫び、陽にとっては駄々漏れの言葉だった。

陽にしてみれば、ここまで動揺しきった人の心を見透かすことなど
容易だったのだ。

陽が目を鋭く細める。

それにより、一気に温度が下がる。

そして……、

「……ちつちええな」

……陽は剣を振り降ろした。

陽は、頭^{かしら}であったアニキの首級を持ち、来た道を帰る。

その道は壮絶だった。

全て一太刀で斬り伏せられた死体が、通った道を示すかのように並んでいたのである。

それを成した者。

それは、先頭をひたすら走った者。

名を馬白、真名を陽と叫んだ。

この戦いは陽が、”西涼の天狼”として台頭するための前哨戦であるかのように、陽のために用意された独壇場だった。

「なんだか、……虚しいよな」

そう思わねえか、黒兎。

道中その声を洩らし、自分の馬に問いかける陽。

されど、今回ばかりは黒兎の嘶く声しか聞こえなかった。

そう。

だから、山百合が、帰ってきた陽に付着した返り血が、陽の涙のよ
うに見えたのは見間違いではなかった。

陽は静かに語る。

「初めての戦で、相手は全滅。俺が殺したのは総勢33人。……意
識して数えてた訳じゃなかったのに、未だに覚えてるよ」
と

第十三話（前書き）

また、ちょっと遅れた。

第十三話

S i d e
陽

憎き太陽から光を受けた満月が、東の空から下界を明るく照らすかのように輝く、俺にとって一番腹立たしい夜。

俺はいつもの城の上に来ていた。

どうやって登ったかは割愛だ。

未だに、騒がしい声がここまで聞こえてくる。

たった百人にも満たない数でのひっそりとした勝利の宴だったはずなのに、この騒がしさはなんさ。

戦後の昂りを鎮める為に酒を飲むらしいが、むしろ酔いによってもっと舞い上がってるんじゃないか？

って感じで、俺にはそのノリについていけないというか、合わないし、考えたいこともあったんで、その宴会から抜けてここに来たって訳。

俺と皆さんとの間にはかなりの温度差があったからねえ……。

正直、皆さんからすると盛り上がり欠ける奴は邪魔だっただろうから、抜けたのさ。

べつ、別に仲間外れにされた訳じゃないからな！

「ぐへっ！」

……今のは、瑪瑙さんの真似した自分への罰だ。

ま、一番の戦功者である（らしい）俺が抜けてもいいのか、って聞

かかれたら、すつげえ答えにくいんだけどさ。

そんなことはさておいて。

今日、初めて人を斬りました。

自らの手で、殺しました。

まだ斬ったばかりであるかのように、手にはその感覚が残っている。未だ戦場にいるかのように、血の臭いが鼻にこびりついている。

だが、特に罪悪感に苛まれてはいない。

……その必要すらもな。

どちらかといえば、俺は悪人っぽい考え方だが、別に殺意に任せているから、って訳じゃあねえ。

誰かを傷つける、斬る、殺すということは、それと等しく自分が、傷つけられる、斬られる、殺される可能性がある。

その因果応報を受け入れる覚悟を俺は持っている。

さらに、殺せば何らかの益に、殺さなければ何らかの不利益を生むであろう奴らを殺したただけだ。

殺すコト＝罪。

俺の頭の中で、この等式は成り立っていないので、なんとも思わねえんだよ。

ただ、虚しいと思うが。

だから俺に、罪の意識はねえ。

かといって、俺自身がやったことが正義だと思っている訳でもねえさ。

人の見方によって、捉え方が違うだろうけどよ。

大体、ガキの頃、散々いろんな人を　特に俺を利用してきた奴らを　見殺しにしてきているから、罪悪感なんて今更ってやつなんだよねえ。

あと、俺、基本大人嫌いだから、マダオ（まるでダメな大人）を消すことができるだけ、俺にはむしろ喜ばしい限りだ。

……この人間嫌い、戦時に湧き出た冷たい殺気の根源となっているっぽい。

よくわからんが、なんとなくわかる。

言ってること矛盾してるけどな。

そういうのを改めて考えられた今だからこそ、本当に、蒲公英には驚かされる。

Side 三人称

ときはさかのぼること、二刻前……。

太陽は沈みかけ、西の空は血に染まったかのように、真っ赤に映えていた頃。

陽と山百合を含めた百騎は帰路についていた。

いや、厳密には98+1+1と言ったほうがよいだろう。

九十八騎が前を走り、その後ろに山百合、さらにその後ろを陽が追っているからだ。

行きは、先頭を山百合、九十九騎が後に続く形であり。戦闘直前に、陽と山百合の位置が代わっただけだった。

では、何故行きとは違うのか。
主に、というか、徹頭徹尾陽の所為である。

陽は、戦が終わっても、アニキ（とついでに二人）を斬ったときの冷たすぎる目と、漏れ出る殺気を抑えられなかった。

陽のその目を見、全身に纏う冷氣にも近い殺気を感じた山百合は、一瞬身震いし、怯んだ。

……歴戦の将である鳳令明でさえこの有り様だ。

いくら自分が選抜した九十八騎でも、耐えられはしないだろう。

そう判断した山百合により、隊と陽の間に自分が入る、という今の形に至るのだ。

未だビシビシと背に刺さる殺気に冷や汗をかきながら、山百合は馬を走らせた。

程なくして、城に到着する。

兵のまとめ上げも完了し、戦後処理を皆に一先ず任せ、陽君を連れて玉座に参上しようか、と山百合が思っている。

そのすぐ先に、珍しく出迎えがあった。

牡丹、薊、瑪瑙に翠、そして蒲公英……家族皆が来ていた。

ほとんどは、陽を気にしているのだと分かった山百合は、いちいち言及することはなかった。

「……今しがた、参上奉ろうかと愚考しておりました。しかしながら御足運ばせる結果となりし我が遅行、どうかお許しを……」

山百合は、片膝を着き、左の拳を右手で包み、頭を垂れる。

「別に問題無いわ。こっちが勝手に出向いただけだし。……しっかしかったいわねえ」

「今に始まったことでは無かるうに」

牡丹の呆れを含んだ言葉に対し、薊が答える。

「まっ、そうなんだけどねえ。……ところで山百合、……陽、どうだった？」

「……言わずとも、直にわかると思います」

心配するようで、かつ、好奇心を含んだ牡丹の問いかけに、頭を上げて山百合は答えた。

「「どづいづこと」／＼だ」？」「

「翠、ボクに被せてくるなんていい度胸ね」

「はあ？ お前が被せてきたんだろ？ あたしの真似して」

「何でボクがアンタに被せなきゃなんないの？ ばっかじゃないの？」

「んだと……っ！」

翠と瑪瑙が同時に尋ねる。

見事にハモってしまった仲の良い二人は、口喧嘩を始めてしまう。

「聞く前に、呼べば早いのになあ……」

蒲公英は、そんな二人に呆れていた。

……妹分に呆れられる姉貴分ってどうなの、と思っただら負けである。

「……やんのか？」

「ボクに喧嘩を売るなんて、ホントにいい度胸ね！」

二人の口喧嘩が本格化し、どこからともなく武器を取り出し、打ち合いが勃発……

「っ つ！？」

……することはなかった。

二人の本能が、無意識に殺気に反応したからだ。

その冷たい殺気が漂ってくるほうに構えれば、山百合がいた。

（山百合さんの殺気はこんなに冷たくはなかったはず）

（じゃあ誰だつてんだよ！）

（知るか！ ボクに聞くな！）

共通の敵と判断した二人は、意志疎通をとる。

二人の仲は、喧嘩が絶えることがない程最高に良いが、そのお陰が連携は、他の誰と組むよりはるかに屈強だった。

「……あれ、皆勢揃いでこんなところで何してんだ？」

「……へっ？」

山百合の後ろから、聞こえる声に素っ頓狂な声を上げる二人。

(まさかとは思うけど……陽？)

(あっ、ああ、まさか、な)

(あれ？ どうしたのかしら、翠？ 震えてますよー？ ……ビビってんの？)

(バツ、そんなんじゃ……。へっ、人のこと言う癖に、自分も震えてるぜ？)

(ボクは翠とは違うの。……そう、これは武者震いというものなのよ)

(ははっ、そうか、そうか)

(……何よ)

(んだよ、やんのか？)

二人は小声でも口喧嘩するという、なんとも珍妙なことをやってのけていた。

いや、むしろ軽口を叩きあっていないと、耐えられそうになかったのである。

陽が一步近づくとに漂ってくる、心底まで凍えそうな冷たい殺気に。

「……いねほどはね」

「うむ、お主の全盛期を彷彿とさせるようじゃ」

「あら？ 私はまだ現役なのだけど？」

「どの口が言うか。……二年程前から落ちて来ておるぞ」

「まあ、……張り合いがなくなっちゃたからね」

一瞬だけ寂しい目をする牡丹。

「そんなことより、陽ってば、その全盛期とやらの私なんて確実に凌駕しているわよ」

「だったらどうするのじゃ？ あれは流石に不味いぞ？」

薊は、その牡丹の一瞬の変化に気付くも、理由も知っているので、何も言わず流した。

そして、陽についての会話を進めた。

「分かっているわ。そのためにわざわざ私の息子にしたのよ」
「自分と似ている。」

それは、陽の冷たささえ読みきつての発言でもあった。

「よ お兄様！」
ムカツ！」

「これ！ 姪っ子に怒りを露にするでないわ！」

陽、と言おうとした矢先、その言葉は違う言葉に遮られてしまう。
それをしてしまったのは、蒲公英。

別に狙った訳ではない。

偶然である。

台詞を被らされたことと、先駆けされたことに反応する大人気ない牡丹。

それにすかさずツッコミを入れる薊。

今でこそ、阿吽の呼吸で漫才できる程の間柄だが、それぞれの娘

翠と瑪瑙 の関係と同じく、この二人も実は昔、仲が悪かったりしたのは余談である。

「お兄様！」

もう一度声を上げ、陽を抱き締める 身長差がある為、抱き付くような形になっているが。

「……無理、しないでね？」

「……………」

他の面々が、冷たい目に、殺気に、たじろぐ中、蒲公英は臆すことなく見上げ、陽の目をきちんと見て訴えかける。その行為に、陽は思わず声を失ってしまった。

蒲公英の武は未だ完成されておらず、相手の心気を感じることにまだ疎かった為、出来た所業だった。

それを知るところではない陽は、今まで何人たりとも近づけなかったのに、それをいとも簡単にやってのけるとは、と素直に驚いていたのだ。

そうして、陽は心のどこかで、大人びた一面を見せるものの、まだ子供である蒲公英を傷付けることを拒んだのだろう。

不安げに揺らぐ蒲公英の瞳に映る自分を見て、

(…………おっそろしい顔してんなあ、俺)

そう思い、苦笑することで纏っていた冷たい殺気を霧散させることに成功させた。

それと同時に、はりつめた緊張感も消え、翠と瑪瑙は揃って腰をおとし、山百合も、ほっと息を吐いた。
一方、牡丹と薊とはというと。

「私って、何なのかしら。…………ぐすん」

「おお、お痛わしい限りじゃ」

よよよ、と言わんばかりに泣き崩れる義姉に、慰めの言葉を掛けるの義妹。
といった、かなりシユール光景を形成していた。

場所と時は戻って、再び城の上…………。

S i d e
陽

そういえば、

「何故自ら武勇を奮い、戦い、そして殺すのか」
と、戦功が認められ、玉座に参上したときに”馬騰様”に聞かれた。

戦で人を初めて殺した兵には必ず聞く、という習わしであるらしい。

奴らがやってきた事をやり返してやりたいから。

一般的にそう考えれば、一番楽なのだろう。

しかし、正義面して、やることは同じってのは最高に笑える。殺しの理由付けとしては、馬鹿馬鹿しすぎるので見当違いだ。

次に、誰々のために、ってやつ。

これも、考えれば簡単なことだろうさ。

だが、求められているって訳でないのに、勝手に、何々の為に、だの、皆の為、とか、責任転嫁にも程があると俺は思ってる。

俺自身、重い嫌いなんで、

「俺は戦う！何々の為に！」

みたいな殺し文句っていいのか？

これも不適當だ。

大体、戦うのに理由が必要か？

人を殺すコトに意味を見出だす必要があるのか？

……等々、いろいろ思ったが、建前上、

「馬騰様の歩む道を阻む者を排除したいが為にございます」と答えておいた。

”母さん”は、すっげえ胡散臭さそうな顔してたよ。

まあ、正直なところ、ひねくれた頭から弾き出された答えは、今のところ一つだけ。

「置かれている環境の改善」

そう、私的な場で”母さん”に本当のことを伝えた。
そしたら母さんに、そんなところだと思った、などと言われた。
心を読んでいましたよ発言には、もう何も言つまい。

陽は語る。

「俺と蒲公英は、孫策と周瑜の関係にある意味似るのかな？ ……
ただ、戦によって引き起こされるモノは真逆だし、やることで冷め
た感情が戻るって訳じゃないけどな」
と

第十四話（前書き）

一限があると、ペースがホントに乱れる。

そんな訳で、また遅れたぜ！

第十四話

「ふっ、やつ、たあ！」

「……まだまだですね」

三連撃をいとも簡単に避け、いなし、そして弾く。そして、流れるような反撃をする。

「わっ！？ あっぶな〜……。だったら、もっと手加減してくれたってえ〜」

「……良いのですか？手加減しても」

「うう〜……。やっぱ、ダメ！」

「……左様ですか」

片方は、笑顔を僅かに溢すも、また直ぐに真剣な面持ちをして対峙する。

もう一方は、いつになく真剣な顔をして槍を構えていた。前者は山百合、後者は蒲公英である。

何故二人が　というより蒲公英が　鍛練しているか。それは、蒲公英自ら山百合に願い出たからだ。曰く、強くなりたい、と。

先日の賊討伐戦は、牡丹によって無理矢理組み込まれたものであったので、山百合はその分の休暇を得ていた。正直暇をもて余していたところに蒲公英が教えを乞うてきたので、快く引き受けたのだった。

「……………少し休憩にしましょう」

鍛練用の、槍に見立てた棒を杖代わりにしてなんとか立っている蒲公英に声を掛ける。

「……………うう、疲れたあ」

その場に座り込む蒲公英。鋭い一撃ばかりで気を抜くことができないので、その分短い時間でも疲れるのだ。

「……………何故今、強くなりたいのです？」

特に焦る必要はないでしょう？

と、山百合は思い、些か唐突に蒲公英に問うた。

確かに、この今にも乱れそうな不穏な世界で確実とはいかずとも、高い確率で生き残る為には、それなりの腕が必要だ。

しかし、蒲公英は既に、訓練された一兵卒を凌ぐほどの実力をもっている。

焦らず、むしろ時間を十分に掛ければ将になれるだろう、と山百合に思わせるほどの資質があった。

時間を掛けずとも、今回の様に 質を上げればなんとかなら

ないでもないが、時間を掛けるにこしたことはない。
だから、何故強くなりたいのか。
山百合は理由が聞きたかった。

「…………お兄様には内緒だよ？」

指を唇に当ててジェスチャーする蒲公英にコクリ、と山百合は頷く。

「ホントはね、あのとき、すっごく怖かったの」

(…………あのとき、とは…………?)

と、山百合は思考する。

「お兄様がお兄様じゃない様に見えて、怖かった」

(…………あのとき、ですか)

話し始めてからずっと伏し目がちな様子と、ポツリポツリと小さく
呟く様子に、山百合は解釈する。

あのとき、とは、陽が初陣から帰ってきたときのことだ。

確かに、戦中、後の陽君は別人の様だったなど、山百合は思い返す。

「目も、いつも以上に鋭くて…………。でもね！」

「…………でも？」

「どこか悲しそうで、辛そうだった。泣いてる様にも見えただ…

…」

「……………」

いつも明るく、元気な蒲公英が陰りをみせる。

浴びた血が陽自身の血涙に見えていた山百合は、無言で頷いた。

「だからね、お兄様の悲しさ、辛さを共有したい、共感したいって思った……、んだけど」

「……………だけど？」

それだけの意志だけで今は十分だと思うが、まだあるのか、という疑問に、思わず言葉を復唱する山百合。

「たんぽぽはまだ子供だから、戦にはいけない。けど、あと少しも経てば、戦場に立つ日がやってくるのは分かってる。だからね、そんな時にお兄様の足を引っ張りたくない……むしろ支えてあげたい、助けてあげたい、って思ったの！」

「……………！ 成る程」

勿論、街のみんなを守りたいって気持ちもあるけどねっ！

と続け、いつも以上の眩しい満面の笑みを浮かべる蒲公英。

好きな人の為に、と、自分の気持ちをこんなにも素直にだせるのか、ここまでのカクゴを持っているのか、と山百合は素直に感嘆する。

（……………まだまだ子供だ、と思った私は見誤っていたようですね。

流星は牡丹様の姪……いえ、自らが持つモノに血統なんて関係ありませんか）

知らぬところで成長していた蒲公英を、我が子であるかのように山百合は喜んだ。

「……でしたら、すぐにでも再開しましょう」

「ええー！ もう少し、もう少しだけ休憩！」

「……強くなつて、陽君を支えたいのでしょう？」

「うっ……。そつ、それは反則だよ」

蒲公英は、やっぱり話さなければよかったかなあ……、と頂垂れながらも立ち上がる。

山百合はそんな蒲公英を、少しだけ、ほんの少しだけ羨ましい、と思っていた。

時を同じくして、陽は、というと……。

「ふあ〜……ああ〜、ダルいや暇や平和や、ダルダルダルビツシユ
やあ〜」

……山百合同様に休暇を貰っていたので、二度寝できたからという非常に微妙な理由で、いつになく上機嫌だった。

いつもの様に日が昇らぬうちに起きた陽だったが、今日は非番だ、
と思い返し、やることに特に見つからなかった。日課の鍛錬も、
今日はない日だった。ので眠った。

しかし、非番だろうが、勿論のこと朝夕食時のルールは適応される。
……むしろ非番ならば尚更のはずである。
ということだ、

「なんでボクがつ！いつもみたいに蒲公英でいいじゃないっ！」
と呟きながら瑪瑙が陽の寝室に赴いた。

……が、寝ている陽を起こさなかった、否、起こせなかった。
寝顔が幸せそうであつ、可愛かったから、というなんともベタな理由だつた。

いつもとの凄まじいほどのギャップを感じつつも、邪魔してはいけないという感情が湧いたので、そつとしておいたのであつた。
そのことにより、現代でいうところの、10時頃まで情眠を貪っていたのである。

S i d e 陽

何もすることがない退屈感が好きですが何か？
長く寝過ぎたときの倦怠感も好きですが何か？
ダルビツシュって誰ですか？

……一体、誰に話しているのだろうか。
まあ、いいか。

「腹減つた」

こんな時間にメシがある訳ねえだろうなあ。
久々に作るのかな。

ずっと主に母さんの料理しか食ってなかつたし。
まあ、母さんの料理旨いからいいんだけどさ。
だが、たまには自分で作るってのも悪くないだろう？

「という事で、やって参りました、厨房です！」

周りに誰もいない。

……なんか寂しい。

さて、朝飯というには遅い、昼飯というにはまだ早いので、仕込みをすることにしました。

……麵打ちからやろうかな。

料理に関して、俺は本格派だ。

やるからには全部自分でやらんと気が済まん夕チなのだ。

「……なんもねえ」

マジでびびった。

野菜がない小麦粉もない肉とかもない。

……なんもできねえええええ！！

あぁつと、かろつじて豆腐があった。

……なして？

豆腐だけとか最早意味わからんわ。

いいよもう、……麻婆丼にするから。

ひき肉買いにいつてこよ。

母さんの商談は成立し、お金貰いました。

「その斬新な麻婆丼とやらを私にも作りなさい」

要約するとこんなん。

別に作る分には問題無いんだけどさあ。

……麻婆丼って斬新か？

などと考えていると、ちょうど中庭にさしかかった。

「あれ？ 蒲公英……と山百合さん？」

母さんの執務室から外に行く廊下を通ると、中庭が見渡せる様になっている。

いわゆる、ご都合主義？

とにかく、珍しいと言えば珍しい組み合わせでの鍛練がちょうど終わってたっぽい。

「お兄様、どこかいくの？」

あ、蒲公英さんに気付かれました。

別に隠れてた訳じゃねえけど。

「まあね。ただの買い物さ」

「たんぽぽも行くー！」

「構わんけど……大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題 「それを言ったらいけません！」 むむっ

肩で呼吸してるもんだから心配してやれば。

キリッ、って感じで言い出すもんだから、一応遮っておきました。

「ホントに平気か？」

「うんっ！ ぜんぜん疲れてないよ！」

「……ならば、もう少し 「さっお兄様、行こっ！」 ふ、仕方ありませんね」

俺の手を取り、逃げるように走りだす蒲公英。

山百合さんが、分かっていたけどね、的な感じで肩を竦めている様子が見えたが、気にしないの方向で。

Side ????

この邑に来たのは久方ぶりだ。

捕らえられないように、わたしの住む村の周りにある村や街、邑を順番に巡っているから、前回来てからずいぶんと間が空いちゃった。

さて、本日の狙いは、っと。

そーだなあ……、鈍重なデブとか、女連れの優男とか、かな。

そういう奴らからって、すっごく簡単なんだよね。

サクッといつちやおう

そこに丁度、前から、白髪で左目を眼帯で覆っている、少し背が高

めで、穏和そうな雰囲気の男と、少し長めの薄茶の髪を左横で結んでいる、活発そうな雰囲気の少女（といってもわたしよりは2、3歳は上だろう）が仲良く手を繋いで歩いてくる。いかにも仲睦まじい兄妹、だ。

……関係、ない。

他の兄弟姉妹がどうなっても、幸せを奪う結果になっても。

……関係、ない。

自分の弟の為に、家族の為に、わたしはなんだってしてやる。

男は右手を繋いでいる。

左目が覆われてるから、空いている左側は死角になってる。

まさに、カモがネギを背負っているのに、翼までもがれているような状態だ。

こんな千載一遇の好機、逃す訳にはいかない！

（いつもの様にぶつかって、懐に手を入れ、盗って、平謝りして逃げるだけ）

頭の中で唱え、イメージしながら、少女はその二人組へと足を運ぶ。顔を俯き気味にし、小走りして、さも、急いでいるかの様に。

「……っと、そうだった」

「……っ！……」

男が左足を半歩翻したことで、左半身に当たりになっていた少女は当然すかしをくらう。

しかし、ただでは転ばないのが、スリのプロ。

懸命に手を伸ばし、相手の服の裾を掴んで崩れかけたバランスを戻し、懐にもう一方の手を伸ばした。

……が、左腰に刺さる男の剣によって阻まれてしまった。

一般人では明らかに目視不可能な引っ張られる裾に注意がいくため、手が、動かないはずの剣に阻まれた。

それは、格の違いを意味した。

「……やっぱり、か」

腕を捕られ、バレていたかのような発言に驚愕の色を露にするスリ未遂の少女と、理解が追いつかず思案顔をする、言葉を発した男と手を繋ぐ少女。

「スリが辺りで多発している」ってのは何回か報告にあったけど、まさかなあ……」

「……どういうこと？」

「んー、母さんがね、”買い物ついでに、スリ事件解決してきてねー。今回はこの街っばいから”って言ってたんだよ」

男、すなわち、陽の困ったような声色に、手を繋いだ少女こと蒲公英は、陽に問う。

すんなりとお金を持たされた理由は、ここにもあったのだ。

「まあ、元々視線には気付いてたけどさ」

(獲物を捉えたような視線にね)

と、心で言葉続ける陽。

スリ未遂の少女は慌てて土下座する。

陽から見れば演技甚だしく、慣れた動きの様だった。

「ごめんなさい！ その、お金……がなくて、貧しくて、日々の食事も儘ならなくて……」

「こんなに肉付きが良くて、顔色が良いのにか？ はっ！ 嘔泣きもいところだ」

涙ぐみながら、ぼつりぼつりと話す少女。

そんな少女に、容赦無い言葉をぶつける陽。

冷たささえ覚えるほど瞳は、少女の心まで見据えていた。何気に酷い。

しかしながら少女は、気丈にも睨み返していた。

「お兄様っ！」

「……ふっ、わかったよ」

グイッ、と右手を引かれたので、陽はそっちを見る。

そこには怒った顔の蒲公英。

元々、それ以上責める気なかったのか、蒲公英に怒られてなのか。

陽は鋭く冷たい目を止め、少女に笑いかける。

突然のことに、少女は目を丸くした。

「子供は素直なのが一番なんだぜ？」

左手を自分の懐にもっていつてある袋を探し、その袋の中のあるものを少しばかり抜き取って服のポケットらしきところに入れてから、少女の目線と合わせるようにしゃがんで袋ごと手渡す。

「ほれ」

「…………え？」

そして、手を困惑する少女の頭にもっていき、わしゃわしゃと髪をかき混ぜる。

初めはビクツ、と身体を震わせるが、すぐにくすぐったい感触に少女は身を任せた。

…………右隣で羨ましそうにそれを見ているのは割愛である。

「もう、すんなよ？」

「…………っ！ うんっ！」

もう一度目を合わせ、少女に説く陽。

暗に次は見逃せない、という意味を込めて。

それをしっかりと感じた少女は、力強く頷く。

厳しさと優しさに触れて、心から改心しようと思ったのだ。

納得した陽は、手を頭からどかす。

そのときの少女の名残惜しむような目には気付かなかったが。

「……見逃してもよかったの？」

「いいさ。無かったことにすれば問題なしだ」

「……たんばぼ、言っちゃおったなあ」

チラリと見るは俺の左手。

よし、撫でてやろう。

「っ！ えへへっ」

これで多分大丈夫だ。

確信はないけど。

にしても、見逃すのは流石に不味かったかな？

しかし、睨み返すあの目。

家族の為なら！弟の為なら！

そんな意志の強い目。

はつきり言って、気に入った。

だから見逃してしまった。

……仕事に私情を挟むのはこれっきりにしよう。

あれは私事に近いから良かったものの。

甘えてはいけない。

そういう世界に 自らの意思ではなくとも
今更、後には退けない。

踏み入たんだ。

さらさら退く気もない。

だったら割り切ろう。

戦は戦、政治は政治、民は民、そして、家族は家族、と。

そして、自らに誓おう。

母さんを必ず支えろと。

確かにそれによって、失うこともあるだろう。

けど。

今より輝こうとする子供たちを、汚い道に走らすことを留めることができる。

俺にとつて一番下らない存在でも、基盤である大人たちが、安心して安定した生産ができる。

今まで柱となってきたご老体を休ませることが出来る。

そんな近道となるのだから。

まあ、結局は自己満足さ。

だから、全て自分の為、だ。

戦う理由は、おかれた環境の改善。

以前、そう言った。

それも突き詰めれば自分の為だ。

半強制的に戦場に立たされるなら、書簡の山の前に立たされるなら、

そんなことをしなくて済むように。

自分が苦勞しなくて済むように。

そんな環境にする。

それすなわち、平和な世を作る、ってことになるよなあ……。

なんて大言壮語。

なんて甘ったれた考え。

……けど、それくらいじゃないと、面白くもなんともなくね？

ま、ただの一武官、ただの一文官の下らない決意さ。

聞き流してくれても、大爆笑してくれてもいい。

家族の皆はどつちもしなさそうだから、話さねえ。

母さんと薊さんはニマニマと笑い、山百合さんは無表情で笑い、瑪瑙さんは馬鹿にして笑い、翠姉は少し呆れ気味に笑い、蒲公英はいつものように可愛く笑うだろう。

だからこそ、……話さない。

思わないところできっかけを見つけたなあ。

喜ばしいことではあるけども。

さて、心は決まった。

後は身体、行動で示すだけだ。

…… やつとこさ深い眠りにつけそうだ。

やつぱ曖昧は駄目だなあ、とつくづく思った。

覚悟はあれど、決意は足らず。

そんな曖昧で不安定な心だったから、眠れなかったんだろう。

まあ、そんなのは今となつてはいつでも良いけどな。

とりあえず、まずはひき肉を買わネバダ。

お金だが、一握りだけ抜いて全部あげちゃったんで、ぶっちゃけ足りるかはわからんけど。

ま、母さんのさえ作れば文句は言われんだろう。

おっと……撫で回しすぎた。

目を回している蒲公英が可愛いと思ったのは秘密だぜ？

無事買い終え、作った麻婆丼が大盛況だったのは言うまでもないだろう。

陽は語る。

「まさか麻婆丼から始まって、俺が作った丼物やその他諸々がこんなに流行るなんて思わなかった……。そのお蔭でこっちは大富豪なんだけどな！」

と

第十五話（前書き）

一気に飛びます。

キングダムズンってやつですね、わかります。

第十五話

あれからざっと一年あまり……。

俺は武官としてだと、立派かどうかはさておいて、將にのしあがった。

文官としては、上から数えたほうが速いぐらいになっていた。そうした中で、まさかの軍師にもなっていた。

將軍兼文官兼第二軍師。

……なんつー兼業だよ。

初めに將軍。

正直まあまあだな。

俺は人の命を預かるとか出来ると思っていない。

預かるとか、そんな軽いことが出来るモノじゃねえだろ？

つてことで、自分の命は自分で責任を持って、と俺は言ってる。

部下の兵たちは、今までに言われたことのないあるうこと言われて、最初は戸惑っていたが、今は見違えるほどに成長した。

求心力も並より上。

つか、俺の隊からは心酔(?)されてる。

上出来じゃね？

次に文官。

かなり上の位置にいる。

……正直言えば、軍師職と被っていないくもないが、とりあえず、薙さんに比べればまだまだだ。

母さんの次席に勝て、つてのもアレだけどさ。

最後に軍師。

兵法や用兵術が、出来る出来ないで言えば、出来る。そら将やってんだから、一通りできるさ。

けど、あくまで將軍としてのそれらで、全体を動かすそれらではなかった。

だというのに、一番頭が回るし、軍師いないから、という理由で渋々やってる。

第二、とつけば第一がいるだろう、と思うだろう。

しかし、第一は10数年ほど前からずっと空いている。埋まることも、埋めることもないらしい。

だから実質、俺が筆頭軍師ってな訳。

なったからには、と、なかなかにあくどいこともやっている。

所詮は付け焼き刃みたいなもんだがな。

それぐらいしとかないと、ねえ？

まあそれにより、五胡相手には 戦略的撤退は省くと 負けは一度だけ。

敗北という味を知つとかないと後々困るだろうから、負けたのは良い経験だ。

賊相手には全勝。

取るに足らないからな。

何故ほぼ全勝できるのか。

詳しくはまたいずれ、だ。

とにかく、そんなこんなで、將軍の俺より軍師の俺のほうが信頼されている。

……困りもんだがな。

死神だの、狼だの、成公英の再来だの、色々言われている。

別に二つ名を気にしちゃいないが、その、成公英とやらは引つ掛かる。

……また今度調べることによつと思つ。

まあ、こんなところだ。

他の家族の皆はというと。 。
母さんは適度にサボりつつ、見つかつては倍に増やされる、という感じ。

薊さんは相変わらず、酒を飲みながらも、義妹として母さんと肩を並べている。

山百合さんは、母さんの右腕をやっている。

瑪瑙（いい加減、さん付け止めると言われた）は薊さんの右腕として成長しつつある。

翠姉は猪癪は若干あるが、無事将になり、その中でも、かなり上だ。蒲公英は、俺、そろそろ負けるんじゃないかね（？）ってぐらいメキメキと実力を付けてきている。

そうそう、実は最近家族増えたんだ。

あのスリ少女と、その弟君。

俺は俺で他の討伐に行つてた時に、賊どもに村が襲われたらしい。それは母さん直々に殲滅して、村で生存者確認をしたところ、生き残つてたのがその二人だったそうだ。

戦争孤児ということと、俺も気に入ったあの目に惹かれた、このことで、母さんが家族に、と拾ってきた。

俺もほぼ拾われたに等しいから口に出して言わないけど。いいのかそれで。

ま、母さんはホント物好きだな、と思つのは悪くないはず。

少女の方は馬休、真名は茜で、弟君は馬鉄、真名は藍だ。偶然にも付いていた名が休と鉄だったらしいよ？

二人もまた馬家に誘われた身。

今は護身術程度を習っているが、年を経れば本格化するだろうね。年端もいかない子供を巻き込ませない、という自己満足の為にもがんばらないと、なんてまた思いかえした。

Side 三人称

一方、その頃の他の恋姫たちかというと……。

義三姉妹は共に旅をしていた。

称して、人助けの旅。

大徳は、盧植の元で勉強を修め、母、劉弘の元を発ち早二年。筵を売り、時には手を差しのべ、人に笑顔を咲かせる。

賞金首をとつちめることでしか人を救えなかった後の軍神、燕人姉妹はそこに惹かれ、意気投合。

以来、三人で旅をしているのである。

「街なのだ！」

「あつ、待つてよ鈴々ちゃん！」

「……はあ」

一目散に駆ける末妹。
それを追う長女。

二人に呆れる次女。

美髪公の心労は計り知れない。

「お父上お母上、この趙子龍、乱世に苦しまんとする民の為、いつて参ります！」

常山では、新たな決意を胸に、龍が昇らんとしていた。

「はわわ！ しゅ、主席！？」

「あわわ………凄いや朱里ちゃん！」

「ふふふつ、頑張ったわね」

「はわわっ！ すつ、水鏡先生！ ありがとうございましゅ」

伏龍、鳳雛は師の元で、徐々に才能を開花させていた。

「桔梗さまあ………」

「な〜んじゃ、もうへばったか焰耶よ！」

「まあまあ、落ち着いて……。根を詰めすぎるのは良くないわ」

「むう……ちつとばかり熱くなりすぎたかの」

「そーだよー。焰耶お姉ちゃん、真っ白だもん」

「はっはっは、璃々にまで言われては敵わんわ」

蜀の老た……ゲフンゲフン、お姉さま方と反骨は、案外にのほほん
と過ごしていた。

後の魏王は他の誰よりも抜きん出ていた。

……母親である曹嵩さえ差し置いて。

それにより、母が健在していたにも関わらず、家督を継いでいた。
そんな、すでに曹家の看板を背負っている彼女は徐州に来ていた。

「華琳……あなたの霸道、天から見守っているわ」

「はい、お母様」

「春蘭、秋蘭……今更だけれど、華琳を宜しくね」

「はっ！ 命を賭けて！」

「お守りすることを誓います」

時代は徐々に、能臣より奸雄を必要としていた。

そして、“曹孟徳”を存分に發揮出来る環境を作るかのようになり、病
が曹嵩を犯した。

そして、今まさに迎えがやってきたのである。

霸王は泣けるはずがなかった。
これが天命、と清々しい笑みを浮かべ、逝った。
そんな母に、むしろ笑いかけたぐらいだった。

「……ごめんね……薊……」

しかし、死す直前にぽつりと洩らした言葉は聞き逃すことはなかった。

「あ~~~~っ！ もう嫌！」

「待って！」

王佐の才は、逃げ出した。

しかし、まわりこまれた。

頼み込まれたので仕方なく戻ったが、今日の分を終わらせたら夜逃げでもしてやろうと決意した。

それほどまでに袁家での待遇が悪かった。

「ルールルっ、ルルルルールル」

「季衣？呼んだ？」

「うづん、呼んでないよ！」

「じゃあ、今の何？」

「そのキノコ見てたら口ずさんでた」

「……？」

親衛隊長らは、未だ平和を謳歌していた。

……黒いマツシユルームな形のキノコが引き金とは、悪来は知らない。

「……ぐう」

「お嬢ちゃん、寝ないでくれ」

「おおっ！ 寝てませんよー」

「……どの口が言うのやら」

「おうおうねえちゃん、それは言わぬが吉つてもんだぜ」

「まあ、いつものことだから慣れたがな。ほれ、飴十本お待ち」

「ありがとうございますよー」

渦巻の飴。

いわゆる、ペロキヤンを買い込む金髪ウェーブの少女と、珍しく鼻血を噴かさず、呆れ顔の眼鏡っ子。

二人は旅に出ようとしていた。

昇り龍と出会う日が来るのはそう遠くないかもしれない。

飴工房があったのは、偶然か、必然か。

それは陽にしかわからない。

「師匠……行って参ります。……約束は必ずや果たしてみせます！」
墓の前で拳と手のひらを合わせ一礼する、銀髪の後ろを三つ編みにする者。

「はあゝ、かつこええなあゝ」

独特の反りを持つ一振の剣と、先が回る構造をした槍を眺め、息を洩らす者。

「むむむ……二人とも、遅いのー!」

自分の用を早めに済ませたものの、待ちぼうけを食らうはめになり、若干キレ気味の者。

三羽鳥もまた、巢立たんとしていた。

江東の虎が死んで早三年。

治めていた地は全て華南に拠点を置いていた袁家に掠め取られ、服していた豪族たちはここぞとばかりに離れた。

家族とも呼べる仲間たちは、分散させられており、未だ虎の子たちは、雌伏の時を過ごしていた。

「あー、いつでもお酒は美味しいわ」

「全くもってその通りじゃ！ それを冥琳のやつといえは……」

「ほお……続きをお聞かせ願えますかね？」

「「げえ、冥琳！」」

「穏もいますよー。逃げ場はありませんからあゝ」

後の小霸王と宿将が、勤務時間中に酒を飲んで呉軍筆頭軍師に見つかり、その弟子に（師からの命令によって）退路を絶たれてはお叱りを受ける。
いつも通りの構図である。

「（もう少しよ、もう少し……母様の宿願、必ず）果たしてみせる」

「聞いているのか、雪蓮！」

「はっ、はい！」

怒る美周郎に正坐する小霸王。
全く以て、何時も通りだ。

「……はあ」

「蓮華様……休憩にいたしましょうか？」

「っ！ いや、必要ない」

「……そう、ですか」

守りの戦では、私を凌ぐ、と現王に言わしめる程の次女は、数知れ

ぬ思いからか、ため息を吐く。

親衛隊長であり友である者は、そんな様子に心配するものの、深くは介入しないでいた。

出来ないでいた、の方が正しいが。

「お〜ね〜こ〜さ〜ま〜!!」

もう一人の親衛隊長といえば、全力で猫を追っていた。

「ほら、パパ！ お友達、連れてきたよ！」

「おお、この前言っつてい、た……」

満面の笑みで、白虎と熊猫を連れてくる弓腰姫。

啞然としすぎて、せつかくのダンディーな顔立ちを崩す孫三姉妹の
パパ。

パパとは誰か。

……元々投稿してたサイト様からの登場です。

「……うぐ〜。月溪様あ〜、多すぎです……」

もとは武官だったが、次期王に才を見出だされ、ふんどし飛ばされ、
早半年。

末娘のもとにいるもう一人の宿将の教えにより、すでに阿蒙ではな
くなっていた。

アニメ設定はスルーの方向で。

「おーっほっほっほっ！ 国士無双ですわ！」

「やっぱ、世の中博打っしょ！ うー、丁！」

「……麗羽さま、文ちゃん。そろそろ帰りましょうよ」

負け続けはするものの、運よく一発逆転の手で、負け分を帳消しにする、金髪特盛縦ロール。

四対六ぐらいで負けてこしているが、それでも博打が大好き女の子。気苦労絶えないおかつぱ娘。

王佐の才の猫に見限られても不思議ではない。

……この博打処、実は陽が作っていたりする。

「蜂蜜水を持ってくるのじゃー！」

「はいはい、了解です」

南方を治める袁家の長は、いつも通りだった。

本日一回目のおねだり（？）であるので、毒は吐かなかった側近。

……両袁家を、これ以上紹介することが正直ない。

「詠ちゃん……」

「大丈夫よ。月なら出来るわ」

「うん。……頑張る」

「うおおー！ 董卓様あ！ この華雄、一生ついていきましょう！」
董家を継ぎ、長として兵たちに号令する。

その様子に親友は、必ず天下人に見せろ、と改めて決意する。
ネタキャラの地位を不動のものとする、愛すべき猪將軍は少し熱かった。

「……ちんきゅ、行く」

「あつ、呂布殿お。お待ちください！」

「ホンマ、仲ええなあ」

家族の様子を見に行こうとする天下無双。

それを追うは、自らを専属軍師と名乗るちびっこ。

そんな二人を、クツクツと笑いながら酒を飲む神速。

三人は 厳密には二人 漢の将であり、長安にいた。

儂げな少女を主とする日は、すぐ近くまで迫っていた。

「……うう。いつになったら終わるんだ……」

幽州では、普通に出世コースを歩いている者がいた

普通に出てくる人かつ、お人好しスキルを持っている為、仕事が集中していた。

「よし！ 今日も頑張るぞー！ おー！」

「ちいの魅力でメロメロにしてやるんだから！」

「はあ……。二人揃ってお気楽なんだから」

若干天然気味の、みんな大好き天公將軍。

ない胸を張ってる、みんなの妹地公將軍。

二人に呆れる、とっても可愛い人公將軍。

このとき、自分たちの歌で乱をおきるとは知り得ないことだった。

「お前たち、行くによー！」

「おっじゃー！」

「了解じゃー！」

「……頑張るじゃん」

南方ではにゃーにゃーうるさかった。

陽は遠い目をして語る。

「あの頃は、仕事量が増加の一途をたどっていたよ……」
と

第十六話（前書き）

そういえば。

翠と蒲公英以外で初の恋姫キャラとの絡みだー！。

第十六話

狼とは、元来神聖な動物である。

実際、日本語のこの”狼”というのも”大神”が語源だ。

狛犬などのモチーフとなっていることも、それを証明する一つになるだろう。

主に農業が盛んであった地域の人々にとって、天敵といえる草食動物たちを喰らってくれる狼はありがたいものだった。

しかし、牧畜が主である地域の人々にとっては、狼が天敵だった。

さらに、中世ヨーロッパ時代に語られた人狼伝説、流行り病の狂犬病などにより、狼”悪”というイメージがついた。

例として、赤頭巾の童話を思い浮かべると分かりやすいことだろう。

……と、狼は一方で好かれ、他方では嫌われ、といった両極を併せもつ存在なのだ。

狼は、幼体や老体、病弱なものといった、弱い個体を喰らう動物である。

それは、狼、というイメージからは想像のつかないだろう臆病な気性からきていた。

それゆえ、（一夫一妻制が基本であるため）雌雄対の20匹ほどで一つの群れを形成する。

さらに、臆病とは相反するような語の、一匹狼、というのは、成長した狼が群れを離れ、配偶者を見つける間の状態をいうのであり、あまり格好良い意味を持っていない。

縄張りには100～1000kmと広い。

つまり、何が言いたいのか。

それは……、

「……完全に皮肉られてね？」

……西涼の天”狼”として名高くなった自分を、陽は考えているのである。

前述したことをすべて知っている、という訳ではないが、両方を併せ持っていることだけは、陽も知っている。

皮肉にも狼と自分に、被っている部分があることもわかっている。

だからこそ解せなかった。

西涼の皆が、天狼、と自分を称賛する理由がわからなかった。確かに誇り高い、というイメージも持っている。

しかし、それでは足りない。

西涼（と言つより、華北のほとんど）は小麦や酪農が盛んである。

だから、本来、狼は嫌われる立場にいるはずなのだ。

S i d e
陽

片膝をつき、右手で左の拳を覆い、仰々しく頭を垂れてやる。

左右にはズラリと人が並び、正面奥には何段も上の椅子に腰かける者、すなわち漢の皇帝、劉宏がそこにいた。

「天子様の命により参上つかまつりました、隴西太守馬騰が代理、馬白にございます」

「代理、だと！ 貴様、何様のつもりだ！」

うるせえな。

今から説明すんだろーが。

「最近では五胡の動きが激しくなっております。当初は太守である馬騰が赴く予定でしたが、くしくも、羌国が大軍を率いて攻め込む、との報告がありました。封ぜられた土地を抜かれては天子様に合わせる顔が無い。しかしながら、天子様直々のご命令に背くなど、もつての他。……ですから、若輩ながら馬騰が軍師であり、側近を勤めさせて頂いている、私が参上した次第にございます。…
… 何進様、天子様、どうかご無礼をお許し下さい」

「だがしかし、蛮族者など、部下に任せておけば」

「何進、もうよい」

「りゅっ、劉宏様！ …… 御意」

面倒くさい野郎だな、あの何進ってやつ。

そんなことはおいといて。

皇帝からの命により、俺は遠路遙々、洛陽にやってきていた。

因みに、羌が攻めてきたから俺が来た、というのは真っ赤な嘘だ。

母さんが、行くのヤダ、めんどくさいんだもん、と駄々をこねたので、仕方なく代理で来ている。

仕方なく、だ（ここ重要）。

「して、貴様は馬白といったな？」

「御意に」

「では、天狼と称されているのも貴様だな？ 張譲から聞いている」

「……御意に」

よく知ってんなー。
グズの癖に。

「一介の将が、天を冠している……。そのような者が、よくも帝の前に姿を現せたものだ」

「張譲……」

張譲を睨む何進。
悠然とする張譲。

二人の絶えない（らしい）争いの中、今回の軍配は張譲にあがった
っぽい。

別に興味ないけど。
ただ、こんなところでやらんで欲しいな。
うざいから。

えっと、だ。

なんで直々に二つ名のことを聞かれたのかというと。
皇帝を象徴する”天”を冠することはあってはならないらしいんだ

よ。

んなこと知ったことじゃねえよ、馬鹿。
すっげえどーでもいいいな。

つか、張讓のドヤ顔パネエ。

「弁明はしないのか？」

「……いえ、私に発言権を頂ければすぐにでも」

まあ、反逆者やー、って攻められ、家族に迷惑がかかってもあれなんで、取り繕うけどね。

「ならば、申してみよ」

「はっ」

眼鏡の真ん中の橋をクイツ、と押し上げる。

仕事中の射抜くような目が怖い、と皆が言つので、家族の時間との以外は掛けることにしているメガネ。
なんであんのかは知らん。

形は四角の縁なし。

似合ってるんだってさ。

……まあ、左目眼帯着用の上に眼鏡で、どうかとは思んだけどねー。

「……まず、五胡の国々では、作物が育たない環境ばかりでありますので、放牧や酪農などでしか、日々の糧を獲られません」

「ふん！ それに何の関係がある！」

何進が反応する。

話の途中に割って入ってくるの好きだなおい。

黙ってるよな。

うぜえから。

そう思っても、口に出さず、華麗に流しますけどね！。

「狼は、主に草を食べる動物を喰らいます。ですから、五胡の人々にとって、家畜を喰らう狼は天敵なのです」

「そうか……。貴様は蛮族相手にもひけをとっていないと聞く。それは本当らしい」

説明を終えると張讓が反応した。

お前、なんで反応したよ。

ち こないくせにイキがってんじゃねえよ。

お前も黙ってるよな。

うぜえから。

と内心思っけど、またも流し、てか無視で。

「この漢において、天とは天子様を表し、五胡にとって、狼とは敵を表します。天狼とは、天に仕えし狼、すなわち天子様に仕えし敵対者、という意味にございます」

「ふん！ 自ら劉宏様に仕えているとの発言……。先ほどから何様のつもりだッ！」

「この大陸でも家畜は飼われている。……。それすなわち、貴様の牙をこちらに向けることを意味するのではないか？」

ホントうるさい野郎だよ、このおっさん共。

少しだけ何進の方へ身体を向けて、話すことにする。

「一介の将が、とんだご無礼を……。しかしながら、この身、この武、この知能、全て天より授かりしものであり、これを天子様に捧ぐは世の理。……すなわち、全ての人々が天子様の為に在り、天子様に仕えているとは言えないでしょうか？」

「……………ふんっ」

何進は言葉につまったのか、何も言わなかった。

ま、全部口先だけのでまかせですけどね。

さて、次だ。

こいつもうるさいけど、論点はズレてないからました。張譲の方へ身体を向けて、話し始める。

「確かにこの大陸でも家畜の飼育は盛んです。しかし、いくら家畜といえど、狼は相手を選びます。狼は存外に臆病な動物にございませ……天子様”自ら任命された屈強で素晴らしく優秀な方々”に守られては、手足はおるか、牙さえとどきませんし、たてつこうとする勇氣すらも起こらないのです。よって、この”天子様が治める、この素晴らしき強国”、漢に牙を剥くことなど、あり得ないことです。私が喰うのは、天子様にたてつく知恵のない獣共のみにございませす」

「だがっ」

適当なことと言って言い逃れようとする。

反論しようとした張讓だったが、それを予想外にも皇帝サマが遮った。

「もうよい、何進、張讓。貴様が馬騰と同じように、忠義の将だと良くわかった。……ハッハッハッ！ 今日気分が良い……貴様の二つ名の件、許そう」

「有り難き幸せにございます」

一度頭を下げる。

見れば途端に、何進と張讓は苦虫を噛み潰したような顔をしていた。皇帝のおバカさんが、ただの異名にしても、一介の将が”天”という字を使うことを許した。

さらに、その許可は皇帝自らの言葉だったから、覆すことの出来ないものとなってしまった。

大方、この二つのせいだろう。

褒められて嬉しくない奴はいないだろう。

能力が足りてない、と知りつつも、俺に言わせれば皇帝としての下らない誇りがあり、どこかで自分を信じている。

そこを突き、クズ共を任じたことと、今にも動乱が起こりそうなのに恐国を治めていることについて皇帝サマを褒めた。

それに気分良くし、罪を流した。

…… 皇帝サマが阿呆で良かった。

…… 本当にバカで。

…… こんなカスのせいで、大陸は不安定だ。

…… このクズが派遣した阿呆どもが、無駄な財を集め、さらには才を無駄にしている。

「………っ!?」

おっと、いかんいかん。

下らない奴にキレても仕方ないことだ。

余計な敵を作っても面倒だし。

反応した張讓の後ろに侍っている二人。

露出度高いな。

いや、それはおいといて。

赤髪の方はマジにヤバいからな。

でも、結構人がいる玉座で、反応できたのが二人だけとか。

しかし、あの赤髪は蛮族と言われても怒らないのかね？

「……劉宏様」

「おお、そうであつた。何進、頼む」

「はっ！ 隴西太守馬騰に告ぐ！ 貴殿は本日を以て西涼太守に任命する！ 拠点を金城とし、今まで以上に励むように！ 戦功を期待する！」

「はっ。謹んでお受け致します。最西の地より、天子様のご意向にそえる戦果、果たしてみせましょう」

何進の前に出て、書き記された紙と、西涼太守の証である印を受け取る。

戻つて、また同じように膝を付き、左の拳を右手で包み、深く礼をする。

はあ、これでやっと終わったぜ……。

何進は激情に、張讓はあくまで冷静に。
終始陽に対し、対称的な態度だった。
この違いが、後の熾烈なトップ争いの結果を生むことになる。

「張遼、呂布、貴様らは董卓の下に行け」

「こらまた、唐突で」

「文句があるか」

「……いえ、ありません」

「ならば行け。すぐにここを離れ、長安に行き、荷物を纏め次第、天水へと向かえ」

「……御意」

張遼は、いかにも不機嫌そうな顔をして退出する。
問うたところで理由を話す人ではないので、自ら聞くことはしない。
どうせアイツのことだろうとは予想はついている。
そうでなければ、わざわざ長安から呼びはしないだろうと内心思っ
ていた。
ただ、一緒にいた者、すなわち呂布は、ずっと首を傾げているのに
は苦笑した。

ちよつと城内の廊下をさ迷い歩いている。

いわゆる迷子ですが何か？

そしたら……、

「む」

「……あ」

「げ」

……むつつり張遼、無表情呂布が現れた。

いやー、このエンカウントはまずいなー。

片方は中ボス、もう片方はラスボス級とかどんだけ。

しかも、一人キレ気味。

ヤバくね？

「これはこれは、張遼殿に呂布殿。お二方の武勇、辺境の地にまで届いております。いやあ、そんなお二人に会えて、光栄にございませよ」

だいぶ焦ってるようで、自分で何を考えているかさつぱりだ。

ま、当たり障りのない挨拶(?)をしてはおきましたが。

「白々しいやつぢやなあ……。そんな棒読みな台詞、あるかいな」

「……お前の方が凄いな」

今までの怒りはどこに(?)、(?)と思うほど、豪快に笑う張遼。

少しだけ口角をあげる呂布。

「六割方嬉しいですよ。張讓様の部下としてでなければ、八割ぐらいかもしれませんがねえ。あと、お二方に比べれば大したことはありませんよー」

「…………正直やなあ。まあ、ウチかて普通のとくに会いたかったわ。…………あんときの殺気、尋常やなかったからなあ。あれ見て、しがらみなく殺り合いたい、と思うんわ、武人としての性ちゅーもんやで？」

苦笑いからの獰猛な笑み。

いやー、あの場で 目の前にいる二人の前で 殺気を洩らしたのは不味ったなあ。

「今後普通に会っても、絶対殺り合いませんけどね」

「…………恋ともやる」

「ちょ、話、聞いてました？」

「…………（コク）。でもやる」

でもじゃねえんだよ。

こっちは死活問題なんだよ、あんたらと闘うことがさあ。

「…………まあ、機会があれば」

犬やら猫とかの見上げる視線、わかるだろ？

そんな動物のような上目遣いに根負けしましたが何か？

「…………約束」

「ウチも忘れんといてやー」

「…………ハア、わかりましたよ。ですが、絶対そんな機会、作ってあげませんから」

是非とも願い下げたい約束をしてしまったのだよ？
ため息ぐらい良いじゃないか。

「…………恋」

「は？」

「多分、約束の証うちゅーことやる。ウチは霞って呼んでや」

コクコクと頷く呂布さん。

便乗して真名を預けてくる張遼さん。

コイツらアホだろ。

そんな簡単に預けてどうすんだよ。

もっと大切にしなさい。

いや、までよ。

逆に、真名を交換することで、約束の価値を上げてるのか？
ふっ、なかなかやるな…………。

…………嫌あ！

「…………ハア。私は陽です」

俺が頂垂れると、張遼は笑い、呂布は不思議そうに首を傾げる。

終始そんな感じの他愛ない会話をして別れた。

Side 三人称

「……どう思う、恋ちゃん」

「……多分、いいひと」

いつもではあり得ない曖昧な答えに、怪訝そうな顔をする張遼。

「……弱い、けど、強い。怖い、けど、優しい人」

「どっちも矛盾しとるやん」

いつにない饒舌さで、相反する二つを並べる呂布。

呂布の言うことは、ほぼ当たることを知っている張遼は、さらに陽を不審がる。

「……霞は？」

「ウチ？ せやなあ……よーわからん、ってのが一番やな。ただ、嫌いではない奴やけどな」

張遼は、陽に対して元から興味はあった。

涼州連合筆頭であり、太守である馬騰の軍師。

西涼の人々にとっては天狼であり、賊にとっては死神。

軍師でありながら、武にも心得がある。

興味が湧かない訳がなかった。

そして、見た結果。

玉座の中で、出来る奴、と。

会話の中で、おもしろい奴、と判断したものの、率直に言えばわからない。

それは呂布も同じだった。

……だからこそ、張讓があそこまで気にする理由が解せなかった。

陽を、牡丹を、そして、西涼勢全体を。

陽は語る。

「思えばあの日は、いろんなことで綱渡りだったなあ……。流石に恋ちゃんと霞との約束は泣けた」と

第十七話（前書き）

進まない。

全く進まない。

第十七話

寝台の上で身をよじり、幸せそうに眠る美少女が一人。ふと、窓から溢れる光に目を覚ます。

「あれ、ここは……？」

寝台から身体を起こし、起き抜けのぼやけた眼を擦りながら、またか、と一言。

もう何十回にもなるであろう疑問が、頭を廻る。

曰く、なんで起きるところが、たまにお兄様の部屋なのか、と。

自室で寝た記憶はきちんとあるのに、何故か3/7の確率で兄の寝台で起床している

疑問で疑問で仕方がなかった。

それでも、最愛の兄の寝台で起きることに悪い気はしない、というかむしろ嬉しいので、美少女こと蒲公英はこれ以上考えることを止めていた。

……実を言えば、深夜遅くに用を足した後、引き寄せられるかのように兄、すなわち陽の部屋に潜り込んでいるのだが、その記憶がごっそり抜けている蒲公英なのであった。

「……お兄様？」

辺りを見回しても、この部屋の主がいない。

蒲公英が起きるまでの間、必ず部屋に、傍にいる筈のだが、今日はない。

一抹の不安と寂しさを感じた蒲公英は、急ぎ部屋を出て、探すことにした。

「陽？ ……見てないわ」

蒲公英は、最初に伯母の牡丹に会いに来ていた。

「あかね〜、らん〜！」

「なんですか、おばさん」

牡丹の呼ぶ声に反応した、茜こと馬休。

「おばさん言うなあ！ いい加減、お母さんと呼んでちょうだいな」

「い、や、よ！ だいたい、蒲公英お姉ちゃんだって、伯母上様って言ってるし」

「言ってる意味が違うじゃない……。らん〜、茜がいじめてくるよう〜（泣）」

助けを求めるかのように、牡丹は藍こと馬鉄に泣きつく。

「おばちゃん、ごめんなさい！ お姉ちゃんに悪気はないと思うんですー！」

「藍よ、お前もか！」

頼みの藍にさえ裏切られる形になった牡丹は、さも絶望の淵に立たされたかのような顔をする。

ころころと代わる表情は、もはや顔芸の域にまで達していた。

蒲公英は黙ってその場を離れることにする。

正直に言えば、蒲公英は茜と藍にも聞きたかった。

しかし、茜と藍が家族になってからというものの、牡丹と茜の二人の漫才（？）が尽きることはなく。

諦める他ないのである。

結局のところ、収穫なしだった。

「もう依存の域ね」

蒲公英が部屋から出て行った後、牡丹はぼつり、と一言溢す。

「何が？ おばさん」

「……それ、言いたいだけでしょう？」

牡丹は平静を装い、にこやかに青筋をたてる。

「うん」

が、茜の即答にプチッ、と音をたてる。

「キヤーっ、おばさんが怒ったあ！ 藍、逃げるよ！」

「じつ、ごめんなさい〜！」

逃げる茜とその手に引かれ、共に逃げる藍。

「ふう。陽……早く帰ってこないかしら！」

流石に幼い二人にブチギレる程愚かではないものの。

腹いせに、怒りをすべて陽に還元させる腹積もりでいる牡丹であった。

「陽？ ……牡丹のところにおらんのか？」

グビツ、と酒を飲む薊。

「伯母上様も知らないって」

「そうか。ならば知らん」

「そつかあ〜……。それはそうと、そんなに飲んでたら、またお兄様に怒られるよ?。」

「気付けじゃ、気付け！ 他意はないぞ！」

そう言い、目を明後日の方向に向ける。

明らかに誤魔化していた。

薊にとって、酒の飲み過ぎで怒られるのは恐くはあるが、懐かしい
思いの方が上である。
だからこそやめられなかった。

結局、またしても空振りという結果に終わった。

蒲公英は、この時点で気付くべきだった、と後悔することになるの
は余談である。

「今日こそ500勝目、貰うよ」

「いや、今日はあたしが300勝目を貰う番だぜ！」

「……始め！」

どんだけやってんの……、と蒲公英は内心思う。

しかしながら、近くで開始の合図をした山百合が言うには、これが
通算千戦目、とのこと。

それを聞いた蒲公英は苦笑することしか出来なかった。

繰り広げられるは互角の闘い。

攻守が幾度となく入れ代わり、せめぎあう。

剣戟が、まるで奏でているかのように響いたと思えば、静寂が辺り
を包む。

どちらも、あと一步というところで決まらない。

互いに牽制し、最後までは攻め込ませない。

何十、何百合打ち合っただろうか。
双方とも、肩で息をする。

自らの身体状態から、あと一撃、と二人は判断する。
そして、

「しゃおらあああああ!!」

「せいやあああああ!!」

ピタリ、と手が止まった。

一方の穂先は心臓の前に。
もう一方の穂先は首筋に。

「あーあ、また引き分けかよ」

「……………」

悔しがるは、馬超こと翠。

対して閻行こと瑪瑙は終始無言だった。

どんだん自分との差が縮まりつつあることに、焦りを感じていたのだ。

蒲公英は、ただただ凄いと思っていた。

その凄い二人にたまに勝つお兄様も大概だ、ともひそかに思いながら。

「何を寝ぼけているか知らないけど、アイツ、まだ帰ってきてないじゃん」

呆れ口調の瑪瑙。

「……………今は天水辺りと報告がありましたね」

普段と変わらない口調の山百合。

「なんだよ蒲公英、……………陽にご執心か？」

からかい口調の翠。

「っ!?!? 翠お姉さま、そんなこと言って……………、皆だってそうじゃないの?」

ニタニタと笑う翠にちよつと怒った蒲公英は、合いの手を入れる。

「」「……………」「」

その言葉には、三人共凶星だったようだ。

それぞれ意味合いは違うが、陽のことを考えていたのは確かだった。

寝ぼけていたたんぽぽも悪いけど、伯母上様たちも教えてくれればいいのに……………、と思う蒲公英であった。

一方、その頃の陽はというと……………。

S i d e
陽

ポクポクと黒兔の蹄を鳴らしながら歩を進める。
洛陽、隴西間の長い道程も、あと半分ほどだ。

……うん。

ひっじょくに疲れた。

そら歩きよりは楽だけど、乗ってるだけでも辛いんだよね。

「あゝ、ケツ痛え」

それに反応した黒兔がぶるっ、と黒兔が啼く。
すまん、と謝られてもなあ。

どうあっても避けられないことだから、黒兔は悪くないし。
大丈夫だ、と首を叩いておく。

さ、ちゃっちやと帰りますか。

早いとこ、熟睡したいし。

外だと、自然と気張っちゃうから、深く寝れないんだよ。

「帰ったら俺、熟睡するんだ……」

……このとき、洛陽からの帰路がまさか、黄泉へと誘う道になって
いるとは、俺は微塵も思っていなかった。

前を見れば街が見えた。

あれが天水かー。

別になんてことはないが。

よく見ればおぼろげながら、城門前に人が立っているのが見えた。
なんか嫌な予感がするなー、と思って、眼帯を外して左目で見れば、
やっぱりだ。
知った顔の奴がいた。

「……………うわぁ、なんかめんどくさそうだなぁ」

自分の撒いた種を回収するんだから、そうも言ってもらえないんだけ
どな。

急ぎ、黒兎を走らせることにした。

「この辺りに巢食う賊共の所在がわかりました」

「…苦勞。……………それで？」

「……………街外れの小屋に」

「案内、頼めるか？」

「御意に」

徒歩でもそう時間はかからない街の外れに、寂れた廃小屋があった。
そこに、俺の手のひらで滑稽に踊ってくれた奴がいるらしい。

……………くつくつく。

おっと、いかん。

黒い笑いが出てしまった。

それでも最高に似合ってしまうのが、さすが俺。

……いや、冗談だぞ？

似合っても嬉しくはないだろ、そんな笑み。

「やあ！ 元気にしてたか？ この二週間を十分に謳歌したか？
生きた心地はしたか？」

「まつ、待ってくれ！」

無駄に調子よく話す。

口角を上げ、笑顔を作る。

相手は縛られ、転がっている。

何故に亀甲縛り、とは思ったが、隣にいる部下の趣味と勝手に解釈しておく。

何を待つつていうの？

「キミのおかげで、被害が最小限に抑えられそうだ。キミは救世主だ。ほら、キミは治安維持に貢献したんだぜ。もっと喜ぶべきさ」

「全部吐いたんだ！ 助けてくれるんじゃないのか！？」

大袈裟に腕を広げる。

薄い笑みを作りながらも、目を細める。

吐いた？

確かに、洗いざらい吐いてくれたねえ。

助ける？

自身の存在により、周りを見差別に巻き込む蟻地獄から、いつでも死と隣り合わせの生き地獄から、解放してやるうとしているんだ。

それは助ける、という行為だとは思わないのか？

「本当に感謝する、ありがとう。……そして、さようなら。キミは実に無能な人間だ」

「待つ……あぐ……」

腰に刺さっている剣で、心臓を刺す。

首を斬ると、血飛沫の飛距離が半端ないんだよ。

それが服に付いたりして、街に戻れなくなるのは流石に嫌だから、まあ刺殺ってことで。

「……………」

「……………そこまでしなくても、みたいな顔すんなよ。仕方のないことだと理解しろ。ここで温情をかけても、仇でしか返ってこないのがこの乱世の常。だったら、その業を噛み砕くは狼の仕事ってね」

隣の釈然としていない部下に、薄く笑ってみせる。

我ながら、なんてキザったらしい言葉だよ。

言ってる自分が恥ずかしくなってくるぜ。

「巷でも有名だろ？ 俺に敵として目をつけられた奴の運命は、その時点で死の一択のみ、とか、左目は絶望の始まり、って」

裏の世界で、俺は有名どころの騒ぎじゃない。

裏に精通してる表の奴ら、表に出てきた裏の奴らを、片っ端から殺してるからな」。

……流石に裏の奥までは踏み込んだりはしないが。

とりあえず、どうせ用意できないだろう賞金すらかかっているらしい。

はた迷惑なことだ。

「ま、嫌ならいつ辞めてくれてもいい。給金分の仕事をしてくれれば、な。ただ、横流しすれば、……わかつているな？」

「……裏切りなど、あり得ません。私だけでなく、皆、馬白様に忠誠を誓っていますから」

嬉しいことを言ってくれる。

「じゃあ、最後、頼む」

俺の名入りの書簡を二つ認め（したため）、黒地に白で狼と書かれた小さめの旗と共に渡す。

なんだかんだ、簡単な用意　携帯出来る筆とか、無記の竹簡とかを　を　し　と　い　て　良　か　っ　た　。

「はっ！　お任せを」

そそくさと出ていく。

まずは、甘味処に向かうことだろう。

「さて、帰るか」

天水で休もうかとちょっと悩んだけど、やめだ。

天水太守の董卓ちゃんと顔合わせするという展開になったら　好い子らしいけど　面倒だし、今はそんな気分でもないからね。

……さあ黒兎、行くか。
ぶるっ！

S i d e 三人称

「まさか軍資金の三割まで工面してくれるなんて……流石は天狼と
いったところね。それに……」

書簡の内容に、驚きを隠せない、天水太守の軍師。
賊の所在地、その人数、そしてお金。

書かれている全てに、自分との格の違いを見せつけられているよう
な気分にならなっていた。

「馬白さん、だったっけ。……会ってみたいなあ」

「ダメよ月！（……董卓軍の軍師は僕だけなんだから）」

「大丈夫だよ、詠ちゃん。私の軍師は詠ちゃんだけだから」

「……ゆゑ」

自信を無くしかけていた詠こと賈馱に、励ましと事実を伝える月こ
と董卓。

どちらにとつても欠けてはならない存在、と認識するほどに、二人
は深い絆で結ばれていた。

「誰かある!」

「はっ！」

「三日後にここを出立する！ 軍の再編等の指示があるまで待機。各々で鋭気を養うように、と伝えて頂戴」

「御意！」

陽からの書簡には、明日に、張讓配下である呂布、張遼が来る、と記してあった。

その通り来れば、二人を組み込んでよし。

来なければ、それはそれでよし。

どちらにも対応できるように、三日設けたのであった。

次の日に、二人が来たのは言うまでもないことである。

陽は語る。

「いやあ……今考えると、すげえ立場にいたんだな、俺って」と

第十七話（後書き）

陽

「あ？ なんだよ、呼ばれたから来てみれば、誰もいねえし。これは……カンペか？ これを読めってか？

そんなんであとがきに呼ぶなよ、ドカス作者。

えー、『次から原作に突入させます！ 少々強引にでも！』
原作ってなんだよ！

大体、初めてあとがきぐらい、大切に使いやがれっ！」

すみません。

人物紹介（前書き）

今更ですね、わかります。

てか、本編じゃなくてごめんなさい

人物紹介

姓名／馬白

字／?????

真名／陽よう

歳／18

容姿／白髪で、肩口程の長さ。

前髪は意図的に左だけ下ろしている。

毛先はぴょんぴょん跳ねており、駄目大人っぽい雰囲気に見えなくもない。

顔は悪くはなく、寧ろ整っている（一刀が上の中なら、上の下の下ぐらい）。

目付きはとても悪く、つり目も相まって、無駄に鋭い。

右（2・0）は銀、左（5・0）は黒のオッドアイで、普段は左を眼帯で覆っている（左前髪だけ下ろしているのは、左目を髪で隠していた時の名残）。

仕事中は眼鏡着用。

背は180cm程で、西涼勢、つか、この世界のほとんどの人より高い。

所謂細マッチョというやつで、無駄な筋肉は少ない。

備考／本作の主人公、武将兼文官兼第二軍師（実質筆頭軍師）、と

いった、なんとも苦勞の似合う役職についている。

甘いものが好き。

しかし、甘過ぎるものは嫌い。

調和が大切、とは本人の言。

自分に甘く、他人に厳しい。

といっても、自身の中での甘く、の基準が異常に高く、他人に求める厳しい、が割に低い為（厳しいには厳しい）、周りから見れば、自分にも他人にも厳しい。

基本、冷たい。

名声もあるが、悪名高くもあつたりする。

自身の全てが矛盾の上に成り立っている、と言って良いほど、破綻した性格。

そして、なんと言つても、人が嫌い。

それゆえ、読心（唇）術が出来たり、表情を取り繕うことが出来たりする（嫌いだからこそ観察し、習得）。

武力はテンションで変動。

低ければ低いほど、真価を發揮する（つまりチート）。

強い、というより、巧い。

山百合曰く、冷徹さの集積。

武器は、全身が真っ黒で、異常に軽い槍と、ちよつとだけきらびやかな幅広の剣。

どちらも滅多に使うことはなく、兵に支給されているものを使う（折れたら拾えばいい、と考えからきている）。

一応、槍の名は闇閃で、剣の名は、特になし。

頭は良い方。

軍略も内政も各国の名高い軍師らには劣るが、一応インテル入ってる（つまりチート）。

作者から／チート乙。

書き始めた当初、ストライクフリーダムガンダム……じゃなかった主人公を目指しており、決してこんなダークな奴にするつもりはなかった。

どうしてこうなった！

主人公には、なりたい自分、というものを投影する傾向があるらしいが、半分はそうかもしれない、と思ったりする。

統：4 武：4 知：4 政：4 魅：1〜5

姓名／馬騰

字／寿成

真名／牡丹^{ぼたん}

歳／3？

容姿／髪は赤く、前髪が細くて目にかかる長さ、目付きが悪い、ということ以外、ほぼ翠と変わらない。

身長は170cm程で、意外に高い。

おばいは大きい。

張りには自信があるらしい。

20で翠を産んだが、その前からプロポーションは全く変わっていない。

緑のチャイナドレスを着用。

露出度は低め。

備考／陽の義母であり、今は違うが陽と基本は同じである。ほとんど笑みを絶やすことはなかったりする。

基本、面白ければなんでもいいらしい（ある人の姿勢が、多大に影響を及ぼしている）。

三傑の一人。

武力チートその二。

今でこそ、牡丹？ 関羽だが、全盛期は、各国最強の人たち<牡丹<恋、というパネエ強さだった。力と巧みさを兼ね備えている。

武器は、元は銀閃。

しかし、それは娘の翠に譲ったので、同じような十字字槍に変えた。名は、光閃。

237

知は、うん（娘のオツムから予想していただきたい）。内政等々は年の功により、なんとか出来る。

作者から／主人公があんなだから、こっちがストライクフリーダムになった。

……もっ、こっちが主人公でよくな？

統：5 武：5 知：3 政：3 魅：5

姓名／韓遂

字／文約

真名／薊あひま

歳／3？

容姿／薄紫色の髪を、首筋近いところで二つに分けている。

真面目なときは鋭くなるが、基本は丸い目で、色は髪と同じ。
勿論のごとく美人。

身長は168cmと高め。

おばいは大きい。

柔らかさに自信があるらしい。

若いころから、プロポーションはほとんど変わらない。

牡丹とお揃いのチャイナドレスを着用（但し、牡丹よりは若干露出度が高い）。

備考／牡丹の義妹で、瑪瑙の義母。

文官筆頭であるが、戦にでることもしばしば。

快活で酒好きだが、牡丹がフリーダムなため、しっかりはしている。
良き女房とも言える（紫苑と桔梗と祭を足して3で割った感じの性格、といえば分かりやすいかも）。

過去に牡丹と確執あり。

武力は、元々文官なので、そんなに強くはない。
が、一応蒲公英よりは強い。

ちなみに全盛期は、甘寧程。

武器は、無骨な偃月刀。

名は、月牙（なんか厨二っぽいが、スルーで）。

知は、政治経済に偏っているが、出来る人。
この人があるから、西涼はもっている、といっても過言ではないぐ
らい、一応凄い。

作者から／出したはいいが、話のネタが全く浮かばない人。
可哀想なので、救済措置はとりたいたとは思っている。

統：4 武：3 知：4 政：5 魅：4

姓名／鳳徳

字／令明

真名／山百合さやめ

歳／28

容姿／赤紫色の髪を、後ろで一つに纏めている（纏めた髪は、牡丹
や翠ほど長くない）。

前髪は目にかかる程度に長く、サイドは肩にかかるほど。

目はキリリとしており、色はライトグリーン。

顔立ちは、かつこよさと美しさを兼ね備えつつも、あどけない可愛
さを若干残した、なんとも説明しづらいもの。

とりあえず、美人。おばいは、翠より少し大きい。

身長は、作者と同じ165cm（え

服装は、白のチャイナドレスで、露出ほぼないが、スリットだけは
何故かえげつない。

備考／牡丹の忠臣であり、馬騰軍の筆頭將軍。

牡丹とは、かれこれ20年来の付き合いがある。

クーデレで、たまに天然で、少女のように恥ずかしがることもしばしば（基本的に牡丹と陽のせい）。

可愛いものが好きだったりする。

牡丹に多大な恩あり。

武力は、翠より上（純粋な力勝負だと負ける）。

というか、牡丹と同等ぐらい。

陽ほどではないが、強いというより巧い。

武器は、二本の戟。

名は、驚天動地（KOEIの無双より引用）。

知は、それなりにある。

薊、陽に次ぐ文官でもあったりするほど。

作者から／オリキャラの中で一番可愛さを求めた人。

ていうか、（原作キャラ含まず）私の妄想の中で一番可愛い（え

そんな節はみられなかったですが、まあ、これからが濡れb 見

せ場です。

統：4 武：5 知：3 政：4 魅：4

姓名／閻行

字／彦明

真名 / 瑪瑙^{めのう}

歳 / 19

容姿 / 褐色の髪をツインテールにしている。
陽や牡丹程ではないが、切れ長の鋭い赤目。
これまた美女である。

女の象徴ともいえるところつるぺた、絶壁。

身長は163cm（今さらだが、この情報いるのか？）

適当な白シャツに、ファー付きのジャンパーっぽいのを羽織っている（この時代にファーあんの？とか考えてはいけない）。

黒のミニスカに、黒ニーソ着用。

備考 / 薊の義娘で、翠とは腐れ縁と呼びしめる仲。

娘となつて、14年は経つ。

母を支えるべく、頑張っている。

男が嫌い（あるトラウマのせい、というのもあるが、決してそれだけではない）。

ツンデレで、（限定の）ドM。

翠とは仲が良い（喧嘩するほどなんとやら）。

武力は、翠より上だが、追い付かれつつある。

山百合にも勝てなくはない。

純粹な力だけだと、一番強い。

武器は、両鎌槍（槍に小鎌を両サイドにつけた感じ）で、三つに折れて、三節戟にもなる。

名前は鬼灯丸（パクリではなく、リスペクト）。

知も、翠を小馬鹿に出来るほどにはある。

薊の補佐をしてるため、成長しつつあったりする。

作者から／正直、キャラの性格的に（シンデレラ＋M、というところ
が）某所の詠ちゃんとは若干被ってたり。

だが、こちらは眼鏡っ子ではないし、三編みでもなく、戦えるし、
ドがつくM！

問題ない……はず。

統：4 武：5 知：3 政：4 魅：3

姓名／馬休

真名／茜^{あかね}

歳／14

容姿／肩口まで伸びた茶髪を、適当に後ろに流している。
ぱっちり若干つり目の赤目。

愛らしさがありつつも、思春期のういも見せる美少女。

身長は140cmあるが、いまだ成長途中（華琳 or z）。

胸は、今で言うBカップぐらいはある（瑪瑙 以下略）。

服装は、赤に近いオレンジ色で、蒲公英のネクタイ？ない版

下はスカートにスパッツ。

備考／元スリ少女。

かなりの凄腕だったりする（初めて捕まえられたのは陽であり、陽
の異常な観察力によるものである）。

元々親はおらず、村の長老であった義祖母に育てられる。

二年前に他界した為、スリをやっていた。

陽に捕まっただけからは止めて、真つ当に働いていたが、そこにタイムリ
ング悪く村が襲われ、戦争孤児となつたところを牡丹に引き取られ
た。

家族となつた当初、もっと早くこれたのでは、という疑念から牡丹
を嫌っていた。

やがて母として認めるようになるが、反抗期も相まって、未だに牡
丹を、母さんとは呼ばない。

藍が好き（一応、弟として）。

武力は、歳の割には高い。

が、蒲公英にもまだ及ばない。

固有の武器はまだない。

修練には矛を使う。

知も、翠よりある（翠はどんだけ低いのか、と思つてはいけない）。
ちゃんと勉強しているからである。

たまに陽に教えてもらうこともある。

作者からノネタが思いつかない人その2。

その1の人よりはるがあるが、優先順位のお蔵入りがしばしば。

一つは茜メインの話がちゃんと用意してあつたりする。

軍人じゃないのでステータスはなし。

姓名 / 馬鉄

真名 / 藍^{らん}

容姿 / 自然と髪が立つほど短い茶髪。

目はクリクリまん丸の赤目。

丸かった顔のラインが引き締まり、少年からの脱却途中の為、まだあどけなさが残る。

イケメン候補（中の上 / 上の下になりつつある）。

身長は140cmで、未だ発展途上（170ぐらいになるはず）。

青のカンフーシャツに、白の長ズボンを着用。

備考 / 元二ト……ではなく、あくまで普通な子供（歳的にお手伝い程度）。

茜と境遇は同じ（牡丹を嫌っていた訳ではなかった）。

何よりも茜が好き。

姉として、ではない。

武力は、未だ発展途上。

まだまだである。

基本的に戟。

茜同様、固有の武器はない。

知もそれなりにある（翠より……以下略）。

たまに陽に教わることもある。

作者から / ネタが（ry

しかしながら、救済措置がないわけではない。

…… 薊がかわいそうでならなくなってきた。

ステータス（ry

人物紹介（後書き）

これらは次の話からの設定です。

因みに、翠は18、蒲公英は16という設定です。
何が、とは敢えて言いません。

つまりは、セクロスシーン（書かないけど）は二年後ってことです。

第十八話（前書き）

原作突入。

といっても、導入のみだけど。

第十八話

S i d e
陽

「うえ〜、びちよびちよだよ〜」

「流石にキツイよな」

ちよつとした木の下で雨宿り。

内心、やっぱりなあとは思うがな。

朝からずつと燕の鳥やらが低く飛んでたし。

全く、あの阿呆のせいで余計なことに巻き込まれたもんだぜ……。

金城に引越してから、もう半年程たった。

最近飛んだばつかだった気がするが、まあ、突っ込まないでくれ。

金城は、隴西よりも西、河水沿いに位置している。

そのお蔭か、隴西よりも栄えている。

如何に水が大切かが分かるだろう？

だが同時に、隴西よりも五胡の脅威に晒されていることも否定出来ない。

だからこそ俺たちをそこに置いた、と表向きはそういうことなのだろう。

しかし、表があれば裏がある。

劉宏は、というより何進及び張讓は、少しでも遠くに追いやりたいらしい。

一國を相手にするほどの力は今のところ持つていない現状で、そこまでの警戒される理由が、俺にはわからない。昔に何かあったとすれば、たぶん母さんや薊さんは知っているだろう。知れるなら知りたいが、母さんの地位が上がった分の仕事が増えるわ、五胡との接触や各地の賊の蜂起も増えるわ、雄が台頭しだすわ、とやるが多すぎる。とてもそんな余裕はない。

話が逸れた。

とりあえず俺と蒲公英は、金城よりはるか西（といっても馬で往復半日程度）の地までやって来ていた。

目的といえば、逢い引きや遠乗りなどという仰々しく空想的なものでなく、肅々として現実的なものである、敵情視察というやつだ。

さっきも言ったが、金城に来てからというものの、小競り合いが絶えない。

そうすると、嫌でも有能な人材が他から抜きん出てくるのである。という訳で、半年という短い間に蒲公英は將軍になつていた。

その蒲公英と俺で相手の動きを探るのだから、いわゆる将校斥候というやつになる。

部下に任せれば事足りることなのに、わざわざ自分で言うのもアレなんだが、中核を担う俺が出向く必要がわからなかった。

たとえ母さんの命令でも、だ。てか、確実に普通の斥候に任せれば済む問題だ。

ま、そんな反論は無視で結局強引に連れ出されたからここにいるんですけどねー。

んで、帰り途中に雨に降られたって訳だ。

いやはや……めんどくさい。

雨の激しさは留まることを知らないらしい。
ふと、隣の蒲公英を見やれば、身を震わせていた。
どうして気付いてやれなかったのだろうか。

朝の時点で雨が降るとわかっていたのは俺だけらしく、（その俺も
前述どおり強引に、であったので）雨対策など何一つしていない。
それゆえ雨に打たれていたのだ。
身体が冷えているにきまっている。

……まあ、西涼という寒い地域に住んでいるのに、何故　翠姉、
瑪瑙を含め　半袖で、下は膝上どんだけよ、と思うほどの短さを
気にしたら負けな気がするから、触れないでおく。

とにかく、だ。

思考に耽るよりも先決させるべきことだった。

……最低な兄貴だな、俺は。

上着　ロングコートとでもいうのだろうか？いや、今はどうでも
良いことだ　に手を掛け、素早く脱ぎ、それを蒲公英の前に掛け
る。

そこで俺は蒲公英の後ろに回って、抱いてやる。
雨で湿ってはいるものの、外気に触れない分だけましだろう。

それに、脱いだら俺、半袖だからな。
抱き付くのは双方にとって合理的だ。
あくまで、俺視点だけだ。

本当は、濡れた服を脱ぐべきだけど、その後に着る服はないしな。
肌で暖めあうとか、それは、……あかんで。

蒲公英は驚きと恥じらいの顔で、いいの、という視線を送ってくる。

「いいさ。雨には慣れてる。それに、……蒲公英が暖かいからな」
ニコリ、と笑いかける。
寒いには寒い、それくらい我慢するさ

「ありがとね、お兄様　えへへ……あつたかい」

この笑顔が見れるなら。

やっぱ、子供の笑顔ってやつはいいもんだ。

……自分も、昔はこんな笑顔をしていたんだろうか？

つと、危ねえ。

思わず回想に入るとこだった。

別に、俺の過去なんてどうでも良いことだろう？

「だいぶやんできたな」

「……そーだねー」

がっかり感を出す蒲公英さん。
なんでさ？

「……くしゅっ」

おいおい、マジかよ。

この時代では、ただの風邪ですら不味いぞ。
……この時代？

「急ごうか、蒲公英。……この雨だ、風呂ぐらい沸かしてくれてる
だろうからさ」

「……うん」

返事をしてから、ずび、と鼻をならす。

いやあ、……可愛いなあ。

おっと、こんなことを考えている場合ではない。

「こくとー、おーほー」

呼ぶと、すぐにやってくる二匹。

黒兎と黄鵬もまた、近くの木陰で雨を凌いでいたのです。

蒲公英を、黒兎に乗るよう促す。

んで、その後ろに俺も乗る。

そんな、なんで、みたいな顔して見上げないでよ。

熱っぽい目での上目遣いと、（たぶん）風邪熱でほんのり赤い顔で、
だぜ？

……発情すんぞ？

「黒兎を御せるのは俺だけだ。……それに、こっちの方が早く帰れ
る」

黄鵬とは翠姉の馬。

今回の任務は、機動力というか、速さがある。

という訳で、蒲公英は翠姉に借りたらしい。

だけでも、目利きである翠姉が選んだ、数多くからの三匹　紫燕、麒麟、黄鵬　中の一匹だとしても、黒兎には及ぶことはない。ちようど今の　黒兎には二人、黄鵬には騎手なし　状態で、やっつりあうぐらいだ。

……黒兎さん、マジパネっす。

「しっかり俺に抱かれてるよ！」

急ぎ黒兎と黄鵬を走らせる。

……なんか、不味い気がしないでもないから、説明しよう。

蒲公英は、俺の前に座っている。

掴まるところなんて手綱ぐらい。

だから、俺に身を預けてくれている方がずっと安定する、という訳だ。

決してやましいことなどない。

しかし、やっぱ熱まで出たのか、蒲公英の顔が赤い。

本当にヤバそうだ。

なのに、一刻も早く家に帰らなきゃならんのに、……凄く帰りたくなってきた。

あ のとき　洛陽から帰ったあと　から、危機察知能力は格段に上がったのだ。

それが警鐘を鳴らしてる。

……悪寒がトマライデス。

上着を蒲公英に与えているので、俺は今、半袖である。それが故に寒いだけだ、と切に願いたい。

家に帰れば、案の定と言うべきか、修羅がいました。

蒲公英はお風呂へ直行しました。

逃げたな、コンチクシヨウ！

「茜さんや、お兄ちゃん、なにかしたかな？ 悪いところがあったら、ちゃんと直すから、教えて？ お兄ちゃん、なんかした？」

震えが止まんないんだぜ！

後ろからの圧迫感が尋常じゃないんだぜ！

「……………どして？ 陽兄に悪いとこなんて、なんにもないよ？」

清々しい笑み。

うむ、なかなか可愛らしい良い笑顔じゃないか。

この笑顔に、間接的に俺をいじめている訳ではない、と確信できる。

だけど、ねえ……………。

背につたう冷や汗が半端じゃないんだぜ！

「じゃあ、さ。……………なんで母さんはあのときみたく怒っ
、あ
く〜れ〜」

首根っこ、とられますた。

蒲公英には、山百合さんについていってもらったので、憂いはない。

……………さて、逝って参りますか。

前回は名目上のお稽古。

みっちりしごかれたよ。

今回はなんだろねえ？

案の定、寝起きは最悪でした。

母さんはくどくどくどくどくと。

俺がわふ〜、と。

母さんが酔いつぶれるまで、つてか寝るまで愚痴を聞き続けた結果だ。

薊さんが政務手伝ってくれないとか、山百合さんが最近可愛いとか、瑪瑙に若干避けられてるのではないとか、翠に父親は必要かとか、蒲公英に圧倒的に負けているのではないとか、茜に嫌われてるのではないとか、藍が強くなりたいたいと言ってきたとか。

……愚痴じゃない割と真面目な話もあったけど。
とりあえず全然酔ってくれねーからさ、結局深夜遅くに寝落ちしたんです。

これはこれで死ねるね。

どうせ母さんも必要になるから、と、外の井戸に水をとりにきた俺、眼帯を外し、まずは眠気覚ましにと顔を洗う。

ひんやりとした水がなかなか気持ちいい。

ふと、顔を上げる。

その行為に至って意味はなく。

ただ、なんとなく、だ

そして、何故だかわからないが、それでいて、まるで決定事項であるかのように、東に目を向ける。

そこに、一筋のなにかが確かに、左目に映った気がした。

Side 三人称

「俺は、天の御遣いとかいう、胡散臭いながらも、世を憂う三人の手を助ける為の御輿的存在じゃなかったのかよ、バカヤロー」

その俺が皿洗いですか、と洗い場でばやく者が一人。

天の御遣いこと、北郷一刀である。

出会いやら、劉備からの懇願やらは、原作通りであり、他のSSでも見飽きているだろうから割愛する。

手抜きな訳じゃ、ないんだぜ！

「まあ、劉備も筵を作ってたんだし、下からのスタートはこんなもんなのかな？」

ぶつぶつと呟く姿に、周りはひいていた。

一刀は気付いていなかったが。

「ただ、……なんで女？ しかも美がつく。……新手的エロゲかよ」

まあいいけど、と続ける。

ツッコミかどうかは判断しにくいけど、その内容は的確に当たっていた。

「……アイツは劉備の理想を、甘い、と言って、笑うだろうなあ」

(それでも困っている人を、女の子を見過ごす訳にはいかない。だから、手伝いたい、と思ったんだ)

と、一刀は心の中で続ける。

「お前と違って、俺は平凡な奴だけど、出来る限りをしたい」

(だから、さ。

見ていてくれないか？

滑稽だ、と笑ってくれても、馬鹿にしてくれてもいい。

ただそこで見ていてほしいんだ)

そう、今は無き自らの親友に乞う。

「はい、追加だよ！」

どうやって運んできたんだろ、と思わず呟く一刀。

50枚積みの皿の山々が、そこにあつた。

「言った矢先からどうかと思うけどさ、……ちょっとだけ目を反らしといてくれないか？」

現状に泣きたくなつた、一刀であつた。

結局、全て終えたのは日が落ちる少し前。

働かせすぎたとの女将の好意により、宿と宿代をゲットした一刀、

劉三姉妹の御一行。

明朝に、紹介された桃園に向かい、契りを結ぶことになるのが、原作との相違である。

さらに、もう一点だけ、原作との違いがある。

「天からの使者、現れり。……こつ馬白様に報告しといておくれ」

「了解です。……しかし、貴女は女将という職に、よく短期間で慣れたものですね」

「あたしゃ、戦いが嫌いねえ……元々、こついうことがやりたかったのさ。半年もあれば、ちょちょいのちょいってもんだよ」

「それは僥倖。……それでは失礼します」

陽は語る。

「こつからは激動の時代だね」と

第十九話（前書き）

進んだけども。

進んだ気がしないのはこれ如何に。

第十九話

天の御遣い。

蒼天切り裂きやって来て、乱世に平和を誘う天の使者。

噂であるので、多少言い回しは違ってきてるが、大体はこんな感じの紹介のされ方だ。

そいつが、最近この大陸に遙々やって来たらしい。

俺は正直、必ずやって来るとあらかじめ予想していた。

理由として、そいつはこの大陸に於ける始まりの象徴であり、収束の象徴でもあるから、というのが一つ。

もう一つは、俺の感覚的な確信からなる。

ひどく曖昧で、抽象的であるのに、何故か分かっていた。

本当に何故なのか分からない。

初めて天の御遣いの噂を耳にしたのは、ちょうど一月ほど前。

俺はその超絶的に胡散臭いのを、矛盾した存在奴だと思った。

微妙な均衡を保ってきたこの世を乱す不届き者。

悪政強いる馬鹿共が乱したこの世を正す道理者。

乱世へと誘う悪。

治世へと誘う善。

……実に愉快な存在だ。

さらに、その噂は俺が関与したから、というのも否定出来ないが大陸中に広まった。

数多の人間は実を取る。

目先の欲に囚われる。

後の影響を無視して、都合の良い方だけを選び取る。
だからこそ、動乱を幕開ける象徴を渴望する。

……笑えるね、全く。

俺が歪んでいるから、こう思った訳ではない。

てか、最初から狂ってる。

俺自身が絶対的に矛盾した存在だ、と言えるぐらいに。

何も貫けない矛と何でも通す盾。

はたしてそれらは本当に矛と盾なのかは甚だ疑問だが、このように、
矛盾にも色々あり、それを誰もが持ち得ている。

だが、絶対的矛盾、というものを持ち合わせた者は、そうはいない。
何故なら、非情で異常な覚悟か、壊れた心。

所謂、狂精神。

それがなければ、必ず破綻するからだ。

殺す為に助ける。

悪を挫く為に悪に染まる。

……そういった数多くの矛盾に対して、それらを実行する冷たい覚
悟。

俺自身、どうとも思わない壊れた心。

俺はどちらも兼ね備えている。

全てに於いて、揺るぎなく、圧倒的に矛盾する。

それが俺であり、絶対的矛盾、というやつだ。

それを　その絶対的矛盾を　表で繕っても、わかる人にはわか
る。だからこそ、俺には好評も悪評もある。

だからこそ、狼と呼ばれるに相応しい。

「そうは思わないか、蒲公英」

「ん？」

休憩用に、と用意した三人掛けぐらいの椅子に座る蒲公英が反応する。

何時のときか考えていた”狼”たる所以は、ここにあると俺は前に結論付けていたんだが。

ま、突然ふつてもわからんだろうな。

突然だが、俺と蒲公英は、俺専用の執務室にいる。

金城に来て、念願の俺専用執務室を母さんから賜った。

まあ、書簡が膨大になったから、という泣ける理由だが。

とにかく、それができてから今に至るまでの問題（と言えるものではない）は、何故か蒲公英さんが入り浸ることです。

そして、俺の大切な動力源である糖分をばちっていきます。

俺は甘いものは好きなのです。

三度のメシと同じぐらいです。

甘すぎるのは嫌いです。

ほら、ベタつくじゃん？

おっと、好みの話は今はおいといて、だ。

ホントは是非ともやめて欲しいです。

ま、食べられたら、その後に、たんばぼてめーばかやろっ、と言っぐらいで済ましますがね。

俺はそんなに怒るほど狭量ではないのだよ。

「なんでもない」

「……ふん。 あっ、これって、天の御遣い様についての報告書？」

いつの間にか接近していた蒲公英さん。
それで、俺が手に持っていた書簡を覗きこんでいた。

「たんぽぽ、その人に興味あるんだ」

「そうか」

素っ気なく答えてしまった。

何故だろう。

なんだか、こっつ、……イライラするんだ。

別に蒲公英が誰に興味を持つのが関係ないのに。
無性に腹が立つ。

けど、単純な怒りじゃなくて、……どこか悲しい。

……訳、わかんねえ。

「……お兄様？」

「俺は天の御遣いに何の興味も持たないね。全然、全身全霊、全体的に全面的に全般的に全部、興味がない」

別に、本当に興味がない訳じゃない。
ただ

「天の御遣いに、これっぽっちの興味を持つてたまるか！」

文字通り、全力で否定したくなっただけだ。

勢いよく立ち上がり、そのまま退出してしまふ。
呼び止めようとする蒲公英の声を無視して。
ズキズキと痛む心は無視して。

S i d e 牡丹

「嫌われたあ〜?」

共にいた翠が怪訝そうな声を洩らす。

確かに、普段からみれば有り得ないことのように思えるかもしれないけど。

対する蒲公英は半べそかいている。

可愛い姪っ子ね、全く。

「どうしてそう思うの?」

詳しく聞かないとわからないけど、多分陽が悪い気がするわ。

そんな感じで事の顛末を聞けば、……フフツ

陽たらずいぶん人間らしくなったじゃないの。

いや、戻った、が正確かしら?

「……母上」

「ええ。全てに於いて、あの馬鹿息子が悪いわ」

「……ホントに？ でもお兄様、すっごい怒ってたよ」

愛しい馬鹿息子は今頃、自分の馴れない感情をもて余しているはず。本当に、可愛い馬鹿息子。

「大丈夫大丈夫。このおばさんに任せときなさい」

大きく張った胸を、さらに張ってみせる。

フッフ……まだまだ衰えていないわね

「陽兄なら中庭にいたわ。……頑張ってるね、おばさん（笑）」

「茜……。くう〜！」

いつ、いつの間に入って来たのかしらっ！

茜と藍が後ろにいたわ。

いい加減やめてもらいたいけど、おばさん、と自分で言ってしまうだけに、今回は否定できない。

……全く、どこから聞き付けているのか、分かったもんじゃないわ。

まあでも

「ごめんなさい！」

「だから藍、謝らなくていいんだってば！」

大人で子供のあの馬鹿息子に比べたら、可愛いものよ。

「あっ！ ちょっと、……う〜」

「へへっ」

二人を撫でる。

振り払わないだけ、茜も私を受け入れてくれている。

藍は言わずもがな、よ。

年相応に頬を膨らます茜が、無性に可愛い。

くすぐったそうに目を細める藍も、可愛い。

二人はすでに私の娘と息子。

私の大事で大切に大好きな家族の一員。

……アンタが教えてくれた、家族という大切な存在。

その家族のみんなを紹介してやりたかったのに、どうして先に逝っちまったんだよ？

「……おば、さん？」

いけないいけない。

心配そうに見上げてくれた茜に、首を軽く振ってから、微笑んでみせる。

そうすると、顔を真っ赤にして、伏せちゃった。

ホント、可愛いわ

……今更言ったところで、どうしようもねえか。
待ってな。

どうせすぐにいくだろうしよ、そんなときに紹介してやるから。

Side 三人称

「……………」

無言で剣を振るい、拳を奮つ。

研ぎ澄まされた剣術と、乱れた我流の拳術。

両者が合わさって、初めて陽自身の武の完成型となる。

「やっぱり、じっくりこねえ」

しかし、完成と言えど、まだ八割とも言える。

今、陽の持つ剣での限界の為、八割でも完成と言わざるを得ないの
である。

「やっぱり陽のって、不思議な武よね」

「いつからそこに？」

陽は後ろを振り向きながら問うた。

「最初から、じっくりこねえ、までバッチリよ」

「堕ちたな、俺も……………」

サムズアップする牡丹に、ガツクリ、といわんばかりに陽は肩を落
とした。

「それは違うわ。自己嫌悪を振り払うので一杯だったんでしょ？」

「へえ……聞いたんだ」

「そこは驚きなさいよ。つまんないじゃないの」

今度は、牡丹が肩を落とす。

おどけたように、だが。

「……別に、アンタの面白いことに付き合う気は
っっっ！」 「陽！」

怒りの形相で、牡丹は陽の名を呼び掛ける。
それにはっ、となる陽。

「……ごめん、母さん。イラついてた」

「分かればいいのよ、分かれば。……ほら、おいで」

罰が悪そうに、陽は余所に目を背ける。

それに対して牡丹は、その場の芝生に正座して、自らの腿を叩いて
陽を誘う。

膝枕をしようというのである。

「いや、それは流石に恥ず 「陽？」 わかったよ。わかりま
したよ！」

「そうそう。物分かりの良い子は好きよ」

「ったく、……しょうがねえ」

そう悪態を吐いて、牡丹に頭を預ける陽。

なんだかんだ言いつつも、結局陽が折れるのが、いつも構図である。

「陽って、ホント、分かんない子ね」

「あん？」

「無表情で分かりにくい時もあるけど、今みたいに他人行儀をしたりして、驚くほど分かりやすかったり、ね」

と、陽を撫でながら言葉を続ける牡丹。

振り払わない辺り、陽も満更ではないのかもしれない。

「馬鹿にしてんの？」

「ううん、褒めてるの」

「ホントかよ」

「本当よ」

「なんかハズイな」

「可愛いわ」

「それを言ったら母さんも」

「あら、ありがとう」

「いえいえ、お世辞ですから」

「むっ……可愛くない」

「それを言ったら母さ　「怒るわよ？」　サーセンした」

「……フフツ」「……ハハツ」

罵倒でも賞賛でもない言葉の応酬。

テンポよく軽口を叩きあう。

似ているからこそ出来る会話である。

二人は自然と笑っていた。

「ねえ、陽……自己嫌悪に陥る必要はないわ。そのイライラは、アナタが成長している証拠なんだもの」

勿論、蒲公英には謝って貰うけど、と牡丹は続けて言う。

「ああ、わかってる。ちゃんと謝るよ。……でも、このイライラってなんなのさ？」

陽は知りたかった。

自分の知らない感情を。

突然に支配された理由を。

「それは嫉妬よ」

「しっ……と？」

「そう、嫉妬。人間の醜くて、私に言わせれば、かけがえのない感情よ」

牡丹は優しい手付きで陽の頭を撫でる。

ただひたすらに慈愛を込めて。

「醜くて、かけがえのない？ ……よく分からん」

「直に分かるわ。私の息子で、似た存在なのだから」

満面の笑みを浮かべる牡丹。

その笑顔に、綺麗だ、と陽は思った。

陽が、牡丹の下から蒲公英のところに向かった後。

「嫉妬、か。 ……随分と久しい感情だとは思わない？」

辺りには誰も居らず、他から見れば、虚空に質問を投げかけたように見えることだろう。

「なんじゃ、気付いておったのか」

しかしながら、ここにはもう一人いた。
小陰から出てくる薊。

「あ、ホントにいたんだ」

「気付いておった癖によく言う」

「フッフ　さ〜てね」

肩を竦める薊。

そんな様子に笑みを溢す牡丹。

「嫉妬……ふむ。確かに久しい。じゃが、……儂の”アンタ”に対する嫉妬は、計り知れないものであったのを　「覚えてる」む」

「私にも”テメエ”に対する嫉妬があったもの」

今となつては全部大切な時間よ、と牡丹は笑う。

「ハア……氣勢を削がれた気分じゃ」

もう一度肩を竦める薊。

しかし、その顔は笑顔だった。

「さて、義姉上。書簡どもが待ちくたびれていますぞ」

「……いやよっ！」

勢いよく立ち上がる牡丹。

「駄々を捏ねるでない！　それでも儂の義姉かつ！」

「やあつ……ダメ……こつ、こないで」

ズンズン、といわんばかりに歩を進める薊。

半泣き顔を作つて、それに合わせるように後退りながら、牡丹は言う。

「何故か儂が強引に迫っているように聞こえるのじゃが……」

「事実じゃない」

キョトンとする牡丹。

その隙を薊は見逃さなかった。

「ふっ、もう逃げられませぬぞ、義姉上殿？」

「くっ！ お母さん、はーなーしーてーよー！」

「子供か！ そして、儂はお主の母親でないわ！」

服の後ろの襟をヒシッ、っと薊は掴む。

逃げられない牡丹は、ジタバタと幼児退行をする。

果たして、一体どちらが姉なのだろうか。

「ふう。ねえ、薊。あなたに言うておかなきゃならないことがあるの」

「なんじゃ？ 急にしおらしくなりおって」

いきなりキリッとして真剣味を帯びた話し方に、薊は少し戸惑ったが、そのまま 襟を掴んだまま 聞くことにした。

「あのね、私、政務をすればするほど寿命が縮む病気なの！」

……………。

もう少し、マシな嘘は吐けないのだろうか。

「はい、連行。いくぞ」

「ああん、ホントなのにい！」

牡丹の悲痛な叫びは、城内に轟いた。

が、薊が怖いので、全員スルーするのであった。

「あれ、私、太守じゃなかったかしら？ 何故かしら？ ……目が
ら汗が止まらないわ」

一方、天の御遣いはというと……。

「初戦はついくせんなう」

無事、公孫贗軍に将として組み入れて貰った四人。

天の御遣いこと北郷一刀の初めての戦である、黄巾党との初戦しよせんも終
局を迎えていた。

「うっぷ……ヤバい、吐く」

おろろろろ

と、いわんばかりに勢いよく、胃の中のモノを吐き出す一刀。

「ちよ、御遣い様吐かな」

おろろろろ
と、衛兵Aはもらい吐きをしてしまう。

「そう言いつつ、お前まで吐いて」

おろろろろ

と、一刀と衛兵Aの吐瀉物の量に、もらってしまつ衛兵B。

この負の連鎖により、一刀と劉備、その二人を守護する衛兵達の中で、劉備一人だけが吐かないという、なんともシユールな光景がで
きあがっていた。

「あつ、あれー？ 私も吐いた方がいいの、かな？」

陽は語る。

「嫉妬……今なら母さんの言ってた意味が十分に分かるよ。関羽見
てたら、なあ」
と

第二十話（前書き）

ああ、進まない。

進まないっいたら進まない。

大局はちょっとずつ進んでるはずなんだけどもー。

第二十話

S i d e
陽

「暇だ」

この一言から始められる1日がなんと嬉しきかな。

本日、俺は全日休暇だ。

東の方ではこのような休暇はとれまい！

何故かといえ、こーきんとー、とかいう賊どもがのさばっているからだ。

ま、生憎とこつちにその影響はねえから関係ねえのさ。

こーきんとー、とかいう奴らは2つに分けることができる。

一つはあいどる、ってやつの追っかけ。

もう一つは、その勢いに乗じた民や賊共。

と、いう具合だ。

そのあいどる、ってやつである、張三姉妹の活動域は大陸北東付近。さらに、こつちの賊は俺が駆逐したから、ほとんど居らず。

かといって、わざわざ俺の近くでその勢いに乗る勇氣のある民衆やら、逃げてきた賊はいないだろう。

死神やら狼やらと言わしめる俺を前にして蜂起するのは、よっぽどの自信家か馬鹿、としか言えねえ。

だからこそ、こつちで暇が出来るのさ。

こーきんとーといえ、面白い話を一つ。

主に将を務めるのは、追っかけ側の人だそうだ。
能力がある奴や野心がある奴は、頭を殺し、自分がのしあがるらしい。

このように、こーきんとーの中でも弱肉強食の風習が蔓延っているという。

……笑えないか？

弱肉強食のこの世の業から逃れたいが為に乱に便乗してる癖に、ってね。

ま、どうでもいいけどさ。

宛もなくぶらぶらと歩いていると訓練場についた。

……嘘です、見に来たんです。

目的といえば、あと半刻ほどで昼になるからです。

「こりゃ凄いな」

思わず息を洩らす。

指示一つで様々な陣形に素早く変化させることができる。

その様は、一糸乱れぬ動きと言うべきか。

全く、相変わらず双方とも素晴らしいね。

脱帽もんです。

ま、帽子被ってないけど。

もうちょっと見たかったのに、終わっちゃった。

と思ったら、兵たちがぐるりと円を作り、その中心へと向かう二人。

俺から見て、右側で指揮していた山百合さん。
左側で指揮していた瑪瑙。

その二人が試合（死合い？）するらしい。

「……陽君、審判をしてくれませんか？」

「げ、いたの……！？」

「……いるとお教えした方がよろしかつ　「べつ、別に、どっちでも良かったわっ！　かつ、関係ないもの」　左様ですか」

俺を呼んだ癖に、なにやら二人で話しています。

俺のことはガン無視ですね、わかります。

まあ、その間に仕込みをしていたので構わんです。

「鳳徳將軍に閻行將軍、準備はよろしいですか」

「……ええ」

「ん」

さあ、いまだ！

『……よう……い、ひょう……い、ひょうてい、ひょうてい、ひょうてい……い！氷帝！氷帝！氷帝！勝つのは氷帝！負けるの閻艶！勝者は鳳徳！敗者は閻行！氷帝！氷帝！氷帝！氷帝！氷帝！氷帝！氷帝！』

鳳徳部隊の兵たちに仕込んでいたのはこれ。

氷帝といえば、これだね

テニ〇リ的な意味で。

呆け顔の山百合さん。
ビキビキ、といわんばかりに青筋を立て、こめかみを押さえる瑪瑙。

「……陽君」

「うす」

わざと声を低くして返事をする。

そしたら、おおう。

山百合さんと瑪瑙の睨む目。

なかなか……くるね！

「……陽君」

「ハイ！ スイマセンした！」

このネタはやらないといけない気がした、とは死んでも言えないさ。
兵たちに声かけをやめてもらうことにする。

てか、山百合さんに睨まれて、殆どやめてたけど。

案外、皆ノリノリでやってたのにな。

よし、仕切り直しだな。

「オホン！ では改めまして……見あって見あって、はっけよお
い」

シュン、と風切り音が一つ。

ストツ、と何かが刺さる音が二つ。

その場で動けず硬直していると、髪が数本落ちたのが見えた。

ゆっくりと後ろを振り返れば一本、足下を見れば二本、の短刀刺さ
っていました。

あわわわわわわ……！！

「……陽君？」

「モウシワケアリマセンデシタ」

凄まじい速度で土下座する。

マジこええ……！！

ガクブルもんですよ！

結局殺り合わなかった。

萎えたらしい。

……ま、そういう風になるよう立ち回ったんだけど。

だって、昼は長い時間欲しいじゃない。

ホントだぜ？

決して、作者が戦闘描写書くのが面倒だからやめさせた訳ではない
んだぜ？

活気溢れる大通りに面する、見慣れた派手な店構え。
扉を両手で仰々しく押して入る。

「いらっしやいま……」っ、これは馬白様！

「どっつ？ 繁盛してる？」

正直、聞かずとも知っている。

まあ、事務的なものと解釈して欲しい。

「ええ、お陰様で……それはもう、がっばがっばと」

手もみをしながら、卑しい感じの笑み。

こいつ、こついうことわざとやるから面白い奴なんだよね。

「おや？ これはこれは、鳳徳將軍に閻行將軍ではありませんか！
いやー、お二方に来て頂けるとは、光栄の至りです」

「……………」

無視、というより、店内に興味をそそられて、耳に入っていないだけ……と願いたい。

「ところで馬白様……今日は両手に花ですね」

簡単にはめげないようだ。

流石は元俺の部下だ。

……つてかさあ。

「両手に、花？ なにそれ、どうゆこ」

言葉を遮るように、突然にスパパン、と後頭部への攻撃。
地味にいてえ……。

「ボク達のこと」

「……きまっているでしょう」

「直ぐに暴力を振るったアンタらに、見目麗しい花に比喩することは間違っていると思われるッ！」

断じて認めぬわッ！

と、続けたかったがやめた。

だって、二人の笑顔が怖いもの。

てか、両手に花って、そういう意味なのかー。

知らなかった。

そんなことはおいといて。

「……ささ、こっちこっち」

「」

俺の華麗なる流しには、閉口せざるを得ないようだ。

流石、俺。

今更だが、現状を説明しよう。

誰に、とは聞いちゃ駄目だ。

俺は山百合さんと瑪瑙と共に街に来ている。

勿論、一緒に食事するためだ。

午後から二人とも非番であることを 俺はお偉いさんだから

知ってたんで、さつき誘ってみたらすんなりとオーケ……了承を得られた。

ま、俺の奢りって言葉に食いつかれた感はあるけどね。

全く……現金なやつらだずえ。

個室に入った俺達。

ここは、俺がわざわざ作らせた場所。

THE 豊部屋。

”和”のテイスト……様式が欲しかった俺にとって、ここは至福の場所なのだ。

「へえ〜。アンタにしては、変わった趣味じゃないの」

ぐるり、と室内を見回す瑪瑙。

「……ほぼ全てに於いて、陽君は変わっていると思いますが」

「あ、それもそうだった」

それに若干微笑みながら返すのは、山百合さん。

なんかひどくね？

変わり者、という自覚はない訳ではないけどもさあ。

ただ、……時代が違えば、これぐらい普通の部類に入ると思っただけどな。

「ま、別に俺の趣味なんざどうだっていいだろうさ。ほら、座った座った」

二人を座るよう促す。

(どつでもよくないわよ……)

(……どつでもよくありません)

「では……カツ丼で」

「ん〜、じゃ、天井一つ」

「俺はいつもので」

「畏まりました」

退出する店員。

「で、なんでアンタはボク達を誘ったわけ？」

そこに、瑪瑙が質問してきた。

「…………それは私も知りたくありません」

山百合さんも聞きたい内容であるらしい。

別に理由なんていらなくね？

アンタらはタダ飯食えるんだしな。

言うけどさ。

「ホントは母さんやら、皆も誘おうかとは思ってたんだけど、仕事でさ……。だから、二人だけ誘った、つー訳」

母さんと薊さんは書類仕事。

茜と藍は二人でお出かけ。

翠姉と蒲公英に至っては、この街にすらない。

だから、山百合さんと瑪瑙だけになってしまっただけだ。

「ふう〜ん……ボク達は余り者って訳ね」

あからさまに不機嫌顔をする瑪瑙サン。

表立って表情に出してはいないものの、山百合さんも不機嫌さが滲みでている。

さっぱり意味がわからん。

「どういう解釈したらそうなるんだよ……。俺は元々、家族皆で食べに来たかったけど」

俺とて朝晩の食事は、母さん規則により 家族皆で撮っている。

しかし、そこに事実だけがあり、意味が伴っていなかった。

意味とは、会話をするコト。

俺は、それが出来ていなかった。

最近の仕事の膨大さには、そういった家族との交流を削るより他なかったのだ。

ほとんど家族の皆と話すことすらしなかった、出来なかった。

だから、こうして俺が非番である今日に、こういった時間を作った訳、なんだけど

「皆都合が悪かったみたいだから、結局二人だけという集合率の悪さになったんだけどね」

ま、仕方ねえさ。

「……そう、でしたか」

山百合さんは静かに答え、瑠璃はしんみり、といった様子で答えな
かった。

「おまちどうぞさまですー！」

気まずい感じの空気の中、料理をもった店員がやってくる。

いつもいつも、こういったタイミン……時期は、図っているかように
良いよ、マジで。

それぞれの前に置かれる、カツ丼、天丼、親子丼。

立つ湯気に、香りに、食欲が湧いてきた。

「まあ、食べようぜ」

「……仕方ないわね」

やれやれ、といわんばかりに肩を竦める瑠璃。

それでも、口元はどこか笑っていた。

いやー、良かった良かった。

「……ふふ」

「なっ、なに？」

山百合さんの含み笑いに、何故かひどく動揺する瑠璃。

こういうときの瑠璃は可愛い、って思ったり。

「」「いただきます」「」

食事前の合掌は、すでに馬家の口課だ。

他愛もない会話をしながら、食をすすめる。

やっぱ、こういうのって良いよなあ……、って自然に思う。
あっ、と……。

「エビ天、頂くぜー」

「ああっ！ ボクのっ！ 返せっ！」

「フフン、取り返してみるがいい」

そう言いつつも、半分程の大きさになっていたエビ天を口に入れる。
流石に一匹丸々は不味いと思っ、配慮はしたんだぜ？

ああ……、サクツとした衣に、プリツとしたエビ。

どうやってこんな内陸部まで鮮度を保ったかは突っ込まないけど。
……堪らんなあ。

「ああ……、ボクの食べさしのエビ天……食べ、さし？」

3、2、1、ハイ！

「バカ ツ！！！！！」

これでもかッ、ってぐらいお顔が真っ赤です。
今回に至っては耳まで。

「そんなに怒るなよ！ なっ！ 俺のやるからさっ！」

ここまでの”怒り”は初めてだ。

そんだけの怒りをぶつけられたら流石の俺も怖い。

けど、なんか可愛い。

……どうやら俺は、若干いじめっ子体質らしい。

「瑪瑙様！　これでお納めくださいませっ！」

箸に玉子に包まれた肉をつまんで、瑪瑙の　突きつけると言っても過言ではない速度で　口元に持っていく。

「~~~~~っっ！！！」

一瞬戸惑った仕草をみせるものの、箸の上の物を食べる瑪瑙。その後、声にもならない音（と言ったほうが分かりやすい）を上げ、動かなくなった。

……効果あり、なのか？

顔を見れば、むしろ赤みを増している。
が、攻撃はしてこない。

フハハ、勝ったわ！

あ、これって所謂、あ〜ん、というやつじゃね？

「……全く。天性の女殺しですね、陽君は」

山百合さんの眩きは、俺届くことはなかった。

あのバカは、いつもボクの心を乱してくる。
蹂躪してくる、と言っても言い過ぎじゃないほどに。
目の前にいてもいなくても、寝ても覚めても、心にはバカがいる。
ボクが大っ嫌いな男の癖に、平気で居座ろうとする。
追い出しても追い出しても、何度でもやって来る。

何故？

男が嫌いなはずなのに。

何故？

嫌われてもおかしくないはずなのに。

何故？

心に入られていることを許している。

何故？

アンタの心に残りたいと願っている。

何故？

アンタの為に熱くなれる。

何故？

アンタの為に冷たくなれる。

何故？

もっと近づきたい。

何故？

もっと遠退きたい。

自分に何度問いかけようと、答えは分からないの一点張り。
母様に問うても、答えはボクの心の中にある、の一点張り。

ねえ。

アンタならわかる？

陽。

Side 三人称

一方、天の御遣いはというと……。

諸葛亮と鳳統が仲間になった時。

「ロリ比率が上がった。 テレ〜テツテツテツテ〜」

と、口にしていた。

別に、天の御遣いこと北郷一刀の能力が上がった訳ではない。
むしろマイナスにはたらくこともあった。

曰く……

「天の御遣い様は幼子おなごがお好きなのか」

……という具合に。

真面目に答えた本人は、

「そういったこだわりはない。ただ、好みか……そうだな、好きになつた子が好みかな」

と、いかにも種馬らしい発言をしたので、また、一目置かれていた。

そしてその数日後、曹操との会合を果たした一刀と愉快な仲間たちの5人。

遠のく背を一瞥し、後ろを振り返って発言する。

「ふむ。……………ちっせーんだな、曹操って」

「「「「「じっつ、ご主人様っ！」「」「」」」」」

「にゃー、……………お兄ちゃん、本人を後ろにすごいのだ」

（ロリ……………なのか？

そう仮定したとして、Sでロリとはなかなか……………。

さらに、そうゆー奴がたまに見せるMっ気って萌えるよな）

四人が青ざめ、一人が感心している中、思考に耽る一刀。

「……………」

偶然にも、伝え忘れていたことを言い、劉備軍の陣に帰ってきてきた曹操。

そこに迎えた言葉が、一刀のちっせーな発言だった。

……………どうやら十分に距離をとろうと、溜めたのが仇となったようだ。

（本人に背を向けて、気にしていることをさらりと言いのけるとはね。

この私を前にして、物怖じしない胆力。

私の覇道を阻む者になり得るモノを持っているじゃない。

流星は天の御遣い、というところかしら？）

と、一刀の目の前に立つ曹操は、怒りを乗り越し、称賛すら与えていた。

自分では、何も出来ない、や何もしていない、と発言する一刀だが、実際、駆け引きの場面などは、劉備より巧い。後は、人並みの能力と、桁外れの魅力。ただそれだけが、一刀のスペックである。

曹操は勘違いをしていた。

本人を背にして言いのける……。

そこに本人がいたことを知らないだけだ。物怖じしない……。

思考に耽っていたので、気配に気付いていないだけだ。

「って、あれ、曹操サン？ としてここに？」

思考の波から帰ってこれば。

目の前には、ガタガタと震える仲間たち。視線の先を追って、後ろを振り返ると。

神妙な顔した曹操がいた。 今ここ

とりあえず、ひどく焦る一刀。

「まさか……気付いていなかったの？」

「あ、ああ、まあね」

こめかみを押さえる曹操。

自分の評価したほとんどが勘違いと理解したようだ。

「……覚悟は良いかしら？」

どこからともなく曹操の武器である鎌 絶 を取り出す。

「不味いんじゃないかな？ せっかくの同盟が破綻さ 「それ

とこれとは話がちがうわっ！」 ちよ、桃香、助けて」

仲間に懇願する一刀。

「殺さないでくださいねっ」

頭を下げる劉備。

あるえ？と首をかしげる一刀。

「その辺りに抜かりはないわ」

と、サディスティックな笑みを浮かべて曹操は言う。

「あっ、愛紗！」

委員長が頼みの綱だぜ！と一刀は愛紗に視線を送る。
だが、そんなに現実には甘くはなかった。

「残念ですが、お助け出来ません。今回は、全面的にご主人様が悪いからです」

またもやあるえ？と首をかしげる一刀。

「はわわっ、がっ、頑張ってくださいしゃい！」

「あわわ、応援してましゅ」

「お兄ちゃん、頑張るのだ」

と、次々に見捨てられる一刀。

「もう、良いかしら？」

「……はい」

観念した一刀。

「アッ

！！！」

その叫び(?)は、陣全体に轟いたらしい。

陽は語る。

「そうか……、瑪瑙はツンデレだったのか。ボクっ子、ツンデレ……詠ちゃんと被ってね？ 勿論、YAZAWAじゃない詠ちゃんね」と

第二十一話（前書き）

戦闘描写、難しい。

そして御都合主義あります。

第二十一話

「そろそろ、か」

いつもの様に眉をひそめ、目を瞑り、馬上にも関わらず、手綱に手を掛けずに腕を組みながら、陽は眩く。

いつもの様に、と言っても、何時でも何処でも、というわけではない。

そのしかめっ面は、戦の前のときだけだ。

では、何故か。

それは陽の戦嫌いに起因する。

陽は基本的に、戦うことを好まないタイプである。

だが、乱世は幕開けることなど容易に想像できた 実際になった

為、それも言っていられない。

それならば、と。

それならば、極力少ない戦いで終わらせればいい。

そう考えた陽は、それを実行するための手段の一つとして、

” 相手が相対することを拒みたくなる存在になる ”

ということをし、目標として置いた。

それを成すには、まず相手に、自分という存在に対しての畏怖、畏敬などといった、なんらかの感情を刷り込ませる必要がある。

敵対する者には多大なる恐怖を、味方する者にも敵対することを拒ませるほどの恐怖を、それぞれに印象付けさせる必要がある。

衝突した者はどうなり、どうされ、どうなったのか、ということをし、偏見や誇張の混じった噂を耳にしてイメージさせる必要がある。

過程は違えど、結局は相手に、”馬白”という者の人物像を作らせる、ということにある。
その人物像が大きければ大きいほど、恐ろしければ恐ろしいほど、真価を発揮する。
進んで敵対しようとは思わなくなる。
これこそが、陽の目指すモノである。

今現在、牡丹、薊及び一万の兵を除く、全軍で出撃している。
五胡からの侵攻を防ぐ為だ。
しかし、陽の場合はそれだけに留まらない。
戦とは、相手に恐怖を覚えさせる絶好の機会なのだから。

「ぜりやっ!!」

「っ!?! あつぶな〜い」

力任せに振るわれた斧を、馬を退かせることにより避ける。

「ふははは! どうしたどうした! 仕掛けてきておいて、そんなものか!」

「こつちがどうしたの、って聞きたいよ。こんな小娘一人簡単に殺せるわ、って声高らかにいってたくせに(笑)」

手を口元に持っていき、笑うのを抑えるようなふりをする。
明らかな挑発だ。

……一騎打ちの最中だが、なかなかの余裕ぶりである。

「……本当に貴様は死にたいらしいな」

相對するものは、顔を真つ赤にして、怒りを露にする。

「そんなに睨んでも、お兄様に比べたら怖くないもんね〜だ！」

べ〜、と舌をすこしだして、さらに馬鹿にする。

……この者、挑発の才があるかもしれない。

「馬岱隊、反転！ 後退するよ！」

『おう！』

「何っ！ 逃げる気かっ！」

馬岱、すなわち蒲公英の号令の下、撤退する兵たち。
元から正面きつてやるつもりはなかったようだ。

「これでもくらえっ！ ハハハッ！」

器用に尻を上げ、自分の手で叩いた いわゆるお尻ペンペンした

あと、すぐさま馬を駆る。

……キャラが変わった気がしないでもないが、気にしてはいけない。

「 つ！……！ 全軍、全速前進！ あの小娘をぶち殺す！！」

散々に罵倒された挙げ句、討ち逃がしては堪ったものではない。
激情に委せた突撃命令をする羌の将。

それが、冷静を欠いたその行動が、どれ程愚かなことであるのか。経験の少ない大将である彼と彼の部隊、すなわち、馬白という存在をほとんど耳にしていけない者たちは知らなかった。

……ただ、副大将とその直属の兵たちは冷静に、それでいて測っているかのように見ていた。

「ちい！ 探せ！ 探し出せ！」

簡単に言えば、五胡の兵たちは、立ち込める霧により、蒲公英らを見失っていた。

それもそのはず。

数歩先しか進んでいないにも関わらず、そこにいる、ということに確証が持てないほどの濃霧のかかる林の中だ。

流石にどうしようもなかった。

簡単には見つからず、逃げるのだけはうまいらしい、と悪態をついてしまうほど、大将はイライラしていた。

「む、あれは……。ふん、馬鹿な小娘よ」

大将の視線の先には、小さな篝火によって出来たであろう、ぼんやりとした光があった。

その光を見て、大将は蒲公英の低脳さを哀れむと同時に、先ほど受けた辱しめによる怒りが沸々と再び舞い上がっていた。

「速度を上げる！ 全軍、突撃いいいい！」

『おー！！！！！』

大声を上げ、自ら先頭切って走る大将。

向かうは、その小さな篝火。

徐々に近付いていったと思つた途端、霧が晴れる。

単に林を抜けたただけだが、大将はそれを一瞬で把握することは出来なかつた。

その隙が仇となり、気付けば矢の雨が降り注いでいた。

断末魔の聲が辺りに吸い込まれていく。

「ちい！」

盛大に舌打ちをする大将。

自身は駆け抜けることでなんとか切り抜けることが出来たが、後ろはそうはいかなかつた。

後ろを確認すれば、三割近く死んでいた。

(一体、誰がやりやがつた！)

そう心で叫びながら、顔を上げて辺りを見回す。

すると、みるみるうちに大将の顔が、驚愕の色に変わった。

「なつ、なにい！」

そこには、大将を含めた羌兵がいる場を中心にして放射状に延びる道が、西に向かう一本を除き、西涼兵で埋めつくされた様があつた。……羌兵が通つてきた北に向かう道さえも、だつた。

羌兵から見て、正面後方に漆黑白字の馬旗。

そのすこし手前に緑色に黄金で錦の文字の旗。

右斜め前に白色赤字の鳳旗。

左に褐色白字で艶の文字の旗。

そして後ろに橙色黒字の馬旗。真右にはなにも無く、道が拓けているという構図。

ほぼ完全に囲まれており、まさに八方塞がりである。

「ちい！ 罨かつ！」

嵌められたことに、さらに怒る大将。

そこに、錦旗を掲げたの部隊が近づく。

「そこのお前！ あたしと勝負しろ！」

馬超こと翠が突出する。

一騎討ちをしようというのである。

「いいだろう！ しかし、貴様に相手が勤まるかなあ！？」

それを受けることにする大将。

馬を走らせ、すれ違いざまに斧を思いの丈の力で薙ぐ。

翠も同様に、己の槍 銀閃 で頭を狙い薙いだ。

翠は、服の脇下部分を少し裂かれてしまおう。が、銀閃の切っ先には血が付着していた。

「ちい！」

本日何十度目にもなる舌打ちをする大将。

少しだけ裂かれた頬から血が滴っていた。

それを力任せに拭い、馬を反転させ、再度突撃する。
翠も、ほぼ同じタイミングで第二撃を仕掛けた。

今度は、威力を落とし、確実性のある薙ぎ。

それを見切った翠は、槍の中央付近でその斬撃受け止める。

そのまま斧を跳ね上げ、それにより生じた隙　大きくあいた脇
を目掛け、切り上げる。

「……っ!!」

大将は咄嗟に手綱を引き、馬を退かせることでなんとか回避し、薄皮一枚にとどめた。

「こんなもんか。……期待外れだぜ」

翠によるあからさまな挑発。

だが

「黙れえ　　!!!!」

幾度となく愚弄されてきた大将にとっては、我慢の限界だった。

「ガアアアア　　!!」

大将は自らの斧を無茶苦茶に振り回す。

それを受けることはせず、巧みな槍術でもって流し、巧みな馬術でもって避ける翠。

流石は錦馬超と言っべきか。

すでに三十合ほど撃ち合っているが、息一つ乱れない。対する大將は肩で息をし、疲弊しきった様子だ。それを見て、そろそろ終わりか、と翠は判断する。半ばつまらないな、と思いながら。

「錦馬超、参る！」

最後になるであろう撃ち合いの前に、名乗りを上げて自らを鼓舞する。

「アアアアア、アアア　　！！！」

そんな翠を嘲笑うかのように、最大の力を込めて、大將は斧を振るう。

人の身体など、簡単に分断できるほどの威力だ。

「……………くっ、う」

しかし、翠は顔をしかめながらも、難なく受け止めた。

その行為は、相手に動揺と驚愕と隙を与えるに十分すぎた。

「おらあ　　！！！」

横薙一閃。

翠は相手の首を跳ねた。

「敵將、錦馬超が討ち取った！」

西涼軍より歓声が上がる。

一方で、五胡では動揺が広がっていた。

「……ふ、やはりな。　ここは、俺の部隊が殿を勤める！　貴様らは逃げるが良い」

『はっ！』

副大将の指示に従い、撤退する大将直轄の兵たち。

一つしかない　誰も陣取った形跡のない西　逃げ道へと。
自らの上司を討たれ、動揺していた彼らは知らなかった、気付かなかった。

その道が誘いであることを。

……副大将にとって、その兵たちは邪魔でしかなかったのだ。

西から時折聞こえる悲鳴と呻き声が鳴り止まない中、その会談は行われた。

「会談とは、随分な言い草だ。立場をわかっているのか？」

「ええ、弁えているつもりですが」

「貴様っ！」

社交的な笑みを携える二人。

片や指揮官、片や捕虜の二人。

捕虜の男は、どう見ても弁えていない。
それに反応した将を、指揮官は手で制す。

「ま、いいや。……で、何をしにきた？ 自ら首を捧げに、と言
うのなら、爆笑しながらその首跳ねてやるぞ？」

「貴殿に仕えたい、と。まあ、首を捧げるようなものです」

フン、と指揮官は鼻で笑う。

半分冗談、半分本気だったのだが、相手の真剣さを見て、爆笑しな
かった。

「何故だ？」

「私は、いえ私達は、強き者の下で働きたいと常々思っていた所存。
我ら羌族や北の匈奴など、蛮族に劣らぬ強さ。我らが仕えるにた
ると判断しました」

「俺を皮肉ってんのか、自分を卑下してんのかはつきりしろ」

フン、と冷笑する指揮官。

”蛮族に劣らぬ”ということも、自らを自分で”蛮族”と呼んでい
ることも、別段気にする程のことではなかったからだ。
しかし、周りにいた将たちは笑えるはずがなかった。
むしろ、殺気立っていた。

「これぐらいのことで、一々殺気を出すな。……だったら、これ
から俺が負け続けたり、最悪死んだら、どうする？」

振り返って仲間を宥めてから、再度振り返り、問う。

「裏切ります」

「なんだとっ！」

捕虜の両側の首筋に刃があてられる。

左からは十文字の槍。

右からは両鎌付の槍。

少し動かされるだけで死ぬというのに、物怖じせずに見つめる捕虜、すなわち先の副大将。

「プツ、ハハハツ!!」

突然に笑いだす指揮官、すなわち陽。

副大将の悠然として潔く、外連もない態度に笑ったのである。

「いいよ。実に良い。じゃあ……負けしないで生き続けている限り、俺に忠誠を誓えるな？」

「ええ、誓いましょう」

口角を上げ、三日月のような笑みをし合う二人。

「……はあ。また、ですか」

「仕方ないよ、山百合お姉さま。だっってお兄様だもん」

その光景を見て、頭を抱えるふりをする山百合。

それを わざとだとわかっているが 慰めるは、苦笑気味の蒲公英。

陽と一緒に戦に出ることの多い二人は、もう慣れっこだった。
……そういった慣れや共に駆けた戦場、稽古の数だけ、山百合と蒲公英は仲良くなっていたりする。

「馬超、閻行、武器を下ろせ。あと、これからのことに口を挟むなよ?」

「……はっ」

不服そうに、陽に従う二人。

仕事での立場上、二人の上司である為、従うより他なかった。

「さて、何に誓わせようか。あと、その口調止める。お前は形式上俺の部下になるが、実際は対等だ。……良いな?」

「わかり……わかった」

翠や瑪瑙は勿論、副大将も驚きを隠せなかった。
ならば、と口を開く副大将。

「……その左目、見せてくれないか?」

「お前……遠慮というもんを知らんのか」

「対等なんだろう? ならば遠慮はいらんだろう。ついで、とは言わないが、その左目に誓って忠誠を約束する」

「……ハア。わかった」

ため息を吐き、顔を近付ける。

陽の左目も見せ物という訳ではない。
誰彼構わず、万人に見せるものでもなくば、陽自身、見せたくもないもの。

周りにいる兵たちも例外ではない。

だからこそ、頻度は無論少ないが 見せるときには一対一、又は周りが視認出来ないほどに近付くのである。

「っ!?!? そつ、それは……」

「どうかしたか?」

今までで一番、というより初めて動揺を露にしたことを疑問に思う陽。

「いや、何でもない」

「ふうん、ならいい。さて、お前らの処遇だけど、……どうする?
半々で分けるか、そのままで羌に帰るか、の二択があるぞ」

「はあ?」

声を上げたのは誰か、はたまた皆かは分からなかった。

(どういうく むぐっ)

(翠お姉さま、黙ってて!)

(……とりあえず、陽君に任せておいてください)

(ボク達は黙っている、と?)

(……そういうことです)

「だーから、お前とお前の部下の半分は必ず羌に戻ってもらっ、って言うてんの。あと半分はお前が決める」

「……ふむ。なるほど、そうか。ならば連れて行く。多いに越したことはないからな」

「ならば行け。こっちからの用があれば、追って連絡する」

「了解したぜ、旦那」

「旦那は止めれ」

S i d e
陽

ケン さっきの大胆不敵男 直属の五胡兵らが北へと帰ったのを見送って、自分の天幕へと入る。

「ふう、やーっと終わった」

「おっにいっさまあ〜!!」

飛び付いてきた蒲公英。
地味に痛い。

「あのなあ、毎度毎度ホントに……。天幕内だからいいけど、兵の前でやったら怒るからな」

「わかってるよ」

その辺は自重してるから許してるんだけど。

「で、だ。陽、なんで全員帰らせたんだ？ 言い方は悪いけど、人質として半分残すのが普通じゃないか？」

……絶句した

翠姉からそんな言葉が。

「偉いぞ、翠姉！ そこまで自分で考えるなんて！」

ぼんぼんと頭を撫でる。

……最近、撫でるのが癖になってきた気がする。

「……いつもあたしが、何も考えていないかのような口振りだな」
睨まれた。

別に恐くないけど。

「じゃあ、アンタはいつも何か考えているのか？」

「……そ、そう言われるとだな」

「ふ。やっぱりじゃない」

瑪瑙はまた余計な茶々をいれやがって。
しかも、嘲笑付きで。
どーせ喧嘩オチになるだろ。

「んだと！ やんのかコラ！」

「上等よ！ やってやるうじやない！」

ま、そろそろとめようか。

「まあまあ、もちつけ。すぐに喧嘩腰になるのは良くないぞ」

「」「うっさい！」

何故か黙らされた。

何故なんでしょうねえ。

「落ち着く」

「関係ないのは」

「引っ込んでろ！」

あゝん

フッフ、そうですか。

「そんなにも……死にたいのですね。結構なことですよ」

殺気を上げる。

翠姉も瑪瑙もガクブルしてるが、許さぬ。

「お兄様……寒いよ」

む、そう言われてはかなわん。

殺気（つか、冷氣？）を出すのをやめる。

「……二人共、命拾いしましたね」

「……ああ」「……そうね」

反省しているのか、しおらしくなった二人。
良かった良かった。

さっきの話の続きだが、翠姉の言うように、人質として置いておくのも一理ある。

なにより、戦力としての 羌に限らず 五胡の皆さんは素晴らしい。

ほとんどの者が馬に乗れ、かつ騎射っていうんだっけ（俺の記憶での名は流鎚馬だったか？）が出来る。

申し分ない練度を誇っている。

……だからこそ組み入れにくい、という点もなくはないが。
しかし、だからといって受け入れを完全に拒否して、という訳でもない。

以前にも、何度か降ってきた者はいた。

その中で、俺の隊に入った奴は何人もいる。

そいつらは、俺に絶対的な忠誠を誓った。

だが、今回は違う。

名目上は俺が上だが、対等で、持ちつ持たれつの関係にある。

同盟を組んで直ぐに裏切ることに、利が全くない。

さらに、俺が奴に力を示す限り、裏切ることはない。

だからこそ、逆に信用できる。

俺が負けさえしなければ良いんだからな。

それに、向こうに多く帰ってもらった方がより良い不満を持つことが少ないだろうし、何より、やってもらいたいことなんて幾らでもある。

だから、正直どつちでも良かったんだな、これが。

「あ、そだ。 蒲公英、翠姉、良くやった」

蒲公英は先鋒、かつ誘い役。

翠姉は敵将の撃破。

未だに抱き付いている蒲公英と、（何故か（笑））涙目で座り込んでいる翠姉を撫でる。

「えへへっ」

「……………」

終始ご機嫌な蒲公英。

煮え切らない感じの翠姉。

……………従姉妹なのに似てなさすぎる。

「失礼します。 馬白様！ 後始末、完了しました」

天幕の外から、部下のその声が聞こえた。

後始末とは、死人の埋葬。

西のなだらかな山に挟まれた 敢えて旗印を上げなかった 道
で死んだ者たちを、だ。

そこでは、虐殺ともいえる程の一方的な戦が行われた。

……………まあ、俺が伏兵として弓兵をおいたんだけどさ。
誰も彼も、死んだらただの肉片だ。

死体を放置しといて道が使えなくなるのも困るし、疫病が流行る可能性がないわけでもない。
だから埋めとくんだ。

「わかった。……では帰還する！」

Side 三人称

その頃の天の御遣いはというと……。

「えっと、『その地より北方五十里に黄巾軍あり。規模は大きめの二万ほどで、黄巾軍の食料補給の要所。軍資金の三割を同封する。遠慮なく使っても結構。使い渋るも結構。使っても使わぬもあなた方のお心次第。ただし、返還は不要。ただ民を救う為にお使い頂ければと。漢皇室劉宏封西涼太守馬騰直轄預奉所軍所総監督馬白（かんこうしつりゆうこうがほうぜらるはせいりょうたいしゅばとうちよっかつあずかりたてまつるところいくさどころそうかんとかばはく）』最後長ッ！」

思わず書簡にツツコミを入れる天の御遣いこと一刀。読み上げた後だった為に、ノリツツコミみたくなっただのは仕様である。

流石に、天の御遣いに集う愉快的仲間たちも苦笑する。

「なんだよ、このネタな役職は……。しかし、馬白、ね」

（そんなやついたっけ？）

と、疑問に思う一刀。

現代で、三國志には常人より興味があった。

他の人より知っている、という自信すらもつほどには。

「ホント、誰だ？」

「はわわっ！ 知らないのですしゅか！」

「あわわ〜。朱里ちゃん、落ち着いて」

興奮する諸葛亮を宥める鳳統。

しかし、その鳳統の鼻息も少し荒かった。

そんな二つの様子に、陽のことを知らない三姉妹と一刀は、若干引き気味である。

「狼さんで、英雄の一人で、死神で、商人で、悪の善政者なんですよ！」

「……ゴメン、朱里。話が全く見えない」

諸葛亮は、能力的に（武力以外）陽を上回っているにも関わらず、かなりリスペクトしている。

圧倒的なまでの情報を持ち、軍略、政治、商売にまで精通し、指揮をとっては軍師として、非情な策をも執る。

やり過ぎと思われる節がなくもないが、陽は軍師の鏡に近い存在なのである。

「朱里がそこまで興奮するとは……とりあえず、すごいのか」

う〜む、と腕を組んで、唸る一刀。

「そんなチートな奴が、ホントにいるのか？ はたまた俺と同じく

イレギュラーなのか？」

その咳きには誰にも届くことはなかった。

ときを同じくして……。

「雪蓮！」

「んー、なあーにい？」

珍しく書類仕事に明け暮れ、頂垂れ気味の孫策は、周瑜の呼ぶ声に気のない返事をする。

「これを見る」

「んーと、何々『南陽より南東四十里に…略…お使い頂ければと。』

漢皇室（ry）これがどうかしたの？」

慌てて私に見せる必要があるものでもないじゃない、と続ける孫策。読み上げた内容は、劉備らに送った先ほどの物とほぼ同様で、陽が送る書状としては何の変哲もないものである。

そのことを孫策自身が知っていて、周瑜が知らない訳がないのだ。

「いや、内容としては問題ない。が、同封されていた金がな、……五割近いんだ」

「うーん、間違えたんじゃない？ ほら、向こうとこっちじゃ戦に掛かるお金が違ったり、とか」

とりあえずの仮説を立てる孫策。

「それはない。辺りの諸侯には、規模や距離、行軍の速さまで計算された上での三割の金を出資している。間違えはしないだろう」

それを否定する周瑜。

陽は変にキツチリしているのである。

「だったら、たぶん孫家に味方してくれてるんじゃない？」

次は、率直な勘を言う孫策。

「そうとしか考えられないだろうな。しかしだな 「あら。私の勘は当たるのよ？」 そう、なんでもかんでも勘で当てられては、私の立つ瀬がないじゃないか」

それを否定はしない周瑜。
分かっているのだ。

孫策のいう通り、孫策自身の勘はよく当たるということを。
軍師泣かせの勘が外れないということ。

「送り主が、馬騰さんの子だから、ってのは理由にならない？」

「私はあとのせサクサクが嫌いだ」

「……は？」

周瑜の言葉に思わず呆気にとられる孫策。

冗談っぽい言い方であった為そうなってしまったが、言い分としては至極真つ当なこと。

勘から推測して、理由を後付けするのは、軍師としては好ましいことではないのだ。

「冗談だ。……確かに一理としてあるかもしれんな」

だが、過去を思い返せば、筋が通っていない訳ではないな、と思った周瑜は認めざるを得なかった。

「ところで雪蓮、それはなんだ？」

「ん？」

2センチ四方程まで折り畳まれた紙が机にあった。

書簡を開いたときに落ちたのだろうと判断し、孫策は開いてみることにする。

すると、みるみるうちに目が鋭くなった。

「……どこまで知っているのかしらね」

辺りを照らしている火でその紙を燃やす。

……この時代、紙はまだ高価なものだから、そうしなければならなかった、ということだ。

「なんと？」

「『来るべき日にお使い下さい 陽』だって」

「危険だな」

「ええ」

陽は語る。

「あの戦の後に字を戦功と成人を理由に貰ったんだ。翠姉と一緒にね」と

第二十二話（前書き）

メインヒロインが出ていない、だと……！？
と思り返すけど。

あ、それ割とよくあるわー。
と、自分で思う今日この頃。

進まない……。。

第二十二話

「死ぬる」

机に身を預けながら政務に励んでいる陽でございますよー。

まあ、戦後処理だから仕方ないことだけどさ。

今やってるのは主に戦中の状況報告。

さて、後日談といきましょう。

まあ、そんなに大層なもんじゃないけどな。

羌勢が2部隊、計一万ほどで攻めて来ること。

その大將が短気なこと。

そいつらが北の道から衢地　　各方にのびた道の収束地　　に
来ること。

その途中の林は、年から年中霧に覆われていること。

西の道は傾斜の緩い山に挟まれていること。

それら全てを知っていた俺たち、つか俺は、敵部隊を殲滅すること
を選んだ。

……皆が小競り合いに飽き飽きしていたから、ということも否定出
来ないが。

ま、とにかく、大將の性質上、先鋒は蒲公英と決め、蒲公英と翠姉

を少し早めにそこに行かせた。

下見と準備　霧の濃さの把握とそれへの適応　の為にだ。

二十話で二人がいなかったのはこの為だ（メタ発言

んで、その1日後に、後続というか本隊として俺、山百合さん、瑪瑙が今回の戦場に到着。

すぐに西の道を挟む両山に、弓兵一千ずつを伏兵として配置する。

待つこと1日、ついに敵がやってくる。

蒲公英による言葉攻めによって発情（？）した敵の大将達を、霧で撒いて攪乱させ、篝火を使って衢地へと釣り出す。

勿論のこと、このときの蒲公英の部隊は霧の中だ。

連れて来ていたもう二千の弓兵に、羌勢が出てきたところを射させる。

そのあとは翠姉の独壇場となって、大将を討ち取る。

そいつの直轄であった半分は、運悪く西へと撤退したことにより、本来いた数の四分の一程度までに減らした。

……まあ運も糞も、西の道を通るといって一択しかなかったんだけど。

最後、副大将のケンを降して、羌に送り返す。

と言うより、味方を増やしてもらおう為に送り込んだ、が正しいんだが。

終わってみれば、被害は三桁にとどくかどうか。

完勝と言える戦いだ。

……ケンの部隊も真面目に攻めて来ていたら、もっと甚大な被害が及んでいただろうけど。

はい、終わり。

至極簡単なことだっただろ？

大切なことは二つだけ。

一つは知ること。

ほら、孫子さんが言ってただろ。

彼を知り己を知れば百戦して殆からず、（だったっけ？）って。

もう一つは備えること。

これも、備えあれば憂いなし、って言うだろ。

それに、準備が大切だと僕は思ってるんで、って、どごぞのサッカー

ー（？）選手が言ってた気がする。

まあ、いいや。

本日の仕事は、これにて終了！

母さんに提出したら俺、怠惰な午後を過ごすんだ……。

「死亡フラグをわざとであろうと、口にするべきじゃなかったぜ……」

……

暇なら書庫の片付けしてこい、孫子の第三篇見つけだして持ってこい、って言われたよ！

母さんや……人使いが荒いぜ。

つか、フラグってなんだっけ？

「……ぶえつくしよい！」

埃っぺえなあ、おい……。

「だっ、誰っ！」

どうやら先客がいたようだ。

「あら、瑪瑙じゃん。なんでここに？」

「そっちこそ、なんでここにいのよ」

いや、こっちの質問に答えろよな……。

まあ、別にいいんだけど。

「書庫の片付けをさせられに来たんだよ」

「奇遇ね。ボクもよ」

そこ、少し喜ぶとこじゃありませんよー。

終わらぬ……。

無為に広い癖に、要るもんから要らんもんまでごったがえしてるとか、ねえ。

とりあえず、いる、いらない、わからない、に分別しているのだが、なかなかにして終わらない。

まあ、暇潰しにはなるんだが。

次に、と取った一冊の本の中をパラパラとめくる。

「ん？　これは……」

見れば、日記だった。

因みに、薊さんの、だ。

しかしながら、まだ半ばまでしか書かれていない。

最後に書き留められたのは、その項を見る限り、もう十年以上も前かららしい。

その項の題名は、

『成公英、死す』

……なかなか重いものだった。

だが、俺の知的好奇心を満たすものとしては十分すぎた。

「兄上が死んだ。

何故兄上が死なな　ばならないのか、今になっても一向にわからない。

義姉上は、兄上を殺した賊どもを皆殺しにし　らあと、脱け殻の様になつてしまわれている。

そんな義姉上を元氣付けようと、未だ五つを数えたばかりの翠や、

一番の臣下である山百合が健気にも奔走し　るが、作り笑いを浮かべて礼を言うばかり。

その気持ちは痛いほどよくわかる。儂とて、関係を持つ　た身。

悲しくない訳がない。

しかし、兄上と義姉上の間柄は儂のそれより深い。半身どこ　はなく、全身を失つたのだ。計り知れない悲しみがあるのだろう。

儂には何もでき・い。

本当に何も・きない。

慰めるこ・も諫め・ことも。

結局、今回もまた、殿に救って・らう他ない・だから。
駄目・女だ、儂は。
す・。す・ぬ。・まぬ。牡丹、こ・な儂を許し くれ。』」

いかんせん古いので、擦りきれていたり、滲んでいたりして見にくかった。

だが、生憎と軽々しく言葉が出せる内容じゃなかった。

「『死因は、背中に受けた矢　　る失血だった。』」

だが、その身に数十の矢を受け　　お、倒れることなくずっと一人の少女を抱え　　た、いや、庇っていた。子供を守り、死すとは、
な　　も兄上らしい、と不躰にも思ってしまった。
その守り通した少女は　　」

「ああそれ、ボクのことよ」

「え？」

はっ、として後ろを見れば瑪瑙がいた。

「何度呼んでも無視するから、来てみれば……」

じとっ、とした目で見られる。

だが、瞳は悲しみに彩られているような気がした。

「すまん。ちょっと気になっただけ」

主に成公英、つてのが。

「ふうん……」

「……………」

「……聞かないの？」

「まあ、色々とあるんだろ？ 個人のことには軽々しく干渉するほど、俺はサイテーな人間じゃないぞ」

敵ならともかくとして、家族にそんなことはしない。敵なら、うん。

個人情報全て把握してやっても良い。覚えるのは無理だから、書き留めるようにしてたり。

「……独り言だから気にしないでね」

「ん」

中断していた分別を再開する。なるべく音は立てずに。

「そのあと、ボクは母様に保護された……身寄りがなかったから、娘になった」

「ふん」

「その時から、男は大嫌いと言ってきた」

あれ、なんか話全然違くない？
別にいいけど。

「でも、それはウソ。……ただ近付けさせたくなかっただけなのよ」

「ふんふん」

「恐いのよ、男が。どうしようもなく男が、……怖い」

なる。

トラ……心的外傷な訳だ。

「戦では、武器を振るえばいいから問題ないけど、普段近付かれる
すぎると、途端に動けなくなるの」

やっぱ、抱かれたまま死なれたから、なんだろうね。

成公英に悪気はないとしても、だ。

「だから、陽にも負けたんだけど」

初めて真名を呼ばれた気がするなー。

なんとなく嬉しい。

でもなあ、これって独り言なんだよねえ。

そう、俺は瑪瑙に何度か勝ったことがある。

西涼で二番目につおい瑪瑙にだぜ？

おいそこ、もっと褒める。

ま、瑪瑙の言う通りなのだろうさ。

瑪瑙は長めの両鎌槍（だったか？）で中距離主体だ。

だが実は、その槍は三節槍とでもいうのか、三つに折れる。
だから、近距離にも一応対応している。

だが、俺は剣と拳。

近距離〜至近距離主体なのだ。

俺自身、勝ちパターン……決まった勝ち方、つまりは至近に入れば勝ちだ、ということに気付いてはいたけど。そういうことだったのか。

「なら……俺はどうなんだろうなー？」

俺のこれも独り言です。

「怖い」

そ、即答ですか……。

ただの独り言のはずなんだがなあ。

「世の皆が思うように、ボクも、馬孝雄という人間……狼が、恐ろしいと思う」

「そら、恐れさせるようにしてるからね」

「陽も怖い。ボクが歩み寄れない程、怖い」

おかしいな。

俺、どんな人でもバチコイ！

みたいな雰囲気を出してるはずなんだけどな！

おいそこ、どの口が言っている、とか言うな。

「そか。俺が恐ろしい、ね。……絶対母さんの方が恐ろしいと思うけど」

本音です、はい。

凶星だったらしく、ビクツと肩を震わす瑪瑙。

「ボクも、母様の娘になってもう十数年になるけど、……未だに、牡丹様が、恐いの」

……やっぱり、と思う。

通りで、二人に微妙な距離があると思った。

「母様の義姉なのに、今までも優しく接して頂いたのに、恐い。恐いの」

「……………」

なにも言わない。

正直、返す言葉なんてすでに浮かんでいるから。

「八年前、さっきの本によって事実を知ったときからずっと、恐くて」

自分がいなければ死ななかった。

自分がいたから死んでしまった。

そう、何度も頭を廻っただろう。

そして、自分が殺した、にたどり着いてしまったのだろう。

「ボクが武を磨いたのも、負けたく、グスツ、ないのも、牡丹様にとって、ボクが有益なモノで、ヒック、在り続けないと、捨てられる、殺される、と思ったがらで、それで、それで……………」

最愛の旦那を失わせた、という気持ちが大きくのし掛かったのだらう。

母さんから恨み、憎悪を買っていると勘違いしたのだろう。洩らす嗚咽や流す涙で、容易に判断出来る。全く、母さんも罪な女だ。

「もう泣かなくていい」

瑪瑙を抱く。

こうしていると、皆、俺より小さいんだなー、と妙な感じを覚える。

「良く全部言えたに。偉い、偉い」

子供をあやすように背を擦り、頭を撫でる。

反抗的に見上げてくる赤くなつた目も、今は子供のそれにか見えない。

「母さんと似ている俺から言わせてもらえばだな、被害妄想だよ、それ」

「……え……？」

勝手に勘違いして、勝手に危害が及ぶのを恐れているだけ。

まあ、当たり前な対応を無視して優しくされると、逆に勘繰ってしまふのは、仕方のないことだとは思っけど。

「俺や母さんみたいな人間は普通、大元を恨む、憎む。今回の場合は殺した賊どもをね」

それが普通だと思うんだけど。

そう簡単にはいかないのが人間というもの。
残った一人を妬み、責める者たちもいる。

……何故お前は生きている。

……何故お前だけ死なない。

……お前に生きている価値などないのに。

……消える、失せる、顔を見せるな、死ね。

……さつさと死んで見せろ。

全く、くだらない。

「大体、お前は守られた側の人間だ。実際に手をかけた訳じゃねえ
だろ？ だったら、お前は悪くないじゃねえか」

「で、でも……！」

そう簡単に割り切れることじゃねえのは分かる。

大切なモノを奪うつてのは、それほどの事だ。

だが、瑪瑙が悪くないのも事実だ。

あの時は無力な子供に過ぎないんだ。

それは、どうしようもないことだ。

納得出来ない、って顔だ。

「それじゃあ、薊さんはいつもなんて言っている？」

「……儂の大切な娘だ、って」

気恥ずかしいのか、俺の胸に顔を埋める瑪瑙。

別に構わんのだが、汚いぞ？

「そう、それ。おかしいだろ？ 薊さんも関係を持っていたんだ…
…母さんが恨んでいるなら、薊さんも恨んでいるとは思わなかった
？」

「……………」

「それに、誰が好き好んで、恨みの対象を義妹の娘に迎え入れるか
よ」

「……………自分が恨めしい」

俺の服を握る瑪瑙の手に、力が籠る。
恨みの対象を懐に入れるようなマネ、俺は絶対出来ないね。
だから、母さんも出来ない。
つてことは、瑪瑙を恨んでいない。
実に簡単だろう？

白くなるまで握られた手を優しくほどいてやる。

「謝ればいいんだよ……………今からな！」

「え？ ひゃっ！」

俺が一步下がると同時に、瑪瑙の後ろから抱き付く者。

「しどいわぁ！ こーんなに愛しているのになぁ……………」

なんともいえない苦笑いをした母さんである。

「ぼぼぼ、牡丹様っ!?!」

「ぼぼぼ牡丹ですよー。瑪瑙から見た私、極悪非道の極みじゃないのー」

「それは、その……」

「いいの、言わなくて。しかし、なんで私だけ恨んでる、って思ってたのかしら？」

もじもじとしている瑪瑙。
居心地が悪いのだろうね。

「柄悪いからだよ、たば　「んん？」　ほら、それだ！　その眼光！」

恐いんだよ、その目。

「陽が言うことではないわね」
だから、心を読むなと

「今、読んでなかったけど？」

「ちょうど今読んだから、どっちみちアウ……駄目です」
もう反則だろ。

「それでね、瑪瑙」

「あるえ？　無視？」

「陽、ちよつと黙つてなさい」

……ええー。

なにこの仕打ち。

「貴女はね、ウチに来たときから、薊とあの人の間の娘なのよ。だから、薊にとって貴女は宝なの。私にとっての翠と同じように、ね。それを分かってくれただけで、私は嬉しい」

「じゃ、じゃあボクは、……牡丹様にとって、……なんなのですか？」

俯き気味で言葉を発する瑪瑙。

いまにも消え入りそうな声色。

不安で仕方がない、といった様子だ。

「私？ 迎え入れたときからずっと変わらない。私の大切な家族の一人よ」

「……ほん、と……うに、です、か？ ボクに、何の武もない、ただの女、だったと、しても？」

「家族になるのには武才や知才が必要、なんてくだらない定義、あると思う？」

「あり、まぜん」

涙で顔をぐしゃぐしゃにして、母さんに抱き付く瑪瑙。
慈愛の眼差しで、母さんは瑪瑙の背を撫でる。

ま、これで元来あらぬ溝は消え、距離も縮まっただろう。
良かった良かった。

「つか、母さん、何時からいたのさ？」

「そんなに私って恐ろしいかしら？」

だから、質問を質問で返さ　あ、やべ。

「後で私の部屋に来なさい」

「……………うーす」

後々聞けば、孫子持ってこいって言ったはずが、あんまりにも遅かったのを見に来たらしい。

ちよつとだけ、ニヤンニヤンしているのを期待していたそう。

……………ニヤンニヤンって、なに？

Side 三人称

「なーんかクサイな……………」

様々な書簡を並べ、陽は眩く。

成公英の死に興味を持ち、調べてみれば不可解な点が幾つかあった。

「ちょっと調べといて」

「御意」

情報が足りない、と判断した陽は、何もないところに声を掛ける。すると、そこに静かに誰かが現れ、すぐに姿を消した。

その頃の天の御遣いはというと……。

とりあえず、フラグを乱立していたそうなの。

畜生！

なんて羨まそう　羨ましい！

ああ、鳳統ちゃん、可愛いよ鳳統ちゃん。

そんな間諜の報告に、陽が頭を悩ませることなるのは言わずもがなである。

陽は語る。

「母さんの部屋に行ったら、純粹に礼を言われた。ありがとう、って。凄く意外だったよ。」

あ、そうだ。あと、俺たちが羌と殺り合ってた間に、趙雲が来てたらしいよ
と

第二十三話（前書き）

またいきなり飛んだ。

キングクリムゾンというやつですね、はい。

それでも相変わらず日亭編。

第二十三話

S i d e 陽

パアン、と部屋に響く。

一瞬、なにをされたのか分からなかった。

瞳に涙を目一杯溜めた蒲公英を見るまでは、ただじんと頬が痛むだけだった。

「お兄様なんて、大ッ嫌い！」

「ちよつ、あ……」

延ばした右手が空を切る。

逃げられてしまった。

「なんで、……」

なんで怒っているのか、理由が全くわからん。

前話の未登場が祟ったのか？

左手で叩かれた左頬を触れば、腫れ上がり、熱を帯びていた。真っ赤になってるだろうことは容易に想像できよう。

あーあ、親父にもぶたれたことなかったのになあ。

……親父、ね。

まあ、いいや。

さ、仕事仕事！

「そんなに、母さんに嫉妬心を掻き立てさせたいのかしら？」

「……なんでだよ」

開口一番がそれって、どうかと思うね。

「どれだけ頼に紅葉を作ってもらえれば気がすむのよ」

いや、そんなこと言われても、ねえ。

こっちが聞きてえよ。

皆がひっ叩いてくるんだもの。

一番理不尽だったのは、翠姉がおもらししたって 別に聞きたかった訳じゃないのに 蒲公英に教えられ、俺が叩かれる、というものだった。

……翠姉が武器を持ち出して来なかっただけでもありがたいと言える、のか？

「とりあえず、経緯を話してもらおうかしら」

「なんで話さなきゃいけない流れになってんだよ」

いやまあ、別にいいんだけど。

最近（と言っても一月前だが）、黄巾の乱が終息を迎えた。

それによつていろいろと忙しくなり、机に突つ伏して寝ることも多かつた。

が、昨日はたまたま量が少なかったので、久方ぶりの寝台にありつけた。

そして明くる朝、すなわち今日の朝、起きてみれば、蒲公英が隣に潜り込んでいた。

……言つとくが、こんなことはよくある話だからな？

蒲公英の寝顔を堪能しつつも、起こさないように寝台を出て、その傍で瞑想をする。

無心つて大切だろ。

そんで、蒲公英が目を覚ました時、蒲公英が乞えば、横抱きで抱き上げて起こしてやる。

この一連の動作はいつも通り　色々と言弊があるが割愛する
で、なんら問題はなかつたはず。

……まあ、横抱き（いわゆるお姫様抱っこ？）したとき、少し重いと感じたんだけどね。
だから、

「太つた？」

と聞いたのだけど、その直後に叩かれたんだよ。

考え直してみたが。

……結局、なんで叩かれたのか、全くわからん。

「はあ……。陽、アナタねえ、女の子のことを少しは考えなさいよ」
右手で頭を押さえる母さん。

「なにを？」

ダメだコイツ、なんとかしないと、みたい目をしないで！
ああっ、ビクンビクン！
……なんてね、冗談だ。

「……………」

「すみませんでした」

「ん、素直でよろしい」

俺でも分かる。
今のはだめだ。

「……………ま、他の子にも聞いてみなさい、それ」

「わかった。……………母さん、太っ たあ！」

書簡投げられた。
いつてえ……………。

「誰が私に聞けと言った？」

あん？って感じで睨む母さん。

「すみませんでした」

……マジ恐ええ。

「薊さん、太　　ってえ！」

パカッ、と書簡で殴られる。
結構おもっ切りだから、めっちゃ痛い。

「久方ぶりに登場したかと思えば、それか？　どうなんじゃ、んん
？」

「日記の筆者として登場して　　ったいの！」

また殴られた。

てか、メタ発言はいいのか、作者。

……メタ発言、って何だ？

「それは儂であって、儂でないわ！」

「まあそこは、ねえ？」

「何故に疑問形なんじゃ……」

ジト目の薊さん。

俺が預かり知ることじゃねえしな。

それに、……言えない。

ババアに焦点（昇天？）当てるつもりはないなんて。

ネタが思い付かないなんて（これもメタ発言（？）じゃないか？）
言えないよ……。

「……フツ」

とても柔らかな笑みを浮かべる薊さん。

……墓穴つたな、こら。

「一回、逝ってこんかい！」

無駄のない動きをもってして、書簡による脳天への打撃。

無駄に無駄がないぜ！

スコオーン！！

と、良い音が頭の中で響く。

……痛いなんてもんじゃない。

だって、角だもの。

「~~~~~！」

「反省したなら、俺中心の話を一話書けと言っておくのじゃぞ」

イエス、ママ！

了解であります！

次元を越える頼みであろうと、叶えて見せましょう！

アカン、頭おかしくなってる！

……つか、あんたも読心術使えんのかい。

「あ、山百合さん、最近太　つぶねえ……」

短剣の投擲は駄目だと思うよ。
生死に関わりません。

「……何か言いました？」

いつも通りに（？）笑む、山百合さん。

……でも、なんか恐いな。

「だから、太　ぬおっ！」

右足退いてなかったら、床に縫い付けられてたよ？

「……何か、仰いました？」

にこやかに笑む、山百合さん。

……いやー、冷や汗が止まらないなー。

「なな、なんでもないデスヨ。ただ、いつも通り、可愛いなあ、と」

「……そう、ですか」

山百合さんは、後ろを向いて、一目散に走り去ってしまった。

……耳が赤かったのは気のせいだろうか。

てか、いつも殆どが無表情なんだから、笑んでた時点でおかしかったのだ、と今気付いた。

「瑪瑙さん瑪瑙さん、最近太っ　　なな、なんだよ？」

襟を掴まれる。

ちよっ、吊るされる勢いなんですがつ！

「何処が!？」

「……はあ？」

「だから、具体的に何処がって、聞いてるのよ!」

今までの皆さんの反応と全く違うんですけど。

なんか必死なんですけど。
てゆうか、具体制を求められても、ねえ。
元々思ってもいないことだし。

「あー、……胸周り、って言って欲しいの？」

瑪瑙のそこは絶壁です、はい。

その為、まな板取って、と言ったとき、殺されかけたのは記憶に新しい。

……別に、薄かろうがたわわだろうが関係ない、と俺は思っけどな。

「……こんの、バカー！」

グボハアツ！

ナ、ナイスストレート。

「フンツ！……ばか」

憤然として瑪瑙は去ってしまった。

俺、放置っすか。

そっとう趣向ですか。

などと考えていたので、瑪瑙が最後に呟いた言葉は聞き取れなかった。

「翠姉さ、最近、ふて あべしっ！」

翠姉の槍 銀閃 の柄で小突かれる。

……いつも思うけど、どっから出すのよ、その槍。

っーかさあ。

「まだ最後まで言っていないのに、どういふことさー！」

布団が吹っ飛んだ、と言うかもしんじゃないじゃない。

「そりゃあ、お前が会う人会う人に聞いているもんだから、自然と耳に入ってくるって」

呆れ顔で言われた。

……そらそーだわな。

「ああ、そうだ。……蒲公英に謝つといた方がいいぞー。相当気にしてたみたいだからな」

「……………」

目を大きく見開いてみせる。

「なっ、なんだよ、その意外そうな顔は！」

「いやね、まさか翠姉に諭される日が来るなんて、ってね」

割と本気ですけどなにか？

「おい。いくらなんでも失礼過ぎやしないか？」

「まあまあ、そんなかつかすんなって」

ぼんぼん、と翠姉の頭を撫でる。

イラッ、ときたらしく、手を払われた。

「怒らせたのお前だろ！」

「冗談だつて。いつものようにからかったただけだつて」

「なお悪いわ！」

「さっきから叫んでばかり。……喉、潰れるよ？」

「はあ……もういい。とにかく、謝つとけよな」

「了解ですき、翠ねえやん」

「はいはい」

軽く流された。

面倒になったんですね、わかります。

……いやあ、やっぱり翠姉をからかうの面白いなあ。

そのあと、茜と藍のどこに行つて同じ質問をしたら、別にそんなことない、って普通に言われた。
むしろ、痩せた？って聞かれる始末。

……なるほどねえ、と思った。

俺が衰えたって訳だ。
別に蒲公英が太った訳じゃなく、純粹に俺の持ち上げる力が衰えた
せいで、重く感じたよ。
それを、俺が勘違いしたから怒ったよ。
そういうことね。

結局。

土下座したけど、簡単には許してはくれなかった。
蒲公英は1日中俺に口を利いてくれることはなかった。

……ただ。

俺にとって、こんなにもつまらない日は、

金城に来てから。

茜と藍が家族に加わってから。

初めての戦を経験してから。

更なる家族二人に会ってから。

馬家に迎え入れられてから。

そして蒲公英に出会ってから。

一度としてなかった。
そう、一度として。

Side 三人称

一方、天の御遣いというと……。

趙雲を新たなる臣下、いや仲間に加え、封ぜられた平原に於いて、劉備と共に政務に忙殺されていた。

だが、今は束の間の休憩時間。
机に身を預け、たればんだのごとく、ぐー垂れていた。

「失礼しましゅ！（はう／あう）」

いつもの如くかむ諸葛亮と鳳統に苦笑しつつも、その二人の持っているものに注視する天の御遣いこと一刀。

「あれ、疲れからかな？ ……おかしなものが見えるな」

この時代に有り得る可能性が、限りなく低いものがそこにあった。

「ご主人様、桃香様、休憩時間にこれをどうぞ」

「西方で有名な、けえき、なるものでしゅ！ ふわふわしてて、とても 「はわわっ！ 雛里ちゃん！」 あわわ！ ……申し訳ありません」

「あまりにも美味しそうだったので、雛里ちゃんと先に食べてしま
いました」

二人とも必死に頭を下げる。

「構わないよ」

「仕方ないよ」。すっごく美味しそうだもんねえ」

そんな二人を笑って許す、一刀と劉備。
流石である。

（いや、おかしくね？

流石に三國志の時代にケーキとかないだろ。

まあ、元々、結構おかしいからなあ。

……喫茶店とかあるし。

その流れで認めてもいいもんかねえ）

その中で、一刀は色々と考えを廻らしていた。

「うん、うまい」

なら、いつかなー。

と、かなり楽観的に判断する一刀。

……本来ならば、もっと警戒するべきだった。
何故なら、西方だから。

だが、一刀と両軍師とでは、西方、の解釈がまるで違っていた。

一刀は大秦と。
西軍師は西涼と。

陽は語る。

「なんであんなにもつまらなかったのか……今なら手に取る様になる。もう、あの頃の時点で蒲公英が好きだったんだ」と

第二十三話（後書き）

西涼というか涼州に、殆ど黄巾関係なかった（気がする）から、書きようがなかったり。

他の人視点で書いてもいいんですが、もっと進みが遅くなりそうなので。

第二十四話（前書き）

なんかしっくりこない。

そして、進まない。

第二十四話

S i d e 陽

「兄……きて……」

んだよ、うるせえな。

「陽兄、……き……ってば……」

まだ寝てんだろぅがよ。

おいそこ、反応してる時点で起きてるんじゃないか、とか言っな。

「陽兄！ 起きてよっ！」

「ふぐおっ！」

腹部への痛打。

あるうことか、肘打ち。

誰かが跳びのってきた拍子に当たったらしい。

クソ痛え……。

「誰だっつてんだよ、俺の情眠の邪魔をするやつはよ……」

折角の休暇ぐらい寝かせるよ、コンニャロー。

「……ごめんなさい」

「んん、藍か」

意外なことに、馬鉄こと藍がのし掛かっていた。

つか、ごめんなさい、しか今まで言っただけじゃないか？

……深くは触れないでおこう。

「で、どつたのさ？　なんかあった？」

「ええ〜と、その……」

「あー、言いにくくなったならごめん。もうすっかりきっちりしゃつきりすつきり目、覚めたから。邪魔にはならんよ」

藍の頭を撫でる。

そんな不安そうな顔されたら、罪悪感が込み上げてくるじゃないか。

「……ホントにいいの？」

「おうさ。弟に嘘ついてなんになるよ」

藍にニツ、と笑いかける。

作り笑いじゃなく、自然に溢れる笑み。

そうすると、藍も笑顔になってくれた。

子供はやっぱ笑ってないかね。

「じゃあ、……陽兄、僕に稽古つけて！」

「……なんですと」

なんてこった……（泣）

Side 三人称

警邏にでようとしていた蒲公英は、偶然にも頂垂れ気味の陽と嬉々とした様子の藍と出会う。

「えーっ！ 藍、お兄様に稽古つけてもらっの！？ ……いいなあ」

「えへへ いいですよ」

「羨ましがるところでも、嬉しがるところでもねーよ」

理由を聞けば、陽兄にご教授賜るんだ、とVサインを送りながら藍は言う。

そんな様子に、蒲公英は純粹に羨ましがっていた。

蒲公英にとっても藍にとっても、陽に指南を受けることが 理由はそれぞれに違うが それほどまでに嬉しいことなのである。

「なんでまた？ しかも俺」

指名されるほど強くないんだがな、と陽は続ける。

一応承諾はしたものの、改めて理由を聞いてみることにした。

「ううん。陽兄が一番強いよ！ そう、皆も言ってるし」

(山百合さんはともかく、瑪瑙や翠姉、母さん、薊さんに加え、蒲公英にすら負けるんだが)

と、陽は心で呟く。

確かに、皆に勝ったことがない訳ではない。

だが、蒲公英以外には負け越していた。

……流石に兄としての体面や意地、プライドがあるようだ。

「それにみんな、陽兄に教わったほうがいいって言うんだもん」

「……なにをバカな。俺の専門、槍術、ってか長物じゃねえんだぞ？」

そこで首をかしげる藍。

「……？ 陽兄に教えてもらうのは剣術だよ？」

どうやら、槍術、というところに引っ掛かったようだ。

「……マジにか」

通りで俺か、と呟く陽。

馬騰こと牡丹や韓遂こと薊も、剣が使えない訳ではない。

が、専門外であるのも確か。
それならば、陽に教えを乞うた方が早い、と考えたようだ。

「だけど、……足りんな。武が欲しい理由が、剣術を欲する理由が、
ね」

馬家の一員となってからというものの、藍は茜とともに長物の鍛練は
欠かさず行っている。
だからこそ陽は疑問に思ったのである。

「僕は強くなりたいんだ。……お姉ちゃんを守る為に」

「ふむ」

藍はずっと姉である馬休、すなわち茜の背を見て来、追ってきた。
むしろ、それが当然だとも思っていた。

何故なら、姉の茜は強いから。

守られるのが当然だと思っていた。

何故なら、自分は弱いから。

男と女の権力、武力、知力といった力が逆転しつつある今日、男が
女に守られる、という構図は珍しいことではない。

藍と茜も、元にそんな関係であった。

だが、藍の中にあつた常識は覆された。

義兄、陽によって。

西涼の天狼とは、と問えば。

”男でありながら武に長け、知に富む、才色兼備の将”
そう誰もが揃えて口にするほど、あまりにも有名だった。

勿論のこと、藍も知っており、憧れもした。

そして数奇な運命により、会うどころか、家族という間柄にまでに
陽と藍は近づいた。

しかしながら、数日を共に過ごして、藍が陽に対して抱いたのは、
ただの優しい兄だ、ということ。

期待はずれ他ならなかった。

評価が評価だけに、もっと強烈な人物像を浮かべていた藍は、酷く
落胆もした。

……これは、陽の目指す事 過大評価による牽制 の弊害の一
例だ。

一月余り経ち、藍はたまたま早起きした。

厠から戻る途中、藍は見た。

見てしまった、と言えた。

陽の鍛練している姿を。

鋭き牙のような姿を。

別人のような姿を。

身体の震えがとまらなかった。

凍りつく思いがした。

同時に、格好いいと思った。

そして、改めて憧れた。

奮える感情を抑えて、藍は声を絞り出した。

「……よ、陽兄？」

「あん？ ……あー、藍か。 みーたーなー」

なんてね、と微笑む姿には、先程とはまた別人を感じた。
むしろ、何時もの雰囲気だった。

「将の俺、軍師の俺、そして家族の中の俺。どれも偽りなく俺だよ」
少し話をしよう、と陽は藍を誘い、朝焼けの光が射す中、二人して
中庭に座り込んだ。

「ただ、使い分けてるっつーか、なんつーか。ま、とにかく分けて
るのさ。 ……ずっと敵つい目の俺も嫌だろ？」

態と右目の目尻を指で上げて冗談めかし、苦笑いをする陽。

「……なんで」

「ん？」

「なんで分けてるの？」

対する藍は、子供故の好奇心から、率直に聞きたかった。

「うーん……」

腕を組み、陽は思案顔をする。
話すか否か迷っているようだ。

「……まあ、いいか。じゃ、藍に質問。なんで日も昇らない内に俺が鍛練してると思う?」

「……見られたくないから?」

「正解。……じゃあ、次。誰に、だと思っ?」

「うーん……皆?」

「皆、とは範囲が広いな。……答えは、兵たち。もっと具体的に言えば、俺の部下以外の兵たち」

何故そのような話をするのか、藍にはわからなかった。

「じゃ、最後。何の為に?」

「……わかんない」

ま、当然だわな、と相槌を一つ入れる陽。

「答えは、……虚勢を張るためだよ」

「……え?」

「俺っていう存在を大きく見せる為ってこと」

藍には、ますます意味がわからなかった。

「ちょっと難しいか。……簡単に言つとだな、相手に憧れさせるんだ」

「どづいづいと?」

「ほら、軍師の時の俺って、どんな印象を受ける?」

「厳しくて、怖い、とか」

もつとさ、格好いいとかさ、いつてくれたってさ。
と、一応嘆く陽。

「じゃあ、将の時の俺は?」

「厳しくて、怖い、とか」

「ちょっと待て。軍師の時と同じじゃねーか」

ほら、強そうだ、とかあんじゃん、と陽は付け足す。
まさかの同じ印象に、少し戸惑いを隠せなかったが。

「ま、あれだ。俺が裏で努力してる、なんて印象、持ったことないっしょ?」

「……あつ!」

確かにそれは言えた。

義兄が鍛練している姿など、藍は想像もしていなかった。

「こいつは凄い、と思わせれば、大体勝てるんだよ。敵にも、無論味方にもね」

その裏付けする為に隠れて鍛練してんのさ、と語り終えた陽は、藍の頭を撫でる。

「陽兄は、その虚勢ってやつで街の皆を守っているってこと？」

「……そう、なんのかねえ」

(俺が、戦なんてしたくないって気持ちが一番なんだけどな)

と、陽は苦笑する。

「……それでなら僕も、守れるかな」

「さあね。虚勢なんて、元々守る為のもんじゃない。相手の戦意を如何に殺ぐか、自分が闘わせたくないと思う人を、如何に闘わせずに済ませられるか。支点はそこにあるんだよ」

ま、頑張るこつた。

そう言いつつ、くしゃり、と藍の頭を撫でてから、陽は立ち上がる。

「さあ、飯だ、飯！」

「 藍」

「ひゃっ、ひゃいー」

義兄の呼ぶ声に、思考が現実引き戻される。

「言っとくけど、……剣術に限らず、武そのものは、相手を殺す為のもんで、守る為のもんじゃない。肝に銘じとけよ」

陽の冷たい声色にもおじることなく、藍は答えた。

「好きな人を、大好きなお姉ちゃんを闘わせずに済ませられるなら、守れるなら、誰であろうと僕は殺すよ。……たとえ、陽兄がお姉ちゃんの前に立ちはだかつてもね」

そんな藍の決意に陽はにこり、と笑うのだった。

陽は語る。

「茜と藍には毎度毎度、かなり驚かされたよ」と

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2814z/>

真・恋姫†無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！（改悪？版）」

2012年1月2日10時49分発行